
SHADE-I

青山 由梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHADE - I

【Zマーク】

Z3232D

【作者名】

青山 由梨

【あらすじ】

分岐型小説SHADEの続編。SHADE - エルートを選んだ方はこちらが続きです。物語のあらすじはSHADEの記載をご覧下さい。

違う、

ア・レ・は、雑音

何も聞こえない

あんなモノを気にしていたら

私は ゼザと同じ事をした

ダメだ、

考えるな

オレを　　忘れないでくれ

消えたくない

消すんだ　　そこには何もない

グッ　　!!

リュクシーの手を取ると、イチシはあの部屋の外へと引っ張り出した。

「あなたの選択は正しい。　　だから、息をしろ」
リュクシーは、何も感じてはならないと思い込む余り、呼吸さえも

殺して無を演じていた。

「息をしろ、リュクシー……」「目を閉じたまま小刻みに震えている姿に、イチシは一瞬躊躇したが、そのまま固く抱きしめた。

「息をしろ……！」

反応のないリュクシーに、イチシは自分の口から唾液を送り込んだ。

「…………。ハアッ！－ハアッ、ハアッ

意識を取り戻したリュクシーは、眼前に迫るイチシの顔を見つめる。

「イチシ」「

「オレの事を考える。ジンたちと合流するまででいい。オレの事だけ考えてる」

「…………

「そう、背後には誰もいない。リュクシーのそばには、イチシしかいない。」

「これでいいのさ。誰もあなたを責めやしない」

「元より、2人を引き離そうとしていたイチシには、願つたりの結果だろう。」

「ほり、つかまつてる」

イチシが差し出した右手を リュクシーはしっかりと握り締めた。

「行くぞ」

急にイチシがリュクシーから視線をそらすと、短く言つた。

イチシも忘れなくてはならなかつたのだ

リュクシーの唇の温もり、そして手のひらから伝わる熱への衝動を。

ジンの住居を後にし、2人は大通りに身を紛れ込ませる

2人の間は終始無言のまま、足早に歩き続ける だが、2人を繋ぐ部分から感じて いる熱は、偽りではなく本物だつた。

「イチシ」

少し先を歩くイチシを、リュクシーは呼び止めた。

今、言わなければならぬと思った。

2人はまだ、生きているから……生きていられるから、1秒でも時間が惜しいと思つた。

「イチシ ヘリオンを助け出したら」

言葉の先が予想できなかつたのか、イチシは眉間にシワを寄せた。

「あの2人を安全な所へ送り届けたら」

『ゼザ』と同じ道 それだけはできない

「デスタイルへ行こう。そして治療を受けよう。お前を襲つたシェ
イドを 2人で」

最後の言葉を言つ前に、イチシに声を奪われた。

痛いほどに抱き締められ、彼が自分をどれだけ求めていたかを知つ
た。

分かつっていたつもりだが 改めて知つた。

「2人で 戦おう。お前をあのショイドに渡しあしない」

カライのよう

「手遅れにしない」

何て身勝手な行動だらう
えるといふのか？ カライを見限つて、イチシに乗り換

カラ を救えなくて、イチシを救えるのか？

リュクシーに 誰かを救うなど、できるのか？

「ああ ああ」

だが、イチシはリュクシーでいいと言つた。
こんなリュクシーでもいいと リュクシーでなくてはダメだと。

「イチシ、約束してくれ。生きる為に努力すると。絶対に諦めないと」

「ああ ああ」

ならば、リュクシーも信じよう。

イチシを生かす為に、イチシと生きる為に、イチシの事だけを考えよ。

それが他の犠牲を生む事にならうとも

「ねつ、ちょっと見て！あの人、超カツコよくなーい！？」
「えー、マジで？っていうか、何かの撮影じゃないのー、アレ

突然、群衆がざわめき出す

『やはり 無駄だつたか』

その声の正体に気づいた瞬間、リュクシーは海の中にいた。

ゴボゴボッ
！！！

（溺れ死ぬ
！！）

シェイドの直撃を食らい、リュクシーは喉を押さえ付けた。

「ゴボッ！ガッ、ハッ
！！」

「な、何！？どうしたの！？」

事態の認識できない人間たちが、迂闊にもシェイドの領域に踏み込み、窒息して倒れる。

苦しい 意識が……薄れしていく

「息をしろーー。」

海底沈み行くショイードの渦の中、何者かの声が聞こえる
シだ。 イチ

イチシの声だ

だがイチシを認識したものの、溺死のショイードの中で、それ以上の
抵抗は出来なかつた。

「さつきと同じだ、息をしろ、リュクシーーー。」

だがイチシはリュクシーの元までたどり着くと、先刻と同じように
唇を重ねた

「ガハツ！！ ゲホツ、ゲホツ！！」

「そうだ 息を吸え」

「」

イチシがリュクシーを支える腕に力を込めると、周りを取り囲んでいた海のイメージは次第に薄れていく。

『水の幻想は効かぬか

』

シェイドの攻撃を破られ、静かに佇む男

ハガルは言った。

「イチシ お前は平気なのか

「居眠りしてて、海に落ちた」

「……今は笑っている場合じゃない」

イチシは至つて真面目に答えたようだが、確かに笑っている状況ではなかつた。

『ならば

その身、貫くしかあるまい』

ハガルは無表情のまま、剣を抜く

（剣勝負なら……まだ何とかなるかもしれない）

リュクシーは左後方にあるオープンカフェまで飛びのくと、テープルの上のナイフを2本、両の手に持つた。

刃先を地に向け、己のショイドを走らせる

『行くぞ』

ハガルが踏み込むと同時に、リュクシーも地を蹴つた。

ガキイ

ン！――

2人の武器が交わる

その向こうで、ハガルの瞳がリュクシー

を捕らえていた。

『光の罪人よ　　闇に眠る魂を呼び覚まし、利用して捨ておく。
そなたは生の理を乱しているのが、まだ分からぬか』

ググッ　　！！

全身でハガルの剣を受けるリュクシーに、返事をする余裕などない。

（やはり、強い　　！！）

リュクシーもメダリア内では、かなり高度な小刀術を身に付けていた1人だったが、それでもハガルには敵うかどうか。

キンッ　　ガキンッ！！

イチシも加勢しようとしたが、騒ぎを嗅ぎつけた軍人たち（恐らく先程2人を襲つた部隊の増援だろう）が集まるのに気づき、そつちを片付ける事にした。

ちょうど、溺れた時の記憶が呼び覚ました事だ　　奴らにも、

同じ苦しみを味わつてもらう事としよう。

イチシは増援部隊に、溺のシェイドを放つ。

「ウツ !」

「ガツ、ゲホゲホツ ! ! !」

イチシの『瀬』は死に至るほど威力はないが、足止めには十分だ。

キンッ

ガキンッ ! !

力で押し負けそうになつたリュクシーは、剣筋を避け後退する。
(強い)

『筋は良いようだ。さすがは我が血と連なる者、といったところか
だが』

ガキンッ

ギンッ、ギインッ ! !

ハガルは再び猛攻を始め、リュクシーの心の臓への追求を止める事
はない。

キンッ キインッ

!!

剣を交えると全身にハガルのショイドが響き渡り、その度にリュクシーや武器を落としてしまいそうになるほど衝撃を受ける。

キンッ ガキンッ、ドカツッ！！

何度もかの激突時に、リュクシーやは弾き飛ばされ尻もちをついた。ハガルがその隙を逃すはずもなく、鋭い剣先がリュクシーやを捕らえる！！

『そこをどけ』
『いいえ、いいえ、ハガル様』

だがあの時と同じ、刃からリュクシーやを守るかの如く、立ちはだかっていたのは。

『肉を失えど、私はそなたに剣を向ける事は許されぬ』
『どうか、どうか、ハガル様。この娘の命を奪う事だけは……』
『レミ、どけ。グノーシスを取り返せば、我らも消滅する事ができよ』

『どうしても 無理だとおっしゃいますのか』

必死に自分をかばってくれるシティアラ女性
リュクシーは今、やはりこの女性が『母』なのだと……ジンがヘリ
オンを想つように、自分を想ってくれる存在なのだと 実感し
た。

実感したが 彼女は既に、生と決別した存在だった。それが悲
しかった。

『そなたがどかぬと言つのなら、私はいつまでも待つぞ。その娘の
肉体が朽ち果てる程の永き時でも』

『分かりました 私はここを動きませぬ』

2人のシェイド体が睨み合う中、ゴデチヤ軍人たちを片付けたイチ
シも、リュクシーの元に駆け寄る。

「イチシ、お前は逃げる。勝つ手段が……見つからない」

「バカ言え。

あんたが先に死んだら、何の意味もあるもんか』

ようやく手の届いたリュクシーを、殺させるつもりは毛頭なかつた。

『リュクシー、聞きなさい』

突然、レミが小声で囁いた

『今から教える言葉を、ハガル様に向かって言つのです』

そして更に声を潜めると　　いや、その言葉はリュクシーにしか聞こえなかつたに違ひない。

レミはショイドで心に語りかけていた。

「……」

『ハガル様は激高して、直進して来るでしょ!。その一撃に耐えた
ら　右側から、首に斬りつけなさい』

「でも　　私は……」

『最後に、水に落とすのです』

レミは娘の横にいる少年を見つめて言つ。

(私には　　できない……!—)

ハガルを打ち破る呪文とは、リュクシーが決して口にしてはならな
いものだった。

『言ひなさい、リュクシー。　　生きる為に。私たちはこの世に
あらざる者……そんな者に縛られる必要はないのよ』

「でも　　!—」

その呪文を口にしたら　　リュクシーは壊れてしまつかもしけな

い。

今の自分が消えてなくなつてしまつかもしれないのだ。

『言ひなさい。あなたにはまだ、この世に引き留めてくれる人がいる』

母の言葉に リュクシーはレリヒトイチシを交互に見た。

「あなたは一撃を全力で受けろ。オレが右から斬りつける」

イチシは 知らないからだ。

この言葉を発すれば、リュクシーはもはや言ひ訳はできない。

「言え、リュクシー。乗り越える。あなたはオレと戦つと言つたなら、言え。今を生き延びろ」

それでも それでも。

この禁忌を犯せば、リュクシーは リュクシーは。

全てを理解していた その上で、リュクシーは決断しなければならなかつた。

一度ゆっくりと呼吸し、立ち上がる

「 イチシ。サポートしてくれ」

そう リュクシーはイチシを選んだ。
イチシを選び続けるために、今から鬼になる 全てを承知の上
で、生きる道を選ぶ。

カラソッ !!

リュクシーはナイフを一本投げ捨て 残りのナイフの刃先をハ
ガルへと向けた。
かつて目にした あの最強の捕縛士と同じ構えで。

『 ! ! 』

ハガルの表情に変化が現れた そう、ハガルも知つていて
今蘇るのは、自分を殺した者の残像だ。

「」は護送船の上　　目の前に在るは、一匹の獲物。

見渡す限りは海　　我が名はソーク＝デュエル。

刃向かう者は抹殺するのみ。

リュクシーは大きく息を吸い込むと　　禁断の呪文を唱え始めた。

「全ではショラウドの意思の中　　貴様も踊らされているに過ぎ
ん」

あの男は　　ソーク＝デュエルはきっと、顔の筋肉を動かす事も
せず、言つてのけた。

そして、激高するハガルの姿を冷ややかな目で見ていた。

『黙れ！！！我々は光に目を潰しはしない！！！シティアラは貴様らの支配は受けぬ！！！』

ハガルは過去の記憶に取り込まれた リュクシーに最大の敵の姿を重ね、かつての対峙の中に完全に支配された。

『去れ！！！ 光の罪人よ！！！我が手で葬つてくれる！！！』

ソークはきっと、ハガルの決死の攻撃でさえ、軽く受けたに違いないのだ

ガキンツツ！！！！

ザシユツ

!!

そしてイチシが演じたソークの反撃の一一手が、ハガルの首を切り裂く。

『グ　　うおおおおおーーー』

血潮と絶叫と共に、更にソーカに斬りかかるうとするハガルにイチシは溺のショイドをぶつけた。

ザパンツ！…ゴポポゴポゴポツ

「…………つーーー」

動搖してはならない　　ソーカはきっと、ハガルが死に逝く姿に反応すらしない。

憎悪の瞳から、光が失われていく姿を見ても　　海が赤く染まるのを見ても、何も感じるはずがない。

（　　つ、無理だ……ーーー）

だが、これ以上ソーカを演じ続ける事ができず、リュクシーは顔をそらした。

（無理だ　　無理だ！！なぜ無感情でいられる…人人が死に逝く瞬間に　　あれだけ残酷な死に様を前にして、どうして平氣でい

られる……）

「もういい、見るな」

吐き気を催してうずくまつたリュクシーを、イチシはそっと抱き締めた。

リュクシーは震えていた　　だが、その本当の理由をイチシは知らなかつた。

リュクシーは　　最も忌むべき行為をした。

ソーコ＝デュエルと同じ事を　　あれだけ嫌悪を感じていた禁忌を犯したのだ。

その事実がリュクシーの心を蝕み、汚染し始める

『顔をお上げなさい　　リュクシー、ハガル様を殺したのはあなたではありません。だから　　顔をお上げなさい』

レミの言葉に　　リュクシーは彼女を見た。

『悲しい事だけれど　　ハガル様を……の方を眠りにつかせて差し上げられるのは、同じ血を持つあなただけだったのかもしれません』

「同じ血

あの男もあなたの子供なのか。

ハガルは私の

兄だつたのか？」

レミは寂しげに微笑んだだけだつた。

『私たちの事は　　忘れなさい。私も……行かなければなりません』

レミはイチシに静かに告げた。

『さあ　　私を水に落としなさい』

「待つてくれ！話を　　！』

何か　　何か聞かなくては。何か話さなくては。
シェイドを知るこの人に　　自分を産んだこの女性に。

『何も　　必要ありません。あなたの成長を見る事が叶つた
これ以上は必要ないのですよ』

穏やかだけれど、悲しいレミの口調にリュクシーも悟つた　　これ以上、自分に引き留める事はできない。
してはいけない事なのだ　　新たなシェイドを現世に留めてはならない。

（ハガルの言つた事はもつともだ　　初めから……初めから、シェイドを呼び覚ましてはいけなかつたんだ）

リュクシーは　　イチシと顔を合わせ、ゆっくりと立ち上がつた。

「生きているあなたに 会いたかった。私はもう失いたくない。
大事な人を 失いたくない」

これからは イチシがきっとそなうる。
リュクシーにとつて、かけがえのない人間になる。

「だから 大丈夫だ。私は負けない。『声』に押し潰されたり
しない」

レミの前で、リュクシーは精一杯強がつてみせた。
母に未練を与えてはいけない 2人はここで決別せねばならな
い。

「イチシ 賴む……」

「ああ」

『我らシティアラの民 守護者レムノスと運命を共に致しまし
ょう』

レミは死の呪文を唱え、独特の祈りの仕草を見せると、地を
彼女の命を吸い込んだ海面を見つめ、飛び込んだ。

「行こう。今は時間が惜しい」

「 平氣か？」

イチシの問いに、一呼吸置いた後、リュクシーは微笑んだ。

「ああ 大丈夫だ。そう…約束したからな」

「……」

そんなリュクシーを見て、イチシは何故か妙な表情を浮かべた。

「 何だ？」

「何でもないから放つておいてくれ」

イチシは反対を向いて、覗き込もうとするリュクシーを押し返す。

「 何だ、気持ち悪い」

「あんたって自分の言動がビリ見えるのか、全然氣づいてないんだな」

「それは私が向こう見ずで考えなしだって言いたいのか」

イチシはリュクシーを見ていて、急に小恥ずかしい気分になつただけなのだが　　わざわざ説明なんてしてやるはずがない。

「そんな事言つてないだろ」

「じゃあ、何だ」

食い下がるリュクシーに、イチシはボソソッとつぶやいた。

「2人きりになつたら教えてやるぞ」

その言葉に、男にありがちな良からぬ妄想の類かと勘違いしたリュクシーは、イチシの脛を軽く蹴飛ばした。

「いいから行くぞ！」　　ジンたちが心配だ

「いてえ……」

「そんなモノ、大して痛くないだるーりーもつたと行くぞ！！」

リュクシーも、イチシが自分をそういう対象に見ているのだと認識し、妙に恥ずかしい気分になつた。

でも　　きっと、これでいい。

リュクシーはきっと、イチシを受け入れる事ができる。
イチシとなら　　触れ合える。愛し合える……

『力』
『』
『』
……

お前を救いたい』といふ気持ちは嘘偽りなかった

『うしてイチシを選んだ今でも、どこかで負い目を感じていて

でも　　この世を彷徨つ事が邪悪なら

お前にとっても苦痛でしかなくなるのない

私はお前を記憶から消さなければならぬんだ

イチシと生きていこうと思ひつて
像。#とわりつく存在……その残

オレの気持ちを、お前がどれだけ理解してるつて？

消せるもんか ケセルモノカ！！

オレハ オマエガ

だが、その言葉の先はリュクシーにまで届かなかつた。
完全に拒絶され、カライの想いは封じられた。

(オレは消えねえ そのまま消えるわけにはいかねーんだ)

もつ手段は選ばない リュクシーはカライのものだ。

カライには関係ないのだ

己の生死も、リュクシーの生死も。

(そうだ
関係ない)

今まで、わずかに残っていた人間の良識が邪魔をして気づかなかつた。

答えはこんなに簡単だつた
リュクシーも、こちら側に引きずり込めばいいのだ。

新しい命令だらうか

正直、安堵している自分がいた。

『聞こえるか、ゼザ＝シアター』
「はい、聞こえます」

ツ ガツ…ガガ、ガ

突然、通信が入る

だが音声が途切れて、よく聞き取れない。

『 か』

ピッ ガツ…ガガ

これ以上　　彼女を見張つていて、何の得があるといつのだ。
メダリアにとつても　　自分にとつても。

『傍受される危険があるので手短に言つ。ウブル地区の科学工場前に向かえ。君にも作戦に参加してもうつ』

「了解しました」

『では通信を終わる』

彼女の抹殺命令ではない　　その事実に、ゼザは複雑な感情を抱いていた。

メダリアは未だ、彼女を　　裏切り者を生かしている。それは何故だ。

何故、自分に　　それは、元パートナーだからなのだろうが
こんな無意味とも思える監視をさせるのだ。

「……」

だが、よつやく事態は発展するらし。

(何の作戦でも構わない　　こんなバカげた任務はもう終わりだ)
無意味な事に時間を浪費する事は、ゼザにとつては苦痛以外の何物でもなかつた。

「……」

唐突に脳裏に蘇つたのは、『彼女』とそれを求める少年の
人で敵と戦う姿。

(監視をさせるとこう事は
オレの変化を試されているのだろうな)

ゼザは メダリアで生まれた。

優生学の研究の末、あの研究室で誕生した子供たちは、感情が欠落している場合が多くあるのは事実だ。

そしてゼザも 確かに、思つ。自分には理解し難い感情が存在していると。

だからといって、困つた記憶もないのだが。

メダリアの学者たちは、彼女を監視させている間、ゼザの脳はのデータでも集めていたに違いない。

(「うとい話だ。そんなデータを取つても、何も出はしない）

ゼザは動搖などしない 『彼女』 が自分と正反対の人間である事は、最初から分かつていた事だ。

見えている世界が違うのも、考えが違うのも、何もかも知っていた。
知つていて 受け入れたのだから。

相手を理解したのではない 違うという事実を受け入れたのだ。

だから、別れを受け入れる事にも抵抗などない。敵となれば戦う。

中途な感情など必要ない。 メダリアが求めるのは、分野に秀でた人間だ。

どんな場合にも支配されない冷静さ ゼザが要求されているのはそれだ。

『彼女』たち、外から来た捕縛士たちはこう言つだらう 『己の意志を持つ』と。『自分の意志で捕縛士になりたいのか』と。

だが、それは愚問だ。

ゼザたちには この生き方しか用意されていない。
だから疑問も感じずに、突き進む事ができる。

それこそが、メダリア人に求められる生き方なのだ。

「……」

この時、ゼザはまだ認めようとしなかった。

自分の中に存在する感情を そして捕縛士を貫くためには、予
想とはかけ離れた激痛を強いられるのだという事を。
認めないままで 生きていけると思っていた。

「ホーリー? 戻つてたのか?」

セントクオリスが擁する巨大研究施設メダリア その廊下で同期の男とすれ違う。

ホーリーは真実を求めて、メダリアに帰還していた。だが、こいつに用はない。

「ちつ。相変わらず、お高いヤツだぜ」

あつさり無視されて舌打ちしたが ホーリーが無言で立ち止まつたので、聞こえてしまつたかと焦つてしまつ。

「な、何だよ。だつてお前が無視するから……！」

癪癩を起こされるかと思い、弁解の言葉を発したが 意外や意外、ホーリーはこいつを見よつともせず、足早に去つて行く。

「な、何だ? ? 珍しい……大災害でも起きんじゃねーのか?」

「ねえ! ちょっと聞いた! ?」

唖然としていると、背後からパートナーに声をかけられる。

「何がだよ」

「同期から『Sランク』が出たつて! すげくない! ? 『S』

なんて、特級捕縛士への審査が行われるのよー? しかも正式に捕縛士になつてから、まだ3ヶ月も経つてないのにー!」

「えー、その話、本当ー?」

特級捕縛士に継ぐ地位 限りなく有り得ない話に、近くにいた若い捕縛士たちが集まつて来た。

「そりや、すごいけど で、誰なんだよ?」

「リュクシーだつて、リュクシーー!」

「あー、リュクシーかあ。納得ー、やつぱりお気に入りだつたしね
「そういうや、認証式もいなかつたよな 既に任務に就いてたつ
て事か?」

「でも、こきなり《S》なんて、何やつたのかしづ」

「アアアアアアアアアー!」

「ん?」

「 ちょっとーー今的话、どういう事よー?」

話を聞き付けたホーリーが、ものすごい勢いで駆けて来ると、眼前に迫る。

(あの女が《S》ですってー!?) 何なの、それー!?)

逃亡者がどうして、未だ捕縛士の扱いを受けるばかりか、出世までしているのだ?

自分と大差ない同い年の女が、何故そんな扱いを受けるのか、ホーリーには全く理解できなかつた。

「ちょっと暴れないでよ、ホーリー！」

「だから、どういう事かつて聞いてんのよ！」

「あたしだつて知らないわよ！ただ、さつきシユラウド様が

「

その名前が出た瞬間、ホーリーは続きの言葉を飲み込む。

「シユラウド様いるの…？　　えいに…！」

そうだ、この女に聞いても話は何も解らない　　リュクシーの事も、ドラセナ＝ロナスの事も。

ホーリーはシユラウドに話を聞く為に、メダリアまで戻つて来たのだから。

「司令室の前で　　」

居場所を聞くと、ホーリーは駆け出した。

「ひえ～っ」

「パートナー、ジラルドだつて？同情するわね」

能天気な陰口など、今のホーリーの耳には届かなかつた。
今やそんな事に時間を割く余裕はないのだ。

(シユラウド様　　シユラウド様!!!)

最短で司令室まで駆けて来たが、既にシュラウドの姿はなかつた。
他に彼がいそうな場所は

シュンツ！！

その時、司令室から珍しい人物が現れた。

（ ソーク様！ ）

慌てて敬礼すると、その後ろに見覚えのある女性の姿があつた。

「マディラ様？」

やはり先にメダリアに到着していたか しかし、問いかけたもの、マディラは神妙な顔で押し黙つたままだつた。

「マディラ＝キナリーと面識があるのか

「あつ…はい。ゴーテチヤで 」

突然ソーグに問いかけられ、ホーリーは少なからず動搖する。

ソーグ＝デュエルに声をかけてもらったのは、初めてだつた

「…………」

しかし、答えた後のソーグは無反応だつた。

「あの、失礼ですが、Dr.・シユラウドの居場所をご存知でしょうか」

ショウラウドの名を口にした瞬間、マティラが顔を上げた

「わあな」

「 そうですか」

何だか マディラの顔が、暗く影を落としているみたいに見えるのは、気のせいだろうか。

（ そうだ、この2人でもいいわ）

特にマディラは　　深い関わりがあるようだから。
特級捕縛士と呼ばれるこの2人なら、ドラセナ＝ロナスについて何か答えてくれるかもしない。

「実は、シユラウド様にお聞きしたい事があつて捜してましたんで、お一人もご存知なんですか、ドラセナ＝ロナス様の事」

「 何も知らないね。上司の素性に首突つ込むんじゃないよ」
ドラセナ＝ロナスの名を口にした途端、マティラが話を遮った。

これ以上、その名を口にするんじゃない
マティラの瞳はそう
威圧していたが、ホーリーは無視した。

「ドーラセナ＝ロナスとも面識があるのか」

「はい、マティラで」

「

（　　バカめ）

マティラは心の奥底でそう思つたが、もつ手遅れだった。

「なるほどな」

今度は反応が返つて来た　　ドーラセナ＝ロナスを知る人物という
のは少ないのかもしねり。

ソーク＝デュエルに少なからず手こじたえを感じて、ホーリーは先を
続けた。

「彼が過去に携わった任務について　　お尋ねしたいのですが。

」こで話すのはマズイでしょうから、場所を変えませんか」

「小娘がでしゃばるんじやないよ。あんたに何ができるつてんだ」

「　　いいだらう、話とやらを聞こつ

「ソーク＝デュエル！」

マティラは抗議の眼差しを向けたが、やはり無駄だったようだ。

（やつた！！　　やっぱり何かあるんだ。ドーラセナ＝ロナスの裏
には何かが隠されてる　　そうに違いないわ！）

ソーグ＝デュエル相手につまく話が進み、ホーリーは高揚していた。

「もひいい　　好きにしな。責任は自分で取るんだね」

マティラは頭を抱え、首を横に振った　　この少女が利用され事にならうとも、それは彼女の責任だ。

ホーリーは自らの命を持つて、責任を取らなければならないだろう。だが、ゴヂチャでこの少女の習性を垣間見ていたから、この手の思い込みの激しい娘に、手を引かせるのは至難の技だという事も分かっていた。

（それに　　あたしも分かっていたはずだよ。ドラセナを知る者は全て……）

それが必要である事　　十分理解していたはずだ。

全てはドラセナを完全消滅させる為　　犠牲者をこれ以上、増やさない為。

この作戦は、心を殺して成功させなくてはならないのだ。

（そうだ　　心を殺せ。シュラウドの正体も、奴らへの憎悪も、今は関係ない。あたしが真っ先にしなければならないのは、ドラセ

ナを消滅させる事だ）

シユラウドの顔を思い出す度、腹が煮えるのを感じた あの男にはまんまと騙された。

考えるだけでも、悔しさが込み上げて来る。

（ドリラセナは殺す だけど、あんたらにも覚悟してもいいよ）

ソーク＝デュエルの背中を見つめ、マティラは決意を新たにした。

「やはり待ち伏せされてるようだな

追跡される恐れのあるカードは破棄し、徒歩でTV塔の見える位置まで接近して来た2人は、路地の監視カメラの死角になる地点から、様子を伺っていた。

「明らかに浮いているのが、何人かいる」

TV塔があるのは人の出入りの激しいオフィス街だったが　何をするでもなく、定位置を徘徊する男たちの姿が。彼らは保護地区の男にしては体が大きく、周りの風景には不釣合いで。

「今所、TV塔に軍用機が出入りした気配はないようだ　ジ

ンたちはまだ中に保護されているのかもな」

「国が手を引いてるんだろう? TV塔の連中もグルじゃないのか?」

イチシの問いに、リュクシーは首を傾いで見せた。

「どうだかな　この「テチヤは、國家監視機関なるものがあるらしいが。マスコミもその1つだというが……　実際に機能しているかは怪しいものだな」

監視するのが人間である以上、そこには抜け道が存在するはずだ。完璧などありはしない。コネもあれば、汚職もある。

「機能している事を願うばかりだが

「ジンの事か」

商品価値のあるヘリオンはともかく、ジンへの丁重な扱いを期待するには無理だった。

既に軍に引き渡されているとしたら、どうにか事態になつていても不思議はない。

「まあ、大丈夫だろ。見かけ通り頑丈だぜ、あいつは

「……」

まだ 意識してしまつ。
イチシと話しながらも、リュクシーは雑念を完全に振り払えずにいた。

「おい、オレを見ろ」「
……ああ、大丈夫だ」

リュクシーが少しでも沈黙すると、イチシが自分側へと引き戻してくれる 今の自分がかなり危うい状態なのは解っていたが、いつかは脱する事ができるだろうという予感のようなモノもあった。

イチシがそばにいれば

「しかし 強行突破は避けたいな。相手はどうも、敵が捕縛士であると認識している可能性もあるようだし」

いくらシェイドを操るといつても、肉体が反応しきれない程の人数、武器で攻められれば、命の危険だつてある。
2人も所詮は、生身の人間なのだから。

「フンフーン 今日はどこに行こうかなーっと」
その時、リュクシーの田の前を、鼻歌交じりの少女が横切つた。

「ーー」

「きやあ!?」

反射的に彼女の腕をつかんだリュクシーは、そのまま路地へと引っ張り込んだ。

「シッ、静かに。危害は加えない」

「あつ? あなた えーと、リュクシーさん?」

「静かに。名前を呼ぶな」

それは、ジンのカードと異性登録済みの少女だった。

「えつ、何! なになに?」

「……」

普通は、知り合い程度の女に路地に連れ込まれたら警戒すると思うが、少女はただならぬ事態に脅えるどころか、何かの冒険劇と勘違いしているのか、田を輝かせている。

「カーフェ、お前がここにいるという事は、ジンはトーレ塔にいるのか？」

どうとか名前を思い出すと、リュクシーは質問を浴びせた。

「うん、表示はあそこになつてるよ。え、ジン、何かあつたの？」

「あつたかもしない。それを知りたい」

「え、それでそれで！？カーフェが潜入捜査に行けばいいのね！」

「…………」

大はしゃぎのカーフェに、リュクシーは閉口してしまつ。

「ジンの奴も、変なの引っ掛けたもんだぜ」
保護地区ではこれが一般的なのか？と肩を竦めると、イチシがぼそりとつぶやいた。

「カーフェは変な男たちに追いかけられたりはなかつたのか？」

ジンの住居に軍の手入れが入つたのだと 登録済みのカーフェに手が回つていなければない。

それとも この少女は既に軍に命令されて、リュクシーたちを誘き出す為の餌なのだろうか。

「あ～、うん。別にないよ。たぶん、この制服のせいじゃないかな～」

カーフェは学生服の胸元のリボンをひらひらとして見せた。

「制服？」

「うん~。ウチの学校は、政府関係者しか通えない所だから~。大抵の人は、カーフェたち見ると避けてくよ~」

カーフェはお得意の能天気な口調で、話を続ける。

「だから~、普通は異性登録も学校内で済ますんだけどね~。ジンはそんなの全然関係ないみたい~。カーフェの事も避けないで、ちゃんと話聞いてくれるし~。いいよねえ、ジン」

「あー、カーフェ」

ジンへのノロケ話を始めたカーフェを、リュクシーは遮る。

「つまり、お前は『ゴテチヤ政府要人の娘なんだな。ならば、ジンには会うな。奴は今、マズイ状況にある。関われば、親の立場が悪くなるぞ』

リュクシーの言つた意味が理解できなかつたのか、カーフェはしばしの間、きょとんとしていた。

「えー、ヤダ! そんな事言つて、リュクシーさん、ジンを取られたくないだけなんでしょう?」

「……」

どうも思考の優先順位の異なるカーフェとは、会話が噛み合つていない気がしたリュクシーだった。

「カーフェ、絶対ジンに会うんだから～。止めても行くからねつ！」
「止めねーから、行って來い」

リュクシーに代わって、イチシが諦めの言葉を発した が、力
ーフェは何故かその場を離れず、2人の顔を様子見ていく。

「 何だ？」
「ねえねえー、2人もジンに会いたいんでしょ？協力してあげよつか？」

『協力？』

思わず、2人の声が重なった。

「うん、そう！協力してあげるよー キヤツ、何か楽しい！」

カーフェは声を上げて笑ったかと思うと、答えを待たずに、自分のカードを取り出して誰かと通信を始めた。

「お、おい
いいから、いいからー」

「お、似合ひじゃんー？オレのサイズでバツチリ」「うんうん、似合つてる、似合つてるーー」「リュクシーさんはまだ？」

先刻まで、リュクシーとイチシが身を潜めていた路地は、力一フエと同じ制服姿の若者で溢れていた。

「　　お

着替え終えたリュクシーが姿を現すと、何故か眞、絶句する。

「な、中々似合ひでんじゃん？」
「でも、何か犯罪っぽいカンジだな……」「ちょっとスカート短かったかなー？仕方ないかー、サイズが小さいのかも」

男子学生は頬を赤らめて、スカートからスラリと伸びたりュクシー

の素足を盗み見ている。

「ちょっとー、あたしが代わりにコレ着るの~足、長いよー。引きずつつけつけて」

「じゃあ、その店で何か買つてきただげるよ」

代わりにリュクシーが着ていた服を、カーフェの友人が着る予定だったのだが、ウエストが細くて足が長いといつ、どう考えてもはない作りになつていいようだ。

「…………」

リュクシーはといえば、制服姿のイチシを見て、吹き出したいのを堪えるのに必死だった。
はつきり言つて、似合つていない。

いや、外見には似合つていなくもないのだが、イチシの雰囲気ではないと言いたいのだ。

襟元をキチンと締めているのは、何となく柄じゃない。

(ところで、何で私はカーフェの言いなりになつてるんだ…)

この少女の口車に乗つてしまつた自分の愚かさを思い、リュクシーは頭が痛くなつた。

確かにリュクシーが制服を借りた少女は、肌の色は浅黒く黒髪で、
パツと見には入れ替わっているのはバレないかも知れない。
(だが身長は小柄で、実物を並べると、リュクシーとは似ても似つかないのだが)

カードには、胸上の写真しか掲載されていないからだ。

イチシが服を交換した相手も、黄色人種で黒髪、大体の特徴は似ている。

「よつし！じゃあ、行こう！皆、この2人を囲んで歩いてね」
カーフェの掛け声と同時に、その他大勢の友人たちが、リュクシーたちを取り囲み、TV塔に向かって歩き出す。

「カーフェ、あたしらはどーすんの〜？」
「え〜っと、どうしよ。適当に時間潰して〜」

入れ替わった2人に、また曖昧な言葉を残してカーフェは進んでいく。

「おい 大丈夫なのか？」

イチシがリュクシーに囁く。

「恐らく　ＴＶ塔には警備員が立っているはずだ。カーフェは登録相手だから、面会を求めれば何とかなるかもしねないが、その他は入れないだろうな」

「そしたら、オレらが引き付けといてやるから、勝手に入っちゃえよ」

「楽しみ~、誰か芸能人とか会えるかな？」

周りにいるカーフェの友人たちが、やはり彼女と同じお気楽な口調で口々に答える。

「…………」

結局の所、強行突破する羽目になるだろうと、イチシと2人顔を見合わせるばかりだった。

TV塔の1階は、正面がガラス張りの広い空間だった
イメージキャラクターを飾り付けたエントランス、大型モニターを
埋め込んだ側壁、それらを通り抜けると見栄えの良い女性たちが待
ち構えるフロントがある。

「お～、へ～、こんなもんか」
「あたし、ハウプト地区のTV塔なら行つた事あるけど、ココは初
めて～」

ゴーテチャでは知らぬ者のいない制服に身を包んだ一団は一際目立つ
ていたが、周りにいた人々は皆、示し合わせたかのように遠巻きになつていく。

彼らの先頭に立つ少女 カーフェは、フロントまで真っ直ぐ歩
いて行くと、受付嬢に向かつて口を開いた。

「えつと、登録した相手と会いたいんですけど～」

リュクシーたちと言えば、周りを学生たちにガードされ、少し離れた所でその様子を見ていた。

「やっぱ芸能人は正面玄関からは、入つて来ねーのかな？」
「今日は の生放送あるじゃん！ とかに会えるかもよ！」

？」

キヨロキヨロと辺りを見回す彼らは、制服の効果も倍増して、かなり悪目立ちしていた。

「登録相手の氏名とカードナンバーを教えていただけますか？」

「ジン＝ヒナセ。え～っと、1204datwss930sd432だ

よ

「確認いたしますので、少々お待ち下さい。後ろの方たちは、お連れ様ですか？」

「うん、友達ー」

「では、お連れ様のカードも確認させていただきますね」

受付嬢がそう言うと、リュクシーの胸ポケットにあったカードが、ピピッピと機械音を発した。

（これでバレなければいいが）

登録写真とよく見比べれば、別人である事は丸解りだ。リュクシーは、内心ヒヤヒヤしていたのだが

「では、少々お待ち下さい」

受付嬢は、カードが正規の物であるのを確認しただけで、中身まではチェックしなかったようだ。

制服効果は絶大、という事なのだろうか。

(ずさんな管理で助かつたな)

リュクシーはイチシと視線を交え、頷いてみせた。

場所が場所だけに、そう簡単に面会の希望が通るとは思えなかつたが、相手は要人の子供たちだ 邪険に扱う事もできないと判断したのか、門前払いは免れたようだ。

「エル、OKっぽいよー

カーフェが振り返り、じつちを見て言つので、じばし沈黙する。

そうだ、リュクシーの名前は今、Hレフイン＝ダタロイド。

イチシは、トール＝ヒロカミだった。

「…………で、どうしているんだ?」
「いらっしゃるです」

その時、フロントの責任者なのか、受付嬢が男を連れて戻つて來た。

「これはこれは 何でも、ダタロイド議員のお嬢様までいらっしゃ

しゃるとか。お父さんに面会ですか?」

シ ン.....。

リュクシーは隣にいた少年にわき腹をつかれ、この場で返事をすべき《お嬢様》が自分である事に気づく。

「あー、しかしですね、あいにくダタロイド議員は「」覧の通り、報道番組に生出演中でして」

しかし男は、お嬢様の返事を待たずに先を続ける。

男の視線の先には、壁面の大型モニター
の局のニュースだった。
どうやらダタロイド議員といつのは、画面内で熱弁しているスース姿の男の事らしい。

「放送が終わるまで、一般見学コースでも回られてはいかがですか?
?」

「おっしゃ～！」

「やつたーー行くー行く行きまーす！」

中に入れると聞き、若者たちが歓声を上げる。

本当はあまり大声を上げたり、飛び跳ねたりしないでほしいのだが
何故なら調和を図るために、リュクシー やイチシも同じ行動

を取らなくてはいけなくなるからだ。

「では、フロントで本日付の入館証を受け取つて下さい。有効期限は入館証に記載されている通り、当田限りとなつておりますので」
「大層な名前とは裏腹に、受付嬢によつて配られた入館証とは、ただの厚紙に日付とテレビ塔のキャラクターが印字されただけの簡単なモノだつた。

(いいのか、こんなに簡単で？ 制服に騙されてるという事か)

リュクシーとて、強行突破を望んでいたわけではないが いつもあつけないと拍子抜けだつた。

自分の足を見下ろし、その短すぎるスカートを見て、嘆息する。

「ところでジンは～？カーフェ、ジンに会いに来たんだけど～」

うまく話を誤魔化したつもりだったのか、カーフェが話をジンに押し戻したのを見て、男は短く舌打ちした。

「え？ああ、登録相手との面会でしたね。しかし、私どもと致しましては、そういういたご用件での面会は～」遠慮いただいております。特殊業界だけに、誰でも簡単に面会を許すわけにも参りませんので。お相手は職員ですか？勤務が終わるまでお待ち下さい」

制服に惑わされて、ここにいる不審者2人を見逃していくくせに、

よべ西の回の叫ぶ事だ

「違つよージンは」んな所で働いてないもんージンだつて、外来客でしょー何で呼び出しかけてくれないのー！」

「え、あ カードで直接ご本人と交信されてみては？」
「交信OFFになつてるんだもん！だから、放送かけて呼び出してよー」

「いえ、生放送中ですので、それは 」

言葉を濁し続ける男に、カーフェは全く引く気配がない。

「と、とにかく 少々、お待ちを。上の者にまずは確認を取つてみますので……」
「えー、まだ待たされるのー！？」

「あ、お連れの方たちは、どうぞ見学コースにお進み下せこ」

男は議員の娘に、うつろな愛想笑いを浮かべると、上司を呼びに奥へと引っ込んで行つた。

「あ、では」案内いたしますので 私について来て下せこ」

「じゃ、ワリーな、カーフェ。オレら先行くから。また後でなー！」
「相手と会えたなら、また連絡してよ」

受付嬢の言葉に、カーフェの友人たちは薄情なセリフを残して、彼女の後ろを付いて行く。

「うん~、気を付けてね」

置いていかれるカーフェは、少々ふくれつ面でリュクシーを見て言った。

軽く手を上げて応えると、リュクシーも歩を進めた。

「まずは、報道ブースからこ案内しますね」

「ねー、お姉さん、芸能人とかやつぱ見た事あんでしょう?」

「つていうか、お姉さん、年いくつ?今日は登録済み?」

受付嬢に浴びぽい質問を浴びせると、彼女は苦笑していた。

「仕事中だから、あんまり個人的なお話をすると怒られちゃうのよ」「あ、じゃあ、仕事何時に終わんの?オレ、待ってるし」「残念ながら、今日は登録済みなの。また今度ね」

人気が少なくなつたら、この団体から離れようと思つて様子を伺つてゐるのだが、案内されていくエリアは、報道関係を扱う部署らしく、先刻のドーム外壁爆破事件、少女の人身売買などの新鮮で物騒なニュースを放送する為に、人が激しく行き来し、じつた返してゐた。

「はい、質問！ニュースで見たけど、保護した女の子って何にいんの？」

「いいえ、ここは階も低いし、スタッフたちが頻繁に出入りする場所だから。もつと上層の安全な所にいると思うわ」

「上層だと何で安全なの？」

「20階より上は、カードを特別登録している役職の高い職員しか入れないようになつてているのよ」

「フーン。あつ、見ろよ、女子アナだ！！」

「大丈夫か？」

イチシが耳元で囁くので、リュクシーはハツと我に返つた。

「いや、何か……」

「何だ？」

リュクシーは辺りを見回した 生放送に翻弄されるスタッフたちが、乱雑に散らかったデスクとモニターで溢れたエリアを、忙しく移動している

(視線が)

「…………」

「やめろ、考えるな」

原因を、『残像』を無視しきれない事にあると思つたイチシは、リュクシーの腕をきつづかむと、その痛みで現実に引き戻そうとする。

「違う 今までより、もっと…………」

激しい違和感を感じ、リュクシーは視線を彷徨わせる。

(何だとこから見ている?)

ザ、ザザ

ガガ、ピ

ガ、

突然、周りに配置されているモニターの画面が一斉に乱れ、ノイズ
が入る。

『ただ今、音声が途切れました。失礼致しました』

画面内で原稿を読んでいたアナウンサーが謝罪する。

ザ、ガガガ

ピ、ビビ

ガザザ……、

しかし、ノイズは断続的に画像を乱している

「何だ？ おい、どうにかしろ！」

歪むモニターを見て、スタッフの誰かが声を上げた。

「やつてるんですけど」

「何か……変じやない？ コレ」

そして別の不安げな声も上がる。

（しまった）

リュクシーは食い入るように画面を見つめ、己の愚かさを呪つた。

ノイズと共に、何か黒い影のようなモノが、画面内を点滅しながら動いているのが分かる

（私は 『あいつ』の領域に、自ら近づいてしまったのか！）

電波の中にいるモノの正体に気づいたリュクシーは、四方をモニターに囲まれた今の状況に気づき、絶望に近い感覚を知る。

「 見るな！あんたが奴を具現化させるーー！」
イチシも気づいた リュクシーを胸に抱え、自身も視線をそらす。

「 何か 気持ち悪いわ。この影……」

「 人間みたいにも でも、羽？何なの、コレは……」

（ダメだ 私たちが目を背けたとしても……）

「 何なんだ、この化け物はーー！」

（そんな言葉 やめろーーー）

誰かがその者を『化け物』と呼んだ瞬間、背中に悪寒が走る。

バ
・
ケ
・
モ
・
ノ

化け物だ！！！

その場にいる人間たちの恐怖心を吸収し、影は具現化を始める。人々が連想する、影の魔人の姿へと

影はリュクシーの正面にあつた大型モニターから煙のよう立上り、新たな肉体を具現化し始める。

その体はどす黒く、ただ不安と恐怖を駆り立てる『人であらざるモノ』だった。

だが その身に帯びている電撃の波が、かつての……リュクシ一が知っていた者を思い出させて胸が痛む。

（そう 胸が痛い……）

リュクシーは イチシにつかまる手に力を込める。

これが リュクシーが選んだ者。そして捨てた者どちらを選んだとしても、自分は後悔した事だらう。

「キヤアアア！……」

「おー、カメラ回ってるんだろ？ うなー！」

逃げ出す者、この光景を映像に残そうとする者 魔人はその中で、まるで深呼吸でもしているような動作で、電撃のシェイドを体の中心に集めていた。

（ 来る！……）

狙いが自分に定まっている事実に、リュクシーは叫んだ。

「イチシ、避けろ！ 防御ではムリだ！……」

ケタ違いのシェイドに、2人は逃げるしか方法がなかつた。

バチバチバチッッ！……！

ほどばしる光の線が、リュクシー目がけて放たれる。

イチシはリュクシーを抱えたまま、間一髪の所で電撃をかわした。

「チッ！」

イチシは攻撃を避けながら　　巻き添えを食らつた人間たちがバタバタと倒れるのを見て、忌々しげに舌打ちした。

（あれを浴びたら、即死だ　　）

リュクシーも、シェイドに耐性のない人間たちの最期を思い、魔人の恐ろしさを再確認する。

バチッッ、バチ、チッ！……！

だが魔人は既に、第一撃の準備にとりかかっていた。

複数の人間のイメージによつて得た姿 恐怖の象徴。
電波の飛び交うこの環境、人間という枠を捨てたモノの強さ
どれもが魔人を最強とさせていた。

『人』の姿だった時のシェイドの容量を遥かに超える力を、リュク
シーを手に入れる為だけに使って来る。

（これがお前を捨てた私への罰か ）

リュクシーは 魔人と化した『カライ』を見た。
そこには、あのふてぶてしい笑みや、アンバランスな感情、何もか
もが無くなっていた。

（私は 間違つていたのか？カライ……）

スベテヨ

コ
ワ
セ

破
壊

そこにあるのは、かつて恐怖を覚えたどす黒い意識 理解し得
ない負の感情。

リュクシーがカライをあの意識の中へ突き落としたのだ。

「 奴を殺そつ

その時、イチシが言った。

「一度とあたたこ憑きまとわないよつて 今この場で殺そつ」

「無理だ」
「無理じゃない」

やつとの事で出た言葉を、イチシは否定した。

「あいつは死の瞬間を 電撃のショイドを乗り越えた」

「無理じゃない」

「あいつは、人に手を下されたわけじゃない
「無理じゃない」」

「ハガルとは違つ 私は2ヶ月も、カライト一緒にいた」

「やるんだ」

「あいつのショイドを浴びた 夢も見た」

「やるんだ、リュクシー」

イチシの瞳はいつだつて強かった そして、リュクシーに選ばせれる。

どちらかを捨てるくらいなら、自分が消え去りたいと願ひ過ぎの、厳しい選択でさえも

バチツツ、バチチツツ！――――――！

一方、魔人にもはや迷いはないようだった リュクシーを死の世界へ引きずり込もうという意識を、肌に突き刺さんばかりに感じていた。

「やるんだ あんたが呼び覚ましたシェイドだ。あんたが葬れ。そう決めたんだろう」

「…………！」

そう、イチシの言つ通り、リュクシーは決心したはずだったなのに、何故こんなにも迷う。

何故、カライの顔ばかりが蘇る

「 オレはあんたの味方だ。だから恐れるな」

イチシはリュクシーをきつく抱き締めた 彼女を幻想の世界から断ち切るべく、自分の熱を伝えたかった。

「イチシ　　」

リュクシーにだつて分かつっていた　　魔人はもう、自分が名を呼
んだくらいでは、元の姿を取り戻せないだろう。

リュクシーが死ぬか、魔人が消滅するか。

早く決着を付けねば、この場にいる人間の全てがショック死するだ
ろう。

バチバチバチツツ――――――

その時、自分を見つめるイチシの後ろに、充電を終えた魔人が再び
リュクシー目がけて電撃を放つのが見えた。

「くつ
――」

避け切れないと判断したリュクシーは、あの時の
御シールドに焼かれた時の記憶を蘇らせた。

カライが防

(壁よ！…！)

自身のシェイドで見えない壁を創り出し、魔人の電撃を受け止める

だが電撃と接触した瞬間、あの頃に支配されていた意識が、脳裏に入り込んで来る。リュクシーをかばったイチシも、あまりの衝撃にうなり声を上げた。

（持ちこたえられない……）

リュクシー一人のシェイドでは、到底支えきれない。だが隣には、全てを分かち合いつと誓つた新しいパートナーがいた。

「くつ……！」

リュクシーがシェイドの防壁を創り出しているのが分かると、イチシも自身のシェイドのイメージをそれに重ね合わせる。

「長くは持たないぜ」「の後はどうするんだ

「……逃げるしかない」

「まだそんな事を言つてんのか……」

イチシは声を荒げて言つたが、リュクシーは本当に知らないのだからイの死の瞬間を。

「私は見ていないんだ」「氣絶してしまつたから……」

「くつ……じゃあ、他に方法を考えるしかない！」

死の瞬間を再現するには、リュクシーでは役不足だった 電撃
が直接の死亡原因だったとしたら、それを無効化してしまったカラ
イに効果があるとは思えない。

（ 銃だ。カライは銃で撃たれた事がある…… ）

まだ1%でも、人であつた時の意識が残つていて、なら 撃た
れて倒れた記憶を呼び起こせるかも知れない。

「 おい……どこかに銃はないのか！？」

リュクシーは、遠巻きにしながらカメラを回している男に怒鳴りつ
けた。

「そんな化け物に銃なんて効くのか！？」

「あるのか、ないのか！？」

電撃のシェイドの重みを全身に感じながら、リュクシーは声を張り
上げた。

「あるぞ！そここの奥の棚に……でも、鍵がかかって 」

終わりまで聞かずに、リュクシーはイチシと顔を見合させた。

「一氣にはねのけるぞ。武器を取つて、モニターのない場所へ移動しよ！」

「よし やるぞ」

破 壊！！！

2人は全身をシェイドで覆うと、魔人のシェイドを天井に向かって叩きつけた。
ターゲットをそれた電撃は、一瞬にして霧散するかのようになき消える。

ダツ ！！

肉体機能を限界まで高め、リュクシーは銃のある棚まで瞬時に移動すると、手刀で鉄製の扉を碎いた。

「うわああ！！」

棚の陰に隠れていた男が、リュクシーの背中に迫る魔人におののき、腰を抜かしていた。

「魔人を葬る！ 誰も付いて来るな！！」

カメラを担いで後を付いて来かねないTV塔の人間たちに一喝し、リュクシーたちは報道ブースを飛び出し、廊下を走り始めた。

電撃の魔人はその身をモニターの中になじり込んだかと思うと、獲物のそばのモニターへと移動し、あつという間に2人の前に現れる。

力チャ。 リュクシーは照準を合わせ、モニターから上半身だけ抜け出た魔人に向けて連射する。

ドゥンツ、ドゥウン！…バリンツツ！…！…！

だが銃弾はモニターを破壊しただけで、魔人は背後のモニターに移動した後だった。

「走れ！人気のない場所へ！…」

「どうする、TV塔から出るのか！？」

前方にあるモニターを銃で破壊しつつ長い廊下を走りながら、イチシは問う。

「ダメだ！外にはビルの側壁に巨大モニターが埋め込まれている！」

それに外へ出るには、あのエントランスを通らなければならぬ

入り口にあつた大型モニターも危険だ。
別の通用口を捜している余裕はなかつた。

2人は道なりに走り、天井が高く設計された食堂らしきエリアへと
出た

「……」

そこにはあつたのは、高さが3メートルはあらうかといつ「巨大モニタ
ー」……その横には、中型サイズのモニターがぎつしりと配置されて
いた。

バチンツツツツ！！！

画面が波打つと、電のショイドが食堂中に響き渡る。

「あつ

？」

「うぐつ

ただそれだけで、食堂に残っていた人間たちがバタバタと倒れてい
く。

チツツ、バチチツツ、バチン！！

イ オ
レ マ
ル エ
ヲ テ
ニ

TV塔の中に、モニターのない空間など端から存在しなかつたのだ

各画面からこちらを見据えている魔人の姿。

目などないただの黒い塊だったが、リュクシーは金縛りにあつたよう動けずについた。

「イチシ

」

お互いの手を取り、そのシェイドを確かめる

余力はほとんど

残つていなかつた。

バチツ、バチバチバチツツ！――

これが最後だ

残された力を全て注ぎ込み、リュクシーは銃を

構えイチシが手を添えた。

心の奥底では、2人とも分かつていた

銃は効かない。

魔人の肉体が滅びたその時間を再現させなければ、勝ち目はない。

バチバチバチツツツツツツ！――！

（カライ お前は勝てない。私が死んでも、お前のモノにはならない）

たとえ肉体が滅びても 心は誰にも支配されない。
リュクシーは覚悟を決めて、魔人に向けて銃弾を放つた。

「ポイントに到着。目標物を捕らえました。ただ今から作戦を開始します」

画面の向こうにいるシュラウドにそう報告したが、彼は微動だにせず短く答えただけだった。

「始め」

「はっ！…」

操縦席の一対の捕縛士が敬礼のポーズを取ると、メダリアとの通信はブツンと切れた。

「全員、体を固定！急降下する！」

なぜ

お前は逃げようとしたしない?

ウ・ル・サ・イ

ダ
マ
レ

なぜ

何も感じないフリをする

ダ
マ
レ
消
え
ろ

私の名を呼べ
お前を救つてやるう

ダマレダマレダマレダマレダマレキエテナクナレキサマナド
ニダレガキエロキエロキエロキエロキエロオレノナカカラデテイケ
ニドトスガタヲアラワスナアトカタモナクシヨウメツシテシマエダ
レガキサマニスクワレテタマルカイイカゲンキエロキエテナクナレ
キサマハダレダ

私の名を呼べ
知っているはずだ

「ねえ、ジン　　ねえってばー起きて！いい加減、起きてよーー！」

この間まで隔離されていた部屋とは別の応接室のソファに寝かされていたヘリオンは、部屋にあるテレビ画面を見ながら、横で大いびきをかいているジンをゆさゆさと揺さぶった。

「ぐおーっ、ふー」ーー

「……もう一起きりってばーーー！」

ようやく痺れ薬の抜けて来た体を起こし、床の上で（体がソファに乗らなかつたので、床上に直に寝かせられていたようだ）仰向けに寝転がっているジンの腹に乗り上がる。

ペチペチペチペチペチッ！ーー！

そして何度も往復で平手打ちを浴びせるが、ジンは一向に目覚める気配を見せない。

「 」 なつたら 「 めんね、ジン 」

ヘリオンは辺りを見回し、部屋の隅に一度いい高さの台を発見した上に飾つてある花瓶をどかせると、ジンの近くにまで引きずつて来る。

そして、おもむろに台の上に飛び乗ると、勢いをつけてジンの腹に飛び降りた。

「 ぐおっーーーげえっ、ゲホッーーー 」

突然、呼吸が出来なくなつたジンは、咳き込みながら飛び起きた。

「 やつた！ 起きた！ ねえ、ジン見て！ ！」
「 な、何だ今のは はつ、そういうや、ヘル……ヘル…… 」

「 ここにいるよ！ ねえ見て！ 」

「 無事なんだな！ ！」

「 ジン、アレ見て！ ！ イチシじゃないの！ ？」

自分を力任せに抱き締め、話を聞いていない父の姿に、ヘリオンは声を張り上げた。

「 イチシ？ 」

「何か様子が変だよ！」

それは、2人がいるこのTV塔内部の映像のようだった。

『ちゃんと撮ってるんだろうな…カメラ、逃すなよ…！』
『キヤー…！…誰か…！』

悲鳴と逃げ惑う人々の中　　イチシがいた。イチシはそばにいる肌の麻黒い少女と会話しながら、目に見えない何かから逃げているようだった。

「リューとイチシ…？オレたちを助けに来てくれたのか…？」

そのはずだったが　　明らかに様子がおかしい。

2人が見えない何かと…　　例えば、映像には残らない『何か』と戦っているのが、船上で亡靈たちと遭遇したジンには瞬時に理解できた。

「くそつ　　とにかく行くぞ…」

ジンはまずは合流すべきと立ち上がりうとしたが、本来は対魔獣に

使われる麻酔針を腕に受けて、数時間寝たくらいではまだ体が言つ事を聞かなかつた。

「しつかり！ボクに捕まつて！！」

ヘリオンがその小さい体でジンを支えようとするが、どう考えても無理があつた。

「くそつ、こんな時に

「

役立たずな自分を呪いかけたその時、ふと室内の明度が落ちた。

ウイ……ウイイイイイイイイイイイイ

――！

「なつ……！」

壁一枚分がガラス張りになつてゐる応接室　さつきまでは、そこにはお世辞でもきれいとは言えない灰色の空が映つてゐたのだが。それを塗り潰していたのは、今まで見た事もないような巨大な戦闘機だった。

防弾ガラスをも通す激しい騒音　戦闘機は空中で体を水平に保ちながら、こちらに接近してくる。

「　ぶつかる！！」

ヘリオンが叫んだが、戦闘機は丁々塔スレスレの位置で、空中待機を続けている　　その時、下層部の扉が開くと、中から人間が姿を現した。

複数の男女　　彼らは皆、大人と子供の中間で、青い髪をしていた。

彼らは何か合図をしたかと思うと、ゆうに4メートルは離れている戦闘機の扉から、こちらに向かつて次々とジャンプした。

「あつ！？」

ビツツ……ガシャ

ンツツ！……！

集団自殺かとも思えたその行動だが、遙か下の地面に叩きつけられた者は一人もおらず、彼らは自らの体で防弾ガラスを突き破つて、2人のいる応接室に侵入して来た。

「A班、向かえ！敵を仕留めろ！！」

その言葉に何名かが応接室から飛び出し、残りがこの部屋に残る。

「ホーリー、確認しろ」

「……ヘル、オレの後ろにいる！いいな！！」

青い髪の少年少女 その正体を知っていたジンは娘を背後に隠し、彼らの目的を推し量ろうとする。

（リューの奴を捕まえに来たのか？……オレたちを人質にするつもりなのか？）

「ちょっと。……後ろのガキの顔を見せてもらひわよー。」

「てめえら、人買いか!? ヘルには指一本触れさせねえぞーーー！」

「誰が人買ひだつてのよーいいから、どいてーー！」

その声に聞き覚えのあつたヘリオンは、ジンの後ろから顔を覗かせた。

「あんた……あの時の？」

軍事基地から逃げ出した時に出逢つた　ヘリオンを「」の「」塔まで送り届けた……青髪の少女。

「そうよ、ホーリーよ。　間違いない、この娘よ」

「よし、保護しろーー！」

ホーリーが頷くと、その仲間がヘリオンをジンから奪い取ろうと手を伸ばす。

「　何しやがる！…何だ、ヘル！…こいつ、知つてんのか！？」

「ボクが売られそうになつた時　　助けてもらつたんだ」

「だからって、何なんだ！…こいつはばどこにもやらねえぞ！…！」

威嚇し続けるジンに、捕縛士たちは強攻策に出よつとする気配が感じられた。

「ガキ、あんたに聞かなくちゃならない事があるのよ。あんたの故郷を襲つた『バケモノ』についてね。　隣の男は恋人？悪いけど、一緒に面倒見切れないのよね」

「オレはこいつの父親だ！！！何だ！…カレドを襲つた犯人が何だ

つてんだ！？

ホーリーの言葉に、ジンも少なからず興味を覚えた
滅について、今更捕縛士が何を調べるというのか？

カレド壊

「父親も田撃者か？　いいだらう、とりあえず二人とも保護し
る」

「一々命令しないでよね、あたしはあなたの部下じゃないわ
この作戦の責任者である一番年上の捕縛士に向かってホーリーは不
満げに言い放つ。

「ホーリー、口答えするな！！作戦を失敗させるわけにはいかない
のよー！」

（ つむさいわね）

腹の底でそう思つたが、これ以上時間をかけるのも危険だったので、
黙つていた。

「これは他国の保護地区の中　　そこにセントクオリスの軍用機が
入り込んだとあれば、国際問題にもなりかねない。
（まあそうなつた所で、セントクオリスがゴテチヤに負けるという
事はありえないとは思つてゐるが　　戦争すれば勝つと解つて
いるのに、無駄なエネルギー消費に手を出すというのもバカげた話
だ）

「さあ、大人しくして下さい」

捕縛士の一人が視界から消えたと思った瞬間、ジンとヘリオンは首筋に衝撃を受け、声もなく倒れた。

「よし、オレたちは退避するぞー！ レッソ、ラテラ、2人でこの大男を背負つて飛べー！ 落ちるなよ！」

「了解。 見ろ、A班の方も始まつたみたいだぜ」

レッソが示した先のモニター画面には、古く質感の悪い映像が途切れ途切れに映し出されていた。その場にいた捕縛士たちは皆、ホーリーも含めて一瞬画面に見入った。

「本当に あんな任務、あいつに出来るのか？」

「シユラウド様がそう言つたんだ。出来るのさ」

シユラウド直々の命令 それを受けるのが、彼ら捕縛士にとつてどんなに名誉な事か。

今回の作戦で、その名誉が「えられたのが自分でない事に、彼らは嫉妬した。

「 わあ、 床るわよ 」

ホーリー は 言つた。

近づいた時に自分も ショウウドに選ばれてみせる。

嫉妬だけでは、上へは行けない 真実を見つけなければ。

エカニシシッ

エカウンハシ……！

2人のショイドが込められた弾丸が、魔人へと伸びていく妙な感覚に支配され、まるでこのまま時が停止してしまってはと思つくり、ゆつくりとゆつくりと

(コレは カライの……ショイド体の感じている時間の過ぎ方
なのか?)

自分の時間は何もかもが動かず 動く弾道を見る事で、からつ
じて此処が生ある現の世界である事を知る。

(さざられてたまるか)

リュクシーは歯を食いしばり、腹に力を入れた。

（私はまだ生きている……）

次に瞬きした瞬間、リュクシーの時間が動き出す

ビシッ

ビシッ、バリンッ！……！

だが弾丸はダメージを与える事なく敵を突き抜け、魔人の背後にあ
る一番巨大なモニターを破壊しただけに終わった。

魔人は大きく空気を吸い込むような仕草を見せ、その直後リュクシ
ーに向かって死の電撃を放つ その光景はやはり時間が止ま
つたかのようにスローで、リュクシーは再び魔人の時に支配される。

(やはり、ダメか 、！？)

絶望がリュクシーを襲いかけた時、魔人の背後にある複数のモニタ
ーに、古い そして確かに見覚えのある、でも今更思い出した
くもない映像が 映し出されているのに気づく。

(アレは
！！！)

『……ザ……………今…………の…………悪魔……………！…………！』

『……………、……………だ……と……言……つ……た……………は……ば……ず……だ』

『違う……………今……………は……………』

破壊

(ラジエンダの映像……………！……………！)

あの映像が何故今？

メダリアしかない、捕縛士が近くにいる。メダリアがカライを殺そうとしている ゼザがそばにいる……！！！

映像が視界に入った一瞬で、様々な思考が頭の中を駆け巡り、その隙が魔人のシェイドを避ける暇を与えなかつた。

いや リュクシーは既に完全に支配されていたのか？

1年前の、あの時間に

「あああああああ……！」

「リュクシー……！」

無防備にシェイドの直撃を受けたリュクシーを、信じられない思いでイチシは自身のシェイドで防護する。

「ぐつ

！！！

「や、やめろ、イチシ
私をかばうなーーー！」

私をかばうな！！

メダリアがカライを抹殺しようと考えている以上は死の瞬間を再現させる為の駒でしかない。

留めを刺した別の人間が存在するはずだ。

「バカ言つな
つ！――！」

しかし、イチシはリュクシーをかばい続ける。

命続く限り
イチシは自分を守るためにするだろう。それを感じ
たリュクシーは、もう一度自身のシェイドを奮い立たせた。

それがカライト真に決別する方法
てはならない！

「イチシ、お前も見てくれ
「！？」

過去の映像に引き込まれない第三者に目撃させる事も、気休めながらもシェイド汚染を防ぐ手段となる。リュクシーは目の前にいる魔人ではなく、過去を映し出すモニターへと視線を合わせた。

《ああああああああ！！！》

過去のリュクシーも、カライの意識に絶叫を上げている

『リュクシー！！！』

そして横にいるのは 青髪鮮やかなリュクシーのパートナー
…ゼザ。

カライ、やめろ！

おい、カライを止めるんだ！

そこの二人は人質にしろ！

こうなつたら、一気に攻め落とせ！

(ああ、IJの声までは覚えている　　IJの先だ！－！－）

「あれは　　あんたか……！？」

自分が田撃する事の意味が分からず、イチシはつぶやく

（ゼニ）だ　　ゼニから現れる！－長くは　　これ以上は、持た
ない！－！

カライの暴走を止めた者　　カライを殺した者。近くにいるはず
だ！－！

弾痕でヒビの入った巨大モニターが砕け、飛び散る液晶と共にその者は現れた。

「！」

リュクシーは息を呑む。その姿を見て

「彼を再び田にした時……自分は何を感じ、何を想うのだろう。」

『ミスエル、カライを止めて！！！』

ミスエル！！

蘇る声

記憶。

だがこれは、リュクシーの記憶ではない。

リュクシーの横にいた ゼザの記憶。
カライを殺した 『スエル』の記憶。

その2つは今、ここに在るーー！

ザンツツツ！－！

空中を舞う捕縛士
つに切り裂いた。

彼の剣から放たれた一閃が、魔人を真つ一

ダンツ！・！・！

シェイドを携えた捕縛士　　彼が着地した後、リュクシーとの間を遮つていた影の魔人の体がゆっくりと傾く。

（ああ、ゼザ　　再び巡り合つた……）

これは誰の支配する時間だらう。
魔人がゆっくりと倒れて行き、その後ろに佇むゼザの姿が徐々に露
になる

ドザッツツ！－！－！－！

魔人の肉体は、地に着いた瞬間、霧散していった

そして目の前にあるのは、新たな敵
リュクシーが牙向く事叶
わぬ、唯一の敵。

（敵
敵、敵だ）

リュクシーは電撃のシェイドを浴び、膝の力が抜け、立つ事もまま
ならぬ体をどうにかして動かそうとした。

「……」

ドサッ……！！

しかし、逆に倒れ込んでそれきり動けなくなる。
ハガルと戦い、カライのシェイドを浴び、リュクシーは己のシェイドの限界値をとうに超えていた。

カツ、ジャリツ、ジャリツ

冷たい石の床で、液晶の欠片が踏み碎かれる足音が響くのだけは感じた そして、何もかもが白くなつた。

れ、『己』が従えるシノイドをこれ

どうした

掘まねば捕縛士にはなれないぞ

そう、解っていた

あのシェイドに触れた時から

これが、何者の《命》であるか

このショイドの力を制し、奮うとこうことは

こうとは……

ガバッ！――――！

「つ
」

夢の中にいる自分は幻のはずなのに　　この胸に残る不快感は何なのだろう。吐き気を催し、ゼザは左手で口を覆つた。

「起きたか、ゼザ」

背後に、3期上の捕縛士が立っているのに気がつき、ゼザは瞬時に表情を消した。

「こ」のまま目覚めないかと思つたぜ。大物を仕留めた後つてのは、そのまま永眠しちまうヤツも多いからな

「…………」
ゼザが自分の言葉に嫌悪感を抱いたと思ったのか、彼は一人で弁解した。

「フツ」

そして、突然微笑を浮かべる。

「何かおかしいのか」

ゼザは簡易ベッドから起き上ると、緩められていた胸元をキッチ
リと締め直した。

（「これは
メダリアには未だ到着していない」ということか）

ゼザが寝かされていたのは、母艦の仮眠室だった。
そつなく眠っていたわけではないらしい。

「いや、尊通りのヤシだと思つてな。」
「いや確かに、固くて手強そ
うだ」

「」

この男 確か名前は《レアーテス》と言つたか。

彼と一緒にいるこの狭い空間が、自分を苛立たせている事に気づく。

そして、その理由も瞬時に思い至る。

似ているのだ 豊かな表情、人を惹きつける風貌、そして己の存在を当たり前として、光る場所を歩き続ける者。
自分とは 正反対の世界を生きている者。

「医務室にいるぜ」

「何の話だ」

「何つて お前のパートナーの話だ」

予想通りの答えが返つて来て、ザザはとうとう立ちを崩らせる。

「オレにパートナーはいない」

「やう言つなよ。死にそつだぜ？」

ザザは医務室にある小さな窓から、外の様子を伺つ。

眼下には、一面に淀んだ灰色の雲が広がつていた。

「任務は果たした。それとも、次の仕事の話でも持ってきたのか」「そーじゃねえさ。ただ、何かお前が無理してゐてーだから、オレは……」

「ぐ、だらない憶測だ。用が済んだら出て行つてくれ」「頑固だなあ……後悔したつて知らねえぜ？」

「同じ事を何度も言わせるな

レア、テスは肩を竦めてみせると、やれやれと呟きながら去つていった。

「 貴様も消えろ」

ゼザは背後に在る《氣配》に、苦々しげにつぶやいた。

「 お前が私に話しかけたのは初めてだな」

先ほどまでゼザが寝かされていたベッドの上に、純白の羽を背に生やした女が座っていた。

今更、この事実を否定してもどうにもなるまい

エイドを使って、仕事を果たしたのだから。

解つてはいたが 彌々しい存在であるには違ひなかつた。

「私の問いに答える気になつたのか」

ミスエルは続けて問う。

何度も何度も ゼザに繰り返したあの問いか。

「お前は何故否定する？自分の
「黙れ！……」

バキンッソッ！……

自分でも驚くほど叫びだつた 無意識にショイドの込められ
た左手は、覗き窓を打ち砕き、室内の気圧が下がる。

ビーッ、ビーッ、ビーッ

非常を知らせるブザーが鳴り、ザザは我に返つた。

バタンッ！……

「何だ！！！」

数人の捕縛士たちが、慌てて駆けつける

「何やつてんだ、ゼザ＝シアター！」

「操縦席。シャッターを閉める。S28室の左から2番目の窓だ」

さほどの大事ではないと知り、人騒がせなど嘆息すると、操縦席に通信をして皆去っていく。

「ゼザ＝シアター、目覚めたか。医務室に来い」

しかし入れ替わりにメダリアの研究者が入ってくると、短くそう告げる。

「向かいます」

どうしても、ゼザを彼女と対面させたいらしい
変えずと言つてのけた。

ゼザは表情も

彼女などに翻弄されない事が判明すれば、無意味な監視命令も解除されるだろう。

調べたければ調べるがいい

それで、好奇心が収まるのならば。

「 貴様も来る気か」

背を向けたまま、ザザは尋ねた。

『どうやら私はお前から離れられぬらしく…… ならば聞くまでもないだろ?』

ザザにつきまとひつゝ靈せ、透き通つた声で淡々と答えた。

『あの娘を必ず救う事だ。お前が目覚めるには、あの娘が必要だ』

そして、さりに苛立ちを誘つ言葉を続ける

(『救う』だと オレが、彼女を?)

あまりの戯言に、ザザは嘲笑するしかなかつた。

「意識が戻ったようだな」

「つ

」

ゆっくりと重たい瞼を持ち上げると、眩しい光が飛び込んで

来た。

その光量に耐え切れず、イチシは両腕で顔を覆う

見知らぬ男の声　　自分は今、どこにいるのだ?
自分はまだ油断ならぬ状況である事に気づいたイチシは、瞬時に飛び起きた。

「慌てるな　　まだ、普通に動くのも辛いはずだ」
「それに、逃げようもないぞ」

（早く、早く慣れろ　　）

未だ白い世界しか映そうとした自分の目に、イチシは苛立ちを覚えた。

だが徐々に　　自分がいる世界の真実が浮かび上がる。

それはイチシが今まで見た事も触れた事もないような場所だった。

「ほう、精神汚染はされていないようだな。中々強靭な精神力だ」
「ふむ　　シェイドを扱うだけの事はある。まあ、幼稚で機能性に欠ける消費の仕方だがな」

見た事もないような機械に囮まれ その中央にある手術台のようなものに、イチシは寝かされていた。

手術台の周りには、何かの研究者だらうか 白衣を着た中年男たちが6人立つていて、機械の付近に青髪の少年少女が1組 部屋の出入り口にもう1組。

(「こつらは、メダリアの捕縛士か オレたちは捕まつたのか

オレ、た・ち だが、リュクシーの姿はどこにも見当たら
ない。

ダンツツツ！――！――！

イチシは一番近くにいた白衣の首をつかむと、手術台の上に叩き付けた。

「げえほつつ……！」

「リュクシーはどうだ……！」

逃亡者として既に抹殺されているのでは
不吉な想いがイチシ
の胸によぎる。

「ヤメなさい」

だが次の瞬間、イチシは四方から武器を突きつけられていた。

刀であつたり、銃であつたり、鎌であつたり
だつたが、共通すべきは埋め込まれた妖しい輝きを放つ石。
これが誰かの魂である事は、イチシには当然のよつて理解できた。

「まだ生きてるわ。だから、その手を離しなさい」

「信用できるか」

あつたり受け入れられるはずもなく
イチシは腕にショイドを
込めた。

「げえっ……ううっ……！」

更にきつく首を絞められて、白衣の顔は見る見るうちに赤くなる。

「ならば、ここで殺すぞ。リュクシーと対面する事はできなくなるな」

「……」

「ううう……！」

「サツ……」

赤から青に変わりかけたその時、イチシは手を離した。

「げえほつ、ぐえつ、げえほつ……！……！」

「大丈夫か！お、医務室へ！……！」

「……」

「外の連中はこれだから困るわ。状況判断ができない」

未だ武器を下りさうとしない捕縛士の少女は見下したような口でそう言った。

それはイチシたち、外世界の人間が嫌悪を覚える自分を《人間》と認識しようとしない、偏見の眼差しだった。

こいつた連中の中でも育つて、よくリュクシーはまともでいられたものだ

シュンツツ！－

「イチシ、来な」

扉が開いた瞬間、その人物を確認しない内に名を呼ばれた。

「貴様は……」

「一秒も無駄にするんじやない。リュクシ－の命はそれほど長く持たないよ」

『テチヤの港で出会った捕縛士 マディラ＝キャナリーが眞実を言つてゐるのさ、そのシードから伝わった。

「オレが、助ける どこだ、リュクシ－は……」「付いて来い」

リュクシ－が侵されているのは、肉体の傷ではない なまらば、イチシ自身のシードを分け取れる事ができれば、救つ事もできよう。

イチシには、己のシード全てを取れる覚悟だつてあった 分に彼女を救えぬはずがないと心底から思つていた。

自

「……だ

ションツツ……

マティラがその部屋に踏み入れる前に、イチシは中に飛び込んでいた。

「！？」

だが、その部屋は。
そもそも部屋と似たような機械の壁に囲まれた中に、際立つのは
巨大なモニター、その前に佇むのは 一人の男。

男 ？

不気味なほど静かなシェイドだ いや、冷たい……そこには《
何も感情がない》のだ。

青髪の連中と違い、メダリアの制服を着てはいなかつたが、シェイドの剣を帯剣している姿から、男も捕縛士であるに違いない。
しかも、数段格上の いや、この男は別格だろう……この殺伐としたシェイドには、攻撃の糸口さえ見つからない。

額を冷や汗が伝うのが分かる。

この捕縛士の前では、自分は虫ケラも同じだ。

「時間がない。イチシ、あなたは選択しなくちゃならなーよ」

マディーラの声に、イチシは呼吸さえ忘れていた事に気づく。

「リュクシーはどこだ……！」

「メダリアの作戦の駒になるか。あなたが自らの意思で従うのなら、リュクシーは逃がしてやるわ」
「セントクオリスの駒になれだと……！」

「あなたが拒否しても、メダリアからは逃れられない。あなたは『依りまし』をしていたね。その体には、凶悪なショイドが宿るうとしている。何の事だか分かるだろ？。あなたも見たはずだ」
マディーラの体の周りを見覚えのあるショイドが……赤い記憶が巡っているのが解る。

ドクンツ

イチシに襲い掛けた狂ったような笑いを浮かべた少年
少年の姿をした化け物。

いや、

「メダリアはあの者を滅する。

解るか、その意味が。

依りま

「うまいも

解らぬほど　　イチシは愚かではなかつた。
この運命からは逃れられぬと　　捕縛士たちの瞳がそう語ついて
た。

（リュクシーは……化け物を直接見てはいない
の影響は受けたにしても、まだ間に合つ……）
オレから多少

「従つなら、あの娘を救つチャンスをやひつ。リュクシーの前に連
れて行つてやる」

この少年がどう答えるか　　マティラには解つていたが、それで
も聞くしかなかつた。

人を想う心 愛しさという感情。

マティラたちが失つてしまつたそれを抱いているこの少年を
ドラセナを殺す為に、利用して葬る。

死人の為に、生き人を犠牲にする 何かが狂つてゐる。
いつから世界は、狂い始めてしまつたのか。

「時間がない 早く連れて行け！－！」

イチシは叫んだ。

答えはこれしかない 選ばされたんじやない。

イチシが望む答えもこれだつたはずだ。リュクシーを守る。自分に
可能な限りの方法で、彼女を守る。

自分は連れられそうもない鎖から、せめてリュクシーだけは解き放
つてみせる。

「　　来い」

「マディラは今初めて、全身全靈でドラセナが憎いと思つた
や、かつてドラセナだった『残像』が。
微かに残つていた愛は、依りましの少年の決意の前に、霧散して
つた。」

（リュクシーに道は用意してやるつ 生き延びる道を。それが
あんたの決意に対する、あたしの誠意だ）

メダリアに灼き殺される その事実を受け入れたイチシに、マ
ディラもそつと誰にも言えない決意を固めた。

それほどまでに、マディラたちの死の記憶はおぞましく苦しいもの
だつた。

全てを承知の上で、今なお前を見据えて歩く少年に心動かされぬほ
ど、マディラはまだ化け物ではなかつたのだ。

「マテイラ様！」

「たつた今、心停止しました」

「どけ！！」

医務室に着いた瞬間、治療にあたつていた医師からリュクシーが死亡したとの宣告を受ける。

イチシは医師を突き飛ばすと、リュクシーに駆け寄った。

裸体で横たえられたリュクシーは、体に様々な管を取り付けられ、血の氣のない顔をしていた。

「どけ、電気ショックを

「いや 一人だけにしてやれ

「は

！？

「死亡させていいんですか？」

「しかし、シユラウド様からきつく、絶対殺すなど

」

「マディラの言葉に、医師たちは次々に声を上げる。

「いいから、出なー！シヨイドの精神汚染者に電気ショックを与えた所で、生存率が散々なのは知ってるだろ？！」

壊れたのは肉体でなく、心　　再び心臓を動かせたとしても、死に逝く心を留める事はできない。

「は、はあ　　」

「出なつてんだ、早く！－」

マディラは医師たちを蹴飛ばすと、自分も医務室を後にした。

医務室は壁の上部と天井がガラス貼りになつており、外から様子が伺えるようになつていた　　医師たちはデータだけは取ろうと、外からリュクシーに接続された機械に数値をチェックする。

マディラも医務室の外2階に移動して、リュクシーの生命力を2人の行く末を見届ける事にした。

カツツ、カツツ、カツツ

背後に入影を感じ、マディラは少しだけ視線を投げかけた。そこには、純白の羽根を持つシェイドを従えた青髪の少年が立っていた。

リュクシーの様子を見物に来たのか、その後ろには捕縛士の少年少女たちがぞろぞろと姿を現した。

マディラの存在に気づくと、少年は敬礼してみせる

だが彼がマディラの興味を引く事はなく、マディラはゆっくりと視線を戻した。

（生き延びるんだ、リュクシー。シェイドに食われる人間ばかりでない事を証明してくれ）

そうでなければ ドラセナを滅せたとしても、世界はいざれ闇に飲み込まれるだろう。

「オレを感じろ

……死ぬのは早すぎる……」

「リュクシー……目を開けてオレを見ろ……」
ぐつたりと横たわる体を抱き起こし、イチシはリュクシーを抱き締めた。

全身を持てる限りのショートで包み、イチシは何度も何度も口寄せた。

「皿を開けろ……」

「ンシッ……

「ホレの皿を開け……」

「ンシッ……

「コクシ……」

「ンシッ……

何度もかに心臓を叩いた時、リュクシーの口から小さく息が漏れた。

「！」

胸元に耳を押し付けると 微かに聞こえた。

「リュクシー……解るか？ オレのシェイドが ！」

しかし相変わらず顔の筋肉はぴくりとも動かず、体からは力が抜けたままだ。

「…………！」

確かに 2人にはまだ、何の記憶もなかつた。

「けふつ……」

死の淵に立つたリュクシーを呼び戻せるだけの、生の記憶
れ合つた時間、感覚。全ではこれからだったのに

触

「死ぬな　死ぬな……」

再び弱まる鼓動に、イチシは全身のショイドを込めて口付けする事
しかできなかつた。

（あんたがオレを愛しているのな
！！！！！）

リュクシーを死にいたらしめようとする暗く恐ろしい意志

そ

れを打ち消す以上の、強い想いがここにある事を。

（氣づけ　飲まれるな、リュクシー……）

「…………う……」

今 声が漏れなかつたか。

イチシの頬に、弱々しい息がかからなかつたか？

「そりだ、目を開ける…………！」

ピクッ イチシの声に反応して、リュクシーのまぶたが微かに痙攣する。

「リュクシー…………！」

田を開けると……イチシの泣きそつた顔がそこ
にあった。

「いや、近すぎてよく見えない
うみつに立たない。」

「イチ、シ……？」
「あ
「あ
「オレだ

「お前の声が
聞こえた」

リュクシーはすっしりと重い腕を伸ばし、イチシの背中にじがみつ
いた。

「私を
呼んでいた」

リュクシーの瞳に映る自分の姿を見て
抱き締める彼女の熱を感じて……
イチシの中の全ての感情が、止め処もなく湧き上がるのを感じた。

自らの意志でイチシを

「な、なんか後輩のそういう現場叩撃すんのって、ドキドキすんな

……」

「バカ！…何まじまじと見てんのよ…」

「だ、だつてさあ 田が勝手にそつちで……」

「医務室の方からは、いつも見えてねーからなあ……ギャラリーが
いふとも知らないで、まあ」

思わぬ展開を田にして、少年少女たちは頬を赤らめつづめ、しつか
りとその光景に見入っていた。

「マテイラ様！…もう中断させますよ…貴重な実験体が妊娠でもし
たら困ります」

「覚醒は済んだよつだ、好きにしな」

妊娠…………これから一人で逃げ延びよつとするには、それはリュク
シーにとつて大きな負担となる。
イチシにはかわいそうだが、止むを得ぬだらう。

「いや、そのまま続けさせぬ」

「ブチンツツー！」

突然モニターの電源が入り、ショーラウドの顔が映し出される。

「何を企んでいる？」

思惑がないはずがないと、マディラはモニター越しにショーラウドを睨み付けた。

「生まれるものは、放つておく事だ。それは新たな実験体となる」

（あたしらには もはや何も生み出す事ができないからか。しかし…）

せっかくイチジがドラセナのショイドを一人で背負う決意をしたのに、2人の間に子供が出来ては ドラセナに逃げ道を作る事にはなるまい。

（いや リュクシーにあの《役目》を負わせる以上、生き延びるという事は、ドラセナの完全消滅を意味する。子供と共に死ぬか、子供と共に生き延びるか……2つに1つしかないだろう）

全ては なるようになるしかないだらう。
あの2人の子供なら、きっと……死人を乗り越える強さを持てるか
もしれない。

そもそも 今の時代、健常者であつても子供を作るという行為
には低い確率が伴う。
この2人にそれが成立したとしたら それはきっと意味のある
事なのかもしねり。

(あたしは、見たいさ ショイドの呪いに打ち勝てる人間の誕
生を。死人だから無責任にそう言える。あんたの苦労は予測でき
も、そう思つさ……)

そして シュラウドよ。

お前は2人の子に、討たれるがいい。

リュクシーが成さずとも、2人の子がそれを果たすだらう。
2人の意志を継ぐ子が、それを果たすだらう。

リュクシーはぼんやりと宙を見つめていた。

視界に映るのは、どこか見覚えのある天井 リュクシーは体を横にしていたが、起き上がるうという思考が働くなかつた。体中が、ただただ重くだるかつた。

瞬きする度に、色んな記憶が断片的に脳裏を過ぎる。

黒い魔人に追われ、TV塔を駆ける自分 魔人が滅びた瞬間。
魔人の次に現れた、敵 そして意識は途切れる。

その繰り返しの中に、ハガルの死に様、イチシの顔、カライの笑み
色々なモノが、リュクシーの中で浮かんでは消える。

パタッ……

その時、何か温かいモノがリュクシーの体に触れた。

リュクシーはゆっくりと首を左に傾ける

思つよひに動ひつゝ

しない体でも、この動作なり苦もなくできた。

（イチシ……）

隣でイチシが寝ていた。リュクシーは腕を伸ばし、そつと頬を撫でる

「一」

船上の時と違い眠りが浅かったのか、イチシは触れた途端、覚醒し

た。

「……オレが分かるか？」

リュクシーの顔を覗きこみ、イチシは静かに言った。

ゆっくりと頷くと、痛いほどにきつ々抱き締められる。

だがその痛みが心地よかつた

それはまだ生きているとこひ証

だつたから。

ここがリュクシーの帰るべき場所なのだとこひ証だったから

シユンツシ……

「お前、無事か……」

突然、部屋のドアが開いたかと思つて、聞いた覚えのある声が飛び込んできた。

「うー、うおおおお……！…す、すまん！」

(「の姫は そ�だ、ジンだ）

この時よつやく、リュクシーは体を起して、意識が芽生え実行に移す。そして、やけに動搖した姿のジンを発見する。ジンの背後には、ぼぼ隠れてしまつていて、一人の少女が立つていた。

「な、何やつてんだよ、イチシー！」

「ヘル、お前は見るんじゃねえー！」

動搖する一人の姿に、リュクシーはふと自分の体を見下ろし全裸なごこち気づき、ぎょっとした。

「これ、着てる」

イチシが何か布切れのようなモノを放つてきた。
それはイチシが着ているのと同じ、布切れを前合わせで簡単に留めただけの、手術衣のようなモノだった。

（これは　　）

自分がどこにいるかを把握し、リュクシーはぼやけた頭を2、3度叩き、意識を集中させようとした。

「ジン、ヘリオン。お前たちもメダリアに捕まつたのか……」

「やつぱつあの連中は捕縛士だったんだな」

リュクシーと一瞬だけ目が合い、ヘリオンは疑心の眼差しを浮かべると父の背に隠れる。

その原因は

自分の髪を一房つかみ、ライトに透かして見て納

得がいった。

黒く染めたはずの髪が、元の色を取り戻していた。

ヘリオンからしてみれば、リュクシーは得体が知れない女に違いない。

「 すまないな」

「 ん? 何でお前が謝るんだ?」

短く言つたリュクシーに、ジンは怪訝な表情を浮かべた。

「 一度捕まつてしまつたら 私には、お前たちを逃がす手段がない」

メダリアに捕まつた 肉体を抹殺される事がないのは既に分かっていた。

ならば メダリアはリュクシーを洗脳し直し、別の人格を植えつける気なのかもしねり。

いや それならばまだいい。

最悪なのは、ジンやヘリオンを人質にして、今のリュクシーの人格のまま、メダリアに従わせるという方法だった。

(だが、きっと結末は《最悪》なのだろうな)

「その事だが あなたが寝て いる間に、オレが交渉した」

その時、イチシが思いも寄らない言葉を口にした。

「交渉 ?メダリアとか?」

「オレとあんたが作戦に協力すれば、ジンとヘリオンはランドクレスに移住させてもいいってな」

(やはり 人質にする気か)

しかしランドクレスとは セントクオリスを毛嫌いしている国であるはずであったが。

セントクオリスを解しての移住者など、受け入れるとは到底思えない。

最も情報を偽ればいくらでも可能ではあつたが そこまで労力を割いて、ジンたち親子をランドクレスに移住をせむといつ代償とは何なのだ。

それにリュクシーでなく、イチシと交渉した点も何かが引っかかった

「お前！！そんな事して、お前らはどうなるんだ！？大体作戦って言つても生きて帰れる保障なんてねえだろ？…」

「これしかねーんだ！…」

イチシは声を荒げてジンを黙らせると、3人を見回して言つた。

「別に死ぬ気なんて欠片もないぜ……作戦の地もランドクレスらしい。仕事が終われば、後は勝手にしろという話だ」

「胡散臭いには違ひないが」

メダリアは信用ならない。これだけははつきり言えた。

「……イチシの言つ通り、それしか方法はなさそうだ」

リュクシーは部屋を見回した　　「こゝは、かつてのメダリアと同じ。」

24時間監視され、自由のない実験体……

シュンツ！

「悪い話でもないさ」

再び扉が開くと マティラ＝キャナリーが現れた。

「……」

あれだけシュラウドを毛嫌いしていたマティラがメダリアの軍艦にいる その不自然さに、リュクシーは眉間にしわを寄せた。

「 作戦とは何だ。セントクオリスはランドクレスに何をしかけるつもりだ」

「それは言えない。だがランドクレス潜入の為に、イチシには治療を受けてもらう。カタス病を発症している者は、入国審査の対象にすらならないからね」

「……！」

イチシの命が延びる その事実に多少の喜びを感じたのは確かだったが……カタス病の治療には莫大な資金が必要だ。

そつまでしてイチシを利用したい作戦とは、一体何なのだ。

「　　イチシ！カタス病つて……」

ヘリオンが驚いて声を漏らした。

「ああ　　どうちにしろ、オレはそつ長くない。どんなに危険な仕事だとしても、生き残りやえすれば……この女の言つ通り悪い話じやない」

「お前がやる氣なら、オレはもつ何も言わねえ……」

イチシが生き延びる最後のチャンス　　それが分かつたから、ジンは言葉を飲み込んだ。

「…………」

リュクシーとイチシの歴史は浅い。お互いの事など、知らない事だらけだった。

だが分かる。イチシは何かを隠している。

そして彼は決意している。この秘密は誰にも漏らすまいと

「リュクシー、あなたの口からも聞いときたいね。《自分の意志で
》メダリアに協力するか否か」

マティアの問いに、リュクシーは田の前にいる捕縛士を睨み付けた。

「やうやくメダリアは全て自分の意志で選んだんだと洗脳していく。汚いやつ方だ」

全ての道を断つておきながら 選ばざるを得ない状況を作り上げておきながら。

お前は自分の意志で選んだのだと、刷り込まれる。

「だったら今死んでもいいんだよ。好きにしな」

そう ただ一つ残る抜け道は、全てを放棄する事だった。

「 セルヤ」

死を選べば、メダリアに屈服する事になる。

「私を生かす道を用意した事を後悔させてやる」

自分を貫く嫌悪の眼差し 憎しみでもいい。それが生きる意志に繋がるならば。

いつかこの娘がショーリードを倒す者へと変貌するならば、マディラの望みも果たされや。

（生きてこらへり） 可能性がある。生き延び、リュクシ一。生きて真実を突き止めや）

「マディラでは叶わない　　この身は既に、偽りの姿。
捨てきれぬ感情に囚われた、ただの幻

「イチシが治療している間、あなたはショイドを回復させな。ラン
ドクレス潜入には色々と下準備が必要なようだし、ゆっくり
といつてもできないだろうが、養生するんだね」

リュクシーは乗り越えられるだろうか。

マディラが味わった　　あの苦しくておぞましい呪われた瞬
間を。

逃れる事のできなかつた、『死』といつ化け物を。

(できなければ　　あんたもソーク=デュエルに斬られるだけだ)

「よお、リュクシー」

トレーニングルームから出て来たリュクシーを待ち伏せしていた人物がいた。

「　　レアデスか」

何期か上の捕縛士だった　　子供の頃、一緒に行動していた記憶がある。

彼が捕縛士になってからは、全く交流は絶えていたのだが。

「なあ、聞きたいんだけどさ」

「　　なんだ」

リュクシーの監視役はこのレアデスか　　そんな事を思いながら問い合わせる。

「随分と早い」出世つらやましい限りですが、何をやったのか教え

てくれない?」

「……」

レアデスの言葉の意味が分からず、リュクシーは返す言葉に詰まつた。

「何だ 知らないのか?」

「……何の話だ」

リュクシーはレアデスの次の言葉に自分の耳を疑つた。

「何つて お前、今《S》だぜ? 何も聞いてないのかよ?」
「……」

「S」 その言葉の意味は、リュクシーの知るあの《S》なのだろうか。

「そう。つまり」

レアデスはリュクシーを指すと、ニッコリと微笑んだ。

「オレなんかより、ずっとお偉いさんてわけだ。てか、口調は変えないとダメか？」
「あ、公式の場でなきや今まで通りでいいよな」

バシッ!!

汗を拭いていたタオルを床に叩き付けると、リュクシーは言った。

「シユラウドはダメだ」

「そりゃ無理だな」

間髪入れずに否定したレアデスを睨み上げ、リュクシーは言った。

「お前の判断など聞いていない。マティラはダメだ」

「何だ、期待外れか」

前に立ちはだかるレアデスを押しのけ、そのまま行こうとしたが、彼がつぶやいたその意味深な台詞が、リュクシーの興味を引いた。

それはまるで、「お前なら何か知っていると思ったのに」という意味に聞こえたのだ。

「……レアデス。お前、何を考えている？」

レアデスは質問には答えなかつた。

その整つた顔から、魅力的な笑みを漏らしただけだつた

猜疑の眼差しを向けていたリュクシーは、この笑みに氣を殺がれてしまつ。

そつといえ、昔からそうだつた

この男はその万人受けするであろう非の打ち所のない容姿と屈託のない笑顔を武器に、相手の警戒を解いてしまうのが得意なのだ。

実際、リュクシーが知るレアデスという少年は、性格も人から好かれるものだつた。

いや、中には全てにおいて完璧な所が返つて反感を買うのだと言う人物も多いのだろうが、そういう意見はただのやつかみとして流されてしまつくらい、レアデスには味方が多かつた。

だが、それは3年以上前の話だ。

リュクシーより3年程早く捕縛士となり、色々なものを見たであろう彼は、もはや昔のよく知っていた少年ではない。

背もリュクシーより遙かに高く、かなりの手練れを感じさせる研ぎ澄されたショイド、少年は逞しく成長していた。

（この男は私の知っているレアデスとは違う　）

この悪意など微塵も感じられない笑顔の裏で、何を考えているのか全く得体が知れないし、決して油断して良い相手ではなかった。

「　　この話の続きをランドクレスでな」

ここでは、話がメダリアに筒抜けだから　　と、レアデスは軽くウインクして見せた。

「で　　シュラウド様には面会は不可だぜ。今回の任務はマディラ＝キヤナリー・ソーク＝デュエルの二人が指揮を執る。シュラウド様は一切関知しないそうだ」

「何だそれは　　」

メダリア最高責任者であるシュラウドが《一切関知しない》とは、どういう事か。

(シユラウドは シュラウドの過去に何か関わりがあるのか?)

メダリアドームの完成と同時に、そのトップへと納まつた謎の男。

『シユラウド』といふ男の過去を、末端の捕縛士たちは誰も知らない
メダリアの研究員の間では、いくつかの噂が流れているよう
うだったが、どれも信憑性のあるものではなかつた。

だがその謎の多い男を捕縛士たちは崇拜し、彼の為にその身を捧げ
戦う 何故そんなバカげた事ができるのか、リュクシーには全
く理解できなかつた。

(元々シユラウドは人前にはあまり姿を現さず、陰で捕縛士たちを動
かしていたが)

リュクシーたちに手伝わせる任務とやらは、シユラウドにとって何
か都合の悪い事情があるのかもしれない。

「まあ、今回がそれだけ特殊な任務つて事さ。今までの魔獣狩りや
偽人道支援とは全く違う」

リュクシーが考へてゐる事を読んだのか、レアデスは色々な意味を含めて言葉を選んでゐるのが感じられた。

「やつぱり思つた通り お前とはつまくやれそつだな」
「……」

レアデスにとつて、リュクシーの反応は予想通りの嬉しいものだつたようだが、リュクシーにとつては胡散臭い相手であるには違ひなかつた。

「子供の頃に付き合いがあつたからといって、馴れ馴れしいのは止めてもらおう」

「ま、今はそれが正しい反応だつうな。尻の軽い女は好みじゃない
「……お前の好みなどどうでもいい」

あくまで冷たく言い放つリュクシーに気分を害した様子は微塵もなく、レアデスはにこやかに言つた。

「そつだな、よく知らない人間には心を許さない方がいい。相手を信用するには、それなりの時間を必要とするもんだ」
「お前を信用する気はない。必要もない。 そこをビク。私はマディラの元へ行く……」

ドン・シ・シ・ー・ー・ー

ドン・シ・シ・ン・ド

これ以上の会話を続ける気はなく、横を通り過ぎようとしたリュクシーの腕を、リアデスはいきなり捻り上げ、壁に背中を叩きつける。

「お前はまだガキだな 一つ教えておく。信用するしないと、
魅かれ合つかどーかは別問題なんだぜ。あいにくとな」

「つ
何が言いたい……」「

未だシエイドの回復が思うよつでないリュクシーは、レアデスの体をはねのける事ができない

「お前の彼氏は、どうやら飼い犬なのかもしれない」とは思わないか？」

「それはイチシの事を語っているのか？」

抵抗すればするほど、レアデスの力は強くなり、つかまれた箇所の骨が軋むのを感じた。

「黑」道二三事
卷二

「何故私にこんな真似をする
お前には何も関係ないはずだ」

お互の息がかかるくらい間近で、アーティスの瞳を覗き込むと、この男には一面性がある事をリュクシーは悟つた。

が、内面はひびく冷静で計算高い男なのかもしれない。

「見込みがありそうだから試してみるのさ、オレは。お前の可能性をな」

「失せろ その手をだけないと、お前の喉を歯み切つてやるー！」

「だけ」

その時、背後からイチシの声が聞こえたと同時に、レアデスの体が吹っ飛んだ。

『サツツツ…！…！…！

「おつと 」

『…ほど廊下を飛ばされ床に叩きつけられたレアデス だがそんなに大層なダメージを受けた様子はなく、次の瞬間には身軽に起き上がつてみせた。

「彼氏の『J』登場か」

殴られた頬を擦るレアデス。
大して堪えていないと思ったが、彼の整った顔が見事に大ダメージ
を受けていた。

「大丈夫か」

「お前こそ 治療はうまくいったのか？まだ安静にしていなけれ
ば……」

「オレの事はいい。今はあなたの話だ」

イチシは今までずっと、カタス病の治療の為にリュクシーたちから
隔離されていた。

この軍艦に閉じ込められてから約1ヶ月弱 久しぶりに見たイ
チシの姿は、少し痩せて見えた。

(……)

治療は順調に進んでいるのだろうか イチシは病を克服できる
のだろうか。

その顔を見た瞬間、色々な感情がリュクシーの中を駆け巡る。

「あーあ、何て顔だリュクシー。お前、そんなんじゃこの先持たな
いぜ？」

「まだいたのか。とつとと失せろ」

ひどい顔をしていると言われ、リュクシーはさらにむつとしたが、これ以上レアデスと関わりたくない気持ちをイチシが代弁してくれた。

「　　おい、お前。警戒する相手が違うぜ？・リュクシーのパートナーはオレじゃない」

ショイドを身にまとい威嚇するイチシに臆する事もなく、レアデスは再び意図の見えぬ挑発を繰り返す。

(二)こつはまた余計な事を　　どうこつつもりだ

リュクシーとイチシの間に波風を立てる事が目的としか思えない発言の数々　　彼が垣間見せる《敵意》が誰へ向けてのものか全く分からぬ。

「まあ、いい。全てはランドクレスに着いてから、だ」

「失せる」

イチシが短く言つと、レアデスはよつやく去つていつた。

「……」

リュクシーは、レアデスが消えた通路の先を見つめた。

マディラ＝キヤナリから聞かされた『仕事』とは、とある捕縛士の
抹殺

それが如何に若い捕縛士を大勢そろえたところで、簡単には済まない仕事だという事は分かつている。

相手は『ドラセナ＝ロナス』

特級捕縛士の一人。

リュクシーは気づいていた 『イチシ』を利用しようとする事実からして、相手は生身の人間などではない。

死してなお、シェイドの色褪せないモノ。

『人』という枠を超えた、かつて『人』であったモノ

メダリアは、イチシをシェイド体の器にして、葬り去るつもりなのだ。

人質を取られ、イチシは自らの意思で決断したのだろう
シならきっとそうだ。

イチ

普段は構われるのを嫌がる素振りをしていても、本当は人一倍身内を気にかけている事を知つてしまつていたリュクシーは、メダリアの卑劣なやり方に腹が煮えるのを感じた。

（イチシは私にジンとヘリオンを託し、一人で死ぬつもりかもしれない）

大いに有り得る事だ。

カタス病によつて一度人生を諦めているイチシは、一人犠牲となる道を選ぶかもしれない。

（ジンとヘリオンは必ず逃がす。でも）

リュクシーはイチシに振り返り、その目をまっすぐと見据えた。

「行こう　　体力は温存しておかないとな。半端な仕事じゃない。
氣を抜くと死ぬからな」

リュクシーはイチシと生きると決めた。

イチシの決意はどうあつと　それが今のリュクシーの偽りない心だった。

「窮屈でやつてられねえな…首が苦しい…」

メダリアから渡された服に着替えたジンは、肩をぐるぐると回すと不満そうに漏らす。

「こんな動きづらに服を着たのは始めてだぜ…」

ジンは鏡に映ったヴィーツリー国の正装姿の自分を見て、ため息をついた。

「あは、ジン別人みたいだね」

部屋の隅のソファに座り込み父の様子を見ていたヘリオンは、珍獸でも見るような目である。

「おー、お前は似合つてゐるぞ、ヘル」

ヴィーツリー国の貴族の娘が好むドレスに身を包んだヘリオンは、幼顔の少女の初々しさを残したまま、軽く施した化粧から少し小生意気さを漂わせている。

「ボク、ドレスなんて初めてだよ……」

似合つてるとは言われたが、ヘリオンにとつても落ち着かない服であるには違いない。

外で『娘』である事を隠して生きてきたヘリオンには、保護地区で好まれるスカートなんて未知のものだった。

まして、こんなヒラヒラした服など　自分からは手を出さない代物だらう。

シユンツ……！

「思つた通り似合つてねーな

ジンと同じような正装姿で現れたイチシは、部屋に入るなり正直な感想を述べた。

その声は心なしか普段よりも不機嫌そうで、寝起きの時のようすに間に皺を寄せている。

イチシの格好はといえば、既に襟元を緩めるなどかなり着崩してい
て、『ヴィーツリー 国の資産家一族』という注文からは少々遠ざか
つてしまっていた。

「資産家なんて柄か、オレたちが」

こんな堅苦しい服似合はずがないだろうと、イチシは端からや
気がないようだ。

「でもジンよりはイチシの方が似合つてると、ちょっと痩せたせい
かな……」

言つた後で、ヘリオンは改めてイチシの顔を見た

まだカレドに住んでいた頃、ヘリオンは今より更に幼い
少女であつたが、遠縁のイチシとの縁談話が持ち上がつていた。

カレドは居住禁止区域に不當に住み着いた者たちの町だ 保護
地区に生殖能力を持つた人間はさらわれて、出生率は恐ろしく低か
つた。

そんなカレドで、ジンたちの家系は数少ない《血統》の一つだった。彼らは他の住人より長く生き、生殖機能のある子孫を残す確率が高かつた。

ヘリオンもその血統の娘だ 母は病弱だったが、父の生命力の方を継いだらしく健康で、恐らく生殖能力もあるだろうと予想されていた。

（こればかりは確かめる医学的手段がカレドにはない為、《第一伴侶》との結婚生活の経過を見るしかないのだが）

《第一伴侶》は初婚の者同士が組み合わされる。

うまく子孫を残せればそのまま伴侶となる場合も多いが、片方に（或いは両方に）不具があつて子が宿る気配がなければ、同じような状況の二人組と伴侶の入れ替えを行う。

三回、四回と入れ替えを行うケースもあるが寿命の問題もあり、子孫繁栄は実現せずに逝ってしまう者もいる。

自分の《第一伴侶》になるはずだったイチシ。

だが再会を果たした時の彼は、見知らぬ女と最期まで生きる事を決心していた。

父親の次くらいに信頼していた相手が、自分の知らない世界を歩んでいる事実に、ヘリオンは少し寂しくなり 相手の女、リュクシーに対してもう接していいのか分からなくなってしまう。

父とも親しげに話すリュクシーに ジンまで盗る気なのと叫び

たくなつてしまつ。

頭では分かつてゐる イチシが選んだ人だ、悪い人間ではない
だろう。

それはジンの接し方を見ても分かる。

ヘリオンを探す為に力になつてくれた話も聞いている。
だが、ヘリオンはまだ信用しきれなかつた。

憎んでも憎みきれない捕縛士に関わりがあつた女だが、今は事情が
違う事 それもジンやイチシから聞いたが、人はそんなに簡
単に変われるものだらうかと思つてしまつ。

いや、捕縛士であつた事はきっと大した問題ではないのだろうと思
う 「ゴーテチヤで、売り飛ばされそうになつたヘリオンを助け
たのも捕縛士だつたのだから。

(ボク イチシの事、好きだつたんだなあ……)

痩せて少しやつれ氣味な横顔も、ぶつきらぼうな口調も、イチシの

何もかもを見つめる度にそれを実感する。

（一人が外に行くつて言つた時、ボクも付いていけばよかつた
）

実際は少女が外の世界を旅するというのは狂氣の沙汰だらう
一緒に行動する一人の命も危険にさらしちゃうし、有り得ない
選択肢だつたのは分かつていただが、そう後悔せずにいられなかつ
た。

このまま保護地区で自由のない暮らしを送るのは耐えられない
夢だつた船乗りになつて世界を回つてみたい。

ジンがそつ言つた時、本当はヘリオンは反対したかつた。
だが、必ず戻つて来るのなら 期限付きならと、ジンを外の世
界へ送り出した。

ジンの決意は23歳の時 外では既に余命は後数年と囁かれる
年だ。

家族の為に尽くしてきたジンの願いを、ヘリオンは叶えてあげたか
つた。

例え離れ離れにならうとも 帰つて来ると信じて、送り出して
やろうと思つたのだ。

「とにかく、リューの奴はどうしたんだ？」

イチシと一緒に現れるものとばかり思っていたのか、ジンは怪訝そうな顔をする。

「マテイラ＝キャナリーに話があるそうだ」

妙な間の後、イチシは言った。

「一人でか？」

なるほど、何だかイライラして落ち着かない顔をしている理由はこれだつたのかと納得しながら、ジンは尋ねた。

治療を終えて動けるようになったイチシは、リュクシーをそばから離さなかつたし、離れなかつた。

セントクオリスが彼女に再び洗脳を『えるのを防ぐのと、もう一つリュクシーを独占したい』という気持ちの表れだとジンは思つていた。

実際、ジンの予想は当たっていた。自分の制止を振り切つて、「確かめなくてはならない事がある」とマティラ・キャナリーの元へ行つたリュクシーの事を考へると、非常に落ち着かない気分になる。

この軍艦には、リュクシーのかつてのパートナーも乗船していると
いう姿を見せずに卑怯な奴だ。リュクシーが今更セン
トクオリスになびくとは思わないが、それとこれとは別である。

リュクシーの過去を知る男　　リュクシーが過去愛した男。

それは本当に過去か？

そつ言い切れるか？

これは幼稚な嫉妬だ。

リュクシーがどれだけイチシを気にかけていようが、深く愛している
ようが関係ない。

自分その他に、彼女と深く関わる者がいる といつ苟立ちだつた。
(しかも相手は姿を見せない)

それに、イチシは分かっていた どんなにリュクシーを求めよう
と、最後の最後の一線で、イチシは彼女を切り離さなければなら
なくなる。

それができなければ、リュクシーを道連れにしてしまつ事になる

片時も離れずそばに置いておきたいという感情と、そうしては危険
だという焦り その両立のさせ方を、イチシは模索している最
中だつた。

「イチシ

声をひそめ、ジンは言つた。

「セントクオ里斯が何をやるかとしているかは知らねえが、ヤバくなつたらオレに言つんだぞ」

メダリアに手伝わされる仕事の内容を自分たちをこれ以上巻き込まない為に口を閉ざしているのは分かつてたが、そんな危ない橋を渡ろうとしている一人を、ジンも見ていられなかつたのだ。

「そんな事にはならねーぞ…オレがさせるか」

マティラの出した条件は『リュクシーを生かす道を用意する事』であつて、この一人については何も約束されていない。

セントクオ里斯の軍艦に閉じ込められている今は、それについて何も問いただす事ができないでいるが、ランドクレスに降り立つたら隙もできよう。

（オレの体とあのショイドを一体化させて、葬る気なんだろ？
）

セントクオ里斯の言いなりに動いていただけでは、ジンたちを救えない。

イチシは探さなくてはならない
あの憎悪にまみれた少年の姿
をしたモノの正体を。

アレが人間だった時の記憶の共有者を
少年を殺した瞬間を。

(証人はあの女だ　　話を聞きだせやしないだろ？が)

マディラ＝キャナリーとあの少年は、同じ時期、場所、死因を共有
するに違いない。

それはゴーテチャヤの港で垣間見た、マディラ＝キャナリーの赤いシェ
イドが裏付けている。

あれだけ熱く、息苦しく、恐ろしく、おぞましく、この瞬間がこれ
以上続くのなら早く殺してくれと訴えずにはいられない体感
あれを知る者が『生きている』とは到底思えない。

『死』によって体感したシェイドは星の数ほどあるしが、あれだけ
の恐怖の瞬間を持つシェイドは限られているだろ？
それが、二人のシェイドを同一と判断した理由だった。

だが 本当にそうだろうか？

『死』とは全て、耐え難い苦痛の記憶ではないだろうか？

質は違えど、『死』の苦しみなど、比較したり推し量る事のできぬ
ものではないのか？

そう、イチシの近い未来に降り掛かるであろう『死』も例に漏れず
暗く、冷たく、体の芯から腐っていくような
おぞましいものではないだろうか。

いや、マティラとあの少年が深い関わりがあるだろうという事は、
シェイドの類似性の他にも第六感のよつなものではあるが、確信は
あつた。

死人が関わる相手は全て、生前に何らかの関係があつた者か、或いは死人の記憶にひどく共鳴してしまつた者であるはずだからだ。

それでも　自分に襲い掛かるであろう『死』　という化け物の事を思うと、あらう事かイチシは恐怖を覚える。

船の舳先で揺られていた時は、何も怖くはなかつた。
全てを諦めていたし 依りましをしていたとはいへ、あれほど
までに誰かのシェイドに共鳴した事などなかつたからだ。

だが、今はとてもなく恐ろしい。

垣間見ただけで灼け爛れるほどいの、ほどほしる《死》の瞬間。

あれが現実だつたとしたら、イチシは正氣を保つていられる自信はない。

そして死ぬという事は、もう一度と触れ合ひ事ができないという事

そして、いつの日かイチシの存在していた時間の記憶は誰の中からも薄れ、消えていくのだ。

リュクシーと出会って、忘れかけていた恐怖が再びイチシを捕らえて離さなかつた。

そう イチシは死ぬのが怖いのだ……

「　　話つてのは何だ」

マディラ＝キヤナリーは振り向こうとさえしなかつた　　彼女
は司令室の一番奥の壁に備え付けられた大きなモニターを見上げて
いた。

モニターには、『作戦』の舞台となるランドクレスの映像が映し出
されていた。

ランドクレスという国を真上から見た衛星写真だ。

水質汚染の進んだ現在でも『水神の箱庭』といつ異名に相応しい、
緑と水に恵まれた国。

国土の半分は水没していて、人々はその上に水上都市を造り上げ生
活していた。

微動だにせず、モニターを見つめるマディラの背中に
チヤの港で受けた印象と違うモノを感じた。

ゴーテ

シコラウドの信者というわけではなさそうな彼女が今、メダリアの軍艦にいるのだ 何かしらの状況と心境の変化はあつたはずだ。

（マーティヤにいたマーティラは《中立》だった。だが今は ）

本意からの行動からは分からぬが、マーティラはメダリアに属する者になつた。

ならば、敵だ。

リュクシーから自由を取り上げようとする、リュクシーのショイドまで食らい刃くそいとする敵だ。

「お前たちの考える事は分かつてゐる。協力すれば人質は他国へ亡命させると言つてゐるが、メダリアのやり方じやない。一度捕らえた獲物は徹底的に搾取して、残りカスになつても肥料くらいにはする連中だ」

よく分かつてゐるね、とマーティラが相槌を打つた。

「私が信用しないのも周知、私が大人しく従うはずがないのも周知、それでも私を使おうとするのは、寝首をかかれる可能性が〇だと思っているからだ」

「まあ、その通りだね。だが それは《メダリア》の話だ」

（ 　　　　）

リュクシーは宣戦布告に来たはずだった。

リュクシーたちをこいつら利用しようとしても、必ずその呪縛から逃れてやると だが今のマティアの言葉には、何か含みが持たせてあつた。

「シユラウドは最高責任者とはいえ、捕縛士の養育以外の政治的な部分には関与していない。そういう立場部分はやりたがるヤツがいくらでもいるようだ。あんたたちを利用しても始末してしまえと思う連中は、じつち側だらうね」

「それはシユラウドの真意は別にあるという事が」

「 もあ？ シュラウドの都えている事なんぞ、あたしは知らないね。
あんた如きに反撃を食らう事はあるまいと思つてはいるのは同じだろ
うよ。ただ やつぱにシュラウドといつ男は胡散臭いと言つて
いのや」

ルドベキア

「マディアのシハイドがそう言った。

「いくら盗聴されてもよつと、シハイドによつて呪わる意識は、機械越しに読み取られるものではない。」

（ルド、ベキア　　?）

「さあ。 ただ能書き垂れに来ただけなら、出て行きな。今のあんたたちは利用されていると分かっていても拒絶すらできない弱者なんだからね。悔しかつたら強くなりな」

リュクシーが認識したのを微妙な表情の変化で察したのか、マディアは話を摩り替えた。

「あと　　SだかMだか知らないが、勘ぐらなくとも他の捕縛士連中と行動を共にする予定はないよ。 あんたたちが囮。捕縛士は潜伏して様子見。あんたに上官として部下を指揮しろなんて言つてもりもないぞ」

「当たり前だ」

「まずは泳ぐ事。それからの事は追つて指示を出す。それまでは精々体を休めておくことだ」

ルドベキア

マディラはまつくりと顔をこちらに向けると、初めてリュクシーと視線を合わせる そして再び、シェイドが脳に響く。

「私のシェイドの回復を待つていいというのなら、要らぬ心配だ。こんな軍艦に籠もっている方が、生氣を失う。イチシの経過に問題がないのなら、作戦とやらを始めてくれ」

「『ドチヤの上から動けないのは、政治的後始末に手間取つてゐるかららしいね。まあ、もう粗方済んだようだが ついさつき、この船はランドクレスに向かい始めた所だ。明日には着くだろう」

「軍艦でランドクレスに向かう気か？」

「いいや。あんたたちは途中でメダリアの手配した民間機に乗り移る手はずになつてゐる。そこからは監視役を除いては、メダリアとは別行動になる」

（監視役は……なのだろうな）

「監視役は、ランドクレスへの潜入任務をこなしてゐたレアデスとピケの二人だ。こちらは既にランドクレス入りしてゐる」

ピケ 記憶にない名前だった。レアデスのパートナーなのだろうが。

子供の時のリュクシーの知り合いは何故か、男が多い。
顔を見れば、見覚えがあるかもしれないが

監視役がゼザでなかつた事へのとりあえずの安堵と、では彼には一体何の役目を負わせているのだろうといつ疑問がリュクシーの中で湧き上がつた。

「ラングクレス内では、ヴィーツリー国からの観光客とこう枠内で適当に過ごすんだね。時が来れば 働いてもいりつ事になる」

「つまり、それは 私たちは、『イチシ』は、本当に因としての価値しかないという事だな」

マディラは肯定も否定もしない それが真実を物語つていた。

メダリアがやううとしている事 それは、イチシが取り憑かれていたあのショイドの持ち主を、抹殺する事だ。

あのショイド体の記憶をイチシに封じ込めて、死んでも死に切れないほどの苦痛の瞬間を再現する。

(ルドベキア 10数年前に滅亡した国…)

標的のシェイドは、かつてはルドベキアに生きていたらしい
リュクシーに調べさせて、自分をも『死の再現』の駒にしようと
うのか？
それ以外の 田的があるのか？

それでも、調べるしか道はない。

イチシは、リュクシーをシェイドの呪縛から解き放つてくれた。
生きると 二人で生きると約束したのだ。

(イチシはメダリアにはくれてやらない。肉体も魂も、何一
つとして渡さない)

「それを決めるのはあたしじゃない。あたしが考へるべき事は最早一つしかない」

リュクシーのショイードを読み取ったのか、マテイラが呟いた。

「あなたの口からは真実を聞き出せないのか」

イチシの敵と、同じショイードの属性を持つマテイラ　　それは解明すべき『死の瞬間』を知っている可能性を大いに含んでいる。

「あたしは　　全てを知らなかつた。あいつを滅ぼすには、それでは足りない……」

シコラウド　　あの男は何だ。

何故、彼があそこにいる。セントクオリスで、メダリアで何をしていた。

ルドベキアで何をした。マティラとドリセナに何をした

!!

マティラにはもう、真実を追う事はできない。
自身が既に、実体のない偽りの姿なのだから

「第一、あたしの望む結末は、あんたにとつては一番最悪なものだ
うつむ

マティラはまはや、情とか後悔といった言葉は捨ててしまつたよう
だった。

「回避したけりや、自分でビリビリかするんだね

まつすぐとリュクシーを見据えると、短く言ひ捨てる。

「言わねなくてもそうさせてもいい

リュクシーもまた、マティラを見据えた

《人》の枠を捨てて

しまったマティラは、急速に魔人へと身を墮とすだろう。

もう、彼女は『人』ではないのだ

ハガル、カライ そしてマティラ。
リュクシーは三度、己に関わったシェイドの残像と戦うのだろうか

「まもなく、緑と水の国ラングクレスの上空です。お手元に『』が
ますラングクレスの簡易法律書にもう一度お手をお通しくださいま
すよ」重ねて申し上げます」

機内アナウンスが流れる リュクシーは何時間か前に配布され
た簡易法律書には一瞥もくれてやらず、窓の外を眺めていた。

どうにも気になつた言葉があるからだ リュクシーが何回目か
の回想をすると、自然に眉間に皺が寄つた。

「 まぢは死ぬなよ」

軍用機から民間機に乗り換える際、マティラはそう言つた。

その言葉をどう捕らえるべきかと振り向いたリュクシーに、マディラは深く頷いたのだ。

「作戦の途中で死ぬな」という意味にも聞こえるが、何かが引っかかった。

そもそも作戦とはい、観光客のふりをして囚になれと言われただけで、いつどこで何を起こそうとしているのか、具体的な内容は一切知られていないので。

そもそもリュクシーたちの取り合わせは、『観光客』にしてはあまりに不審だ。

ジンとヘリオンはヴィーツリー國の資産家親子、イチシはその親戚、リュクシーはエジヌスの地主の愛人というのが、メダリアが用意した肩書きだったが、肝心のリュクシーが愛人役を努める相手の姿はない。

（最初の入国審査をどうするつもりだ。）のまま…ランドクレスにすんなり入国できるとは思えない）

リュクシーは、他の乗客へと視線を投げかける

この民間機 자체が、メダリアの用意した『偽』民間機には違いないが、どうやら何も知らされていないと思われる一般民も同乗しているらしい。

(何名かは、やはり観光客を装った捕縛士の一人連れのようだつた)

周りを見渡してみれば、一般民も　　言葉の訛りや仕草が実際に多様で、中には最下層に近い暮らしをしていると思われる人間もいた。

そう　　『中』の人間らしくない者もいる。
ジンやイチシのように、『外』で生活してきた者の臭い。

彼らはそれを取り繕つ事もせず、地のままでそこにいた。

(この雑多な人選は何か意味があるのか？　　どう見ても、『観光客』なんかじゃない)

入国審査の段階で門前払いを食らう、そつた集団で、本当にラシンドクレス入りが果たせるのか？

リュクシーたちは、《上流階級》の人間としての地位を用意された。それはランドクレス内部で、イーバエルジューを歩く権利があるとう事だ。

ランドクレスの国教であるイバ教へ一定価値のある供物を捧げた、優良国民だけが入れる高級居住地区。

浸水林にそびえ立つ美しい巨塔が見下ろすイーバエルジューは、白と青を基調とした美しい町並みが続く特定保護地域だ。

その周りを、一般階級の国民たちの住む居住区が取り囲んでいる。

とはいって、優良国民と《それ以外》に対しての身分の格差があるわけではない。

実際の所、イーバエルジューに居住するのは、イバ教の関係者がほとんどである。

特別に信心深く、教団にお布施を収める財力のあるものだけが、住んでいるというだけの話だ。

（財力はあっても信心深くない者は、一般居住区にいらっしゃりでもいる）

そして《観光客》は、イーバエルジューへ滞在する。

ランドクレスに入る手段はいくつかあれど、こんなご大層な肩書きを用意したのは、ランドクレスの隅々を探索できる権利を得る為だけに違いない。

観光客でも自由に入れない場所があるとすれば、それは王家が所有する浸水林の中だけだ。

この国の治安は良く、例え真夜中に観光客が一般居住区をうろつこうとも、何かの事件に巻き込まれる事はないだらう。

ランドクレスでは犯罪は大罪に当たる。

観光客にも必ず配られる簡易法律書には、ランドクレスで罪を犯せばどうなるかという刑罰が延々と記されていた。

（リュクシーはメダリア時代に読んだ事があったので、大体は頭に入っていたがかなり特殊なものだった）

国民たちは、元々が正義感の強く純粹な人間が多く（文明危機をある程度放棄した国の特有だらうか）、国からの生活保護もしつかりと安定している為、犯罪を起こそうという者はほとんどない。

彼らにとつての犯罪者とは、先天的に何らかの異常がある者か、外來の者　　完全に抹殺し、国外へ放り捨てて然るべき者なのである。

『ランドクレスの、イバ教の法律には逆らうな』

これが、ランドクレスを訪れる者にとつての最大の訓告である。

（もつとも、他国へ踏み入れるとは常にそういう意味の事であるが

…）

「おい見ろ、ヘル！見えて来たぞーーー！」
「ジンが邪魔で見えないって…」

すぐ後ろの座席からは、無邪氣なはしゃぎ声が聞こえてくる。リュクシーも窓を覗き込むと、眼下には透き通るような青の中に浮かぶ、緑の大地が見えてきた。

「 見えるか？イチシ」

通路側に座っているイチシには見えにくいだろうと、リュクシーは身を縮める。

イチシもリュクシーの肩越しに、外の景色を覗き込んだ

そこには、一面の原生林が広がっていた

汚染が続くスタニア

ス大陸の中で、未だ自然を多く残している国。

かつては国土の半分以上が森林だったランドクレスは、長い年月ほんの僅かずつ高さを増した海面のせいで、今では多くの森林が海水に侵された。

ランドクレスは元々いくつかの水上集落を持つ国だったが、いずれに起きた事態に備え、全ての機能を水上都市に結集させる事にしたのだった。

国土の背面には高い山がそびえ、中心に原生林を残し、海との間を水上都市が取り囲む。

そして原生林の中央には『水神の住処』と呼ばれる幻想的な浸水林が在り、王族たちを守っているのだ。

触れただけで皮膚が爛れ、のた打ち回つて息絶えるのを『海』だと認識している者から見れば、ランドクレスの情景は信じられないものだろう。

ランドクレスは『アクミナータ大陸』の海流が流れてくる清流の海に面している。

この地域は、海で泳ぐ事も可能だし漁業も行われている。

透き通る青い海の中に浮かび上がる縁を内に抱えた水上都市
それがランドクレス。

その美しき情景を求め、各国の要人たちがバカנסスに訪れる等、限
られた者だけではあるが、人の出入りも比較的自由な国

この水神の住処で、これからどんな惨劇が待ち受けていけるとい
うのか。

リュクシーはイチシを守り、ジンたちも守り、無事にメダリアから
逃れる事が出来るのだろうか。

イチシは ジンたちを逃がし、リュクシーを生かし、そして
彼女に振り切らせる事が出来るだろうか。
自分のシェイドを

「ねえ、向こうから船が来るよ」

ヘリオンの声が聞こえ、リュクシーは視線を海面に落とした

「... 救命具を身に付ける...」

遥か下の海上に漂っていたのは、客船でも漁船でもなかつた。

甲板に据えられた大きなミサイルが、こちらに向けられているのを知ると、リュクシーは頭上の格納された救命具を引きずり出した。

「なつ、なんだ！？」

「メダリアめ 亂暴な真似をするーー！」

事態の把握できぬジンの顔面に救命具を叩き付けると、メダリアのやり方に思い至らなかつた自分に腹が立つた。

「 本氣か」

手早く救命具を身につけたものの、イチシは半信半疑のようだ。

（……他の乗客は？）

リュクシーたちは、一等客席に座つていたのだが 一二等、三等席にも乗客は……いや、リュクシーたちには目の前の一人を助けるだけで精一杯だった。

「ヘリオン、こっちへ来いーーー！」

リュクシーが怒鳴ると、彼女は一瞬表情を固くした。

それは分かったが、今は拒絶されている事など気にかける暇はなかった。

ヘリオンを乱暴に抱き上げたと同時に、機体に衝撃が走った。

ドガアアアアアーンンン――――――――

「ハ――――」

一瞬耳が聞こえなくなつたような錯覚に陥り、全身めがけて飛んで

来た破片からヘリオンを守る為にショイドの防御壁を張る
だが次の瞬間には、落下している自分に気づく。

下は海面といえば、この高さから呑きつけられれば、人間の体など
簡単に壊れてしまつ。

「おまは死ぬなよ」

あの言葉の意味を噛み締め、込み上げる腹立たしさを糧にリュクシ
ーは「」のショイドを解放した。

視界に、ジンの首根っこをつかんだ状態で落下していくイチシの姿

も見える

ザパアアアーンンンンンンンンンンン

♪♪♪♪♪♪♪♪

かなり深海まで落^ハしたリュクシーは、水を蹴^ハつて海面を搔^ハす

「ひ、ザモツー！」

海面から顔を出し、腕の中にいるヘリオンを見れば、すっかり氣絶してしまっているようだった。

ジンの娘らしく、中々氣の強くしつかりした少女のようだったが、落下の体験など早々あるものではなかろう。

「イチシ……どいだ……！」

だが辺りを見回したリュクシーは

言葉を失^ハう。

そこには惨劇が広がっていた。

炎上しながら沈み行く機体
てた乗客たちが漂つていた。

その周りには無惨な姿に変わり果

(本物の死体だ。メダリアは本当に作戦の為に人を殺した)

彼らはどんな人間だつた？

処刑されるべき悪人であつたとでも言ひつか？

そうは見えなかつた。

リュクシーと同じ、ただの人間だつた。

まだ生きている、死ぬ要因などどこにもない、まだ生きてゆける人間だつた。

言い様のない怒りに襲われた。

メダリアの目的が読めない。何をしたいのか分からぬ。

いや、メダリアの意志は分かつてゐる。
シユラウド以下の上層部の人間たちは、捕縛士を人間兵器として各
国への侵略の駒にする氣なのだ。

ただ、まだ実験段階であるといつだけだ。

だから慈善事業などを手がけ、隠れ蓑にしているだけだ。

読めないのはシユラウドだ。

あの男は、捕縛士の養育への権限は行使するが、政治的権限は全て
放棄している。

野心が原動力でないとするなら、何の為に捕縛士を そして今
回のような理解不能な事をさせるのだ。

(「」の作戦にシユラウドは関知しない? そんな戯言が信用できるか
!!!)

「ガボゴボゴボ……！」
「おい、リュクシー！」

突然、背後についた水飛沫から声がした。

「何か捕まるものをくれ。ジンの奴、泳げねえんだ。オレまで沈む

」

「待つてろ」

溺れかかっているジンがイチシに必死にしがみついているのを見て、リュクシーは短くそう言つと、ヘリオンを抱えたまま浮きそうな骸を探しに行く

「ぜえ、ぜえ、ぜえ、げほつ！！」

「大分水を飲んだな」

「へ、ヘルはどうしたんだ？まさか
「大丈夫、気を失っているだけだ」

むせ返りながら娘を心配するジンを見て、やはりこの一人だけは何
としても逃がさねばならない お互いがそう決意したのを、
リュクシーたちは知らなかつた。

「ひでえ……！」

海面に漂つさつきまでは人であつた物体を目にし、ジンは呻いた。

「あ……！？」
「どうした、ジン」

突然、表情を変えたジンに、リュクシーは問いかけた。

「い、いや……まさかな……そんなはずは……
「言え、ジン！なんだ！！」

「いや、オレの見間違いかもしれねえ……」「細かい疑問でも全て話せ！でないと……」

（生き残れない……）

そう続けようとしたリュクシーは、言葉を飲み込んだ。ジンにそこまで背負わせてはいけない。この親子だけは、何としても救うのだから。

「気づいた事は全て洗いざらし話せ」と、メダリアを出し抜けない

声のトーンを落とし、ジンを諭すように囁く。

「気のせいかもしないが、そうじやないかもしない。だから話せ」

「分かった……イチシ、お前は記憶にないかもしれねえが……」

ジンにしては珍しく、歯切れが悪い話しかつた。

「カレドにいた気がする。あの、今オレたちの横を漂つていったヤツの顔が……何だか見覚えがある気がしたんだ」

「カレド、お前たちの故郷だな」

「だがよ、普通に考えてこんな所にいるわけねえ。オレたちと同じ貧乏暮らししてたヤツが、こんな飛行機に乗ってるはずないぜ」

（同じカレド出身者 ジンの氣のせいでなことしたら）

不吉な予感がリュクシーの中にあった。

カレド出身者が、メダリアの抹殺対象の条件の一つであったとしたら。

ジンたちは人質として連れて来られたのではなく、最初から抹殺対象であつたとしたら

（待て まだそうと決まつたわけじゃない。まずは、ジンから話を聞きだしてからだ…）

「おい、船が来るぜ」

イチシは船の姿を発見し、海面に漂つ破片を大きく振りながら団団を送つた。

「 」の話は後にじよつ 見る。ランドクレスからの救助船だ

結局、ランドクレスの救助船は爆撃から20分ほどで到着した。

ランドクレスは近隣の水質保護のため、遠洋500キロに渡り不可
侵条約を各国と結んでいる。

とはいって、この「」時世だ。

口先だけで、そのような権利が保障されるわけがない。

ランドクレスは世界で有数の軍隊を有し、陸からも海からも侵略を

受けないよう過剰なまでの警戒をしている。

今回の爆撃は、ランドクレスの海上国境付近で起きたが、警戒中の巡回船がすぐに事態に気づき、現場に駆けつけた。

巨大な軍艦は、救助ボートを降ろすと漂流していた人々を回収し始めた。

海上に漂っていた者たちは皆、口数も少なく疲労していた。

ランドクレスの軍人たちも、それを承知しているのか、控えめな労いの言葉をかけるのみで、リュクシーたちは軍艦の休息室へと通された。

(メダリアの思惑通りといふことか)

「リュクシー、眉間に皺が寄つてゐるぞ。もっと疲れた様にふるまえ

頭から毛布をかぶり床に座り込んで、軍人からもらつた飲み物を傾けていたリュクシーの背後から、知らない声が聞こえた。

振り向くと、そこには同じよう毛布に包まつた者たちがうすくまつていた。

（生き残つたのは皆、捕縛士たちか……）

死んだ者たちは、何故殺されたのだ ？

彼らは一体、どういった人選で集められたのだ。

その中にカレド出身者がいたかもしれないといつ事実がリュクシーを更なる不安に陥れる。

あの光景を見て、眉間に皺くらべ寄らない方がどうかしているところなのだ。

ここにいる捕縛士たちは、アレを見ても何も感じないのか？

あの惨劇を見ても、自分たちは正義だと信じて疑わないといふのか？

「 もつと水はどうだ？」

「ランドクレスの兵士が、水差しを持つてやつてやつた。

「…」

それはレアテスだった。

「もうすぐ港に入る。そしたらちゃんとした寝床も用意してあるから、それまではじこで我慢してくれな」

レアテスはもつともうじこ口調を吐いてみせた まつたくもつて白々しい。

この場には、リュクシーたちの他には捕縛士しかいるまじこ。

「ランドクレスでゆつくり養生するとこい」

（ああ、じつこの兵士は捕縛士ではないのか ）

レアテスの隣にいた男は、正真正銘ランドクレスの兵のようだった。

今こなつてよく分かる。

捕縛士たちの独特的な緊張感のあるショイド という強い意志。

存在そのものが、捕縛士である証だった。

人込みで捕縛士を見かけても、リュクシーにはすぐに分かつてしまうだろう。

自分がメダリアの中にいた時は、不思議と気づかなかつた

「ラングクレスに着いたら、気分転換に酒場にでも行くとい。 イバの楽団なんかが演奏しているからな」

レアデスは、リュクシーに酒場の地図が書かれたマッチを手渡した。

「おい、レアデス。お前、職権乱用はダメだろ?...」

「やだな、先輩。こんな状況で、別に下心なんてありませんよ」

リュクシーを口説こうとしていると思ったのか、隣にいる兵士が苦言する。

「来て早々大変な目に合つたけど、きっと水神様が君を癒してくれるよ」

「行くぞ、レアデス。こいつ、いつもこんなんだから、あんまり気にしないで下さい...」

リュクシーは外国の要人の関係者、余計な問題を起こしてはマズイ

自分は特別なのだ

とばかりに、先輩兵士はレアテスをせつづく。

「本当に氣にしないでトセーね」

だがリュクシーは返事をする事すらしなかった。

九死に一生を得て放心している女を演じるにはそれで十分だ。

（ まずは顔を覚える事からだ）

ルドベキアについて探るのに、監視がいてはやりこく。

「イチシ 」

レアテスたちが去ったのを見届けると、リュクシーは声を潜めた。

「捕縛士たちの顔を出来る限り覚える。生き残った連中は十中八九
捕縛士だ」

「ああ

」

「それと」

メダリアが用意した肩書き。

ヴィーツリー國の資産家の息子と、エジヌス地主の愛人。

二人はこの救助船で知り合い、恋に落ちた

「私たちはここで知り合った。いいな」

「オレはな。問題はジンだろう あいつに演技なんて無理だぜ」

「入国審査では、ジンたちからは離れておく。もしかしたら別の宿に送られるかもしれないが、そしたらライバエルジューの時計塔の前で落ち合おう」

「わかった」

「それと 気になる事がある。ジンとヘリオンから、くれぐれも田を離すな」

「さつきの死体の事か…」

「お前たちの故郷 カレドの話を聞いておきたい。待ち合わせにはイチシ一人で来てくれ。あの一人は宿から出すな」

メダリアとの約束など全面的に信用ならないとは思つていたが…

ジンとヘリオン。

あの一人を端から生かすつもりがないとすれば、状況はまた変わつてくる。

(水神が誰を癒すだと ?神が何をしてくれると言つんだ)

誰もが一度は訪れたいと願う、美しく厳かな神の国

船が帰港の汽笛を鳴らす リュクシーにはそれが、不吉といつ名の黒い獣の遠吠えのように聞こえた。

イーバエルジューの白い壁と青い屋根の町並みは、海の青と、浸水林を成しているメルイント樹の白を表している。

浸水林の中央に位置する古城を守るかのように生い茂る白肌の樹木に、イバ教典の中に登場する精霊メルイントの名が与えられた理由は、イバ神をこの世の穢れから守護するという伝承の如く、幻想的に生い茂る姿を重ねたかららしい。

（メルイント樹は精霊の化身、無闇に傷付けようものなら極刑が待ち受けている）

「ランドクレスでは、白と青と二つ組み合わせは特別な意味があるのだ。

イーバエルジューではそれが顕著に現れており、道行く人々は皆、白を基調とした服装に青い装飾品を身に付けるのが流行のようだ。（ランドクレスで使用されている青の染料は、特産である貝殻を碎いて抽出したものである）

リュクシーも…例にもれず、白いドレスを着ていた。
だが、装飾品は身につけていない。

彼女には「青」がある　　日の光を浴びて、彼女の髪は青黒く煌
いていた。

出逢った頃と比べると、皮肉にも健康状態は良好である事が伺えた。

巨大な時計塔の足元に広がる国定公園の中、リュクシーは「時計塔
で」との言葉通り、時計塔の正面でイチシを待っていた。

行き交う観光客の中、まだ自分を目指して徐々に距離を縮めるイチ
シの姿には気づいていないようだ。

リュクシーと出逢つていなければ、自分は今頃どんな想いで

何処にいたのだろう。

出会い、魅かれ、彼女が選んだのが自分でなかつたとしたら
でも、そんな現在は想像すらできない。

リュクシーの表情まで見えるくらいに近づいて、珍しい事に彼女が
何かに気取られている事に気づく。
何を見ているのだろう リュクシーの視線の先にあるものを探
す。

人だかりがあつたその中心には、純白の衣装を身にまとつた男女の
二人組みがいた。

群衆は白い花びらで満たされた籠を手にし、一人の頭上に花びらの
雨を降らせている。

中心にいる男女が恋人同士であるのは、遠目に見ても分かつた

(ああ あれが)

イチシが船上で生活していた頃、一週間ばかりランドクレスに停泊した事がある。

その時はもちろんイーバエルジューを歩く権利はなかったから、話に聞くだけであつたが、あれがイーバエルジュー伝統の、『結婚式』というものだらう。

世界の富豪たちがランドクレスに滞在する理由の一つに、『結婚式』がある。

イバ神の前で、お互いが唯一の存在であると誓つ儀式。それがランドクレス内だけの法律であると知りつつも、恋人たちは今や失われつつある貞操の証となる何かを求め、イーバエルジューの教会を訪れるのだ。

お互いが唯一の存在 今となつては、それは危険過ぎる。

本当は分かり過ぎるほど分かつてゐる リュクシー、ジン、ヘリオン……自分の大切な人間を守る為には、一刻も早く自分から遠ざけねばならないと。

一緒にいる時間が長ければ長いほど それが例え1秒の差であ
れ、イチシは彼等に心を許し、依存し、束縛を『えてしまつ事にな
る。

だが、己の欲望を全て押さえ込むには、イチシは若過ぎた。

もつと そう、ジンのよつて長く生きれば、我が身を犠牲にし
て、それで後悔しないなどと言えただろうつか。

もつともつと そう、クレストのよつてシヒイドの扱いに長け
ていたら、大事なモノを手放す事なく色々な道を選べたのだろうか。

ゴーン

ゴーン……

時計塔の鐘が鳴り、リュクシーが振り返った
ていたイチシによつやく気づいたようだ。

すぐ後ろに立つ

「 イチシ

「何を見てたんだ?」

言つてしまつた後で、しまつたと思つた
ていたか…そんな事は知つていたのに。

リュクシーが何を見

「 ……」

だがリュクシーは何も応えず

視線を群衆の方へと戻した。

ゴーン

ゴーン……

「何だか

」

幸せそうに笑う一人　　風に吹かれ、舞い上がる花びら。
それを見つめるリュクシーの横顔が、背筋がぞくぞくするほど女に
見えた。

「別世界のようだと思つたんだ」

気づいた時にはメダリアにいた ある日突然、これがお前のパートナーだと相手を決められた。

逃れられないのなら、受け入れようと思つた 自分がから歩み寄る事で、選ばされたのではなく、自分で選んだのだと思つたから。 だけど、相手はそうじやなかつた。

彼は ゼザは《パートナー》だから受け入れた。《裏切り者》になつたから、殺そうとした。

それ以上でもそれ以下でもない。ゼザには、リュクシーの中身などどうでも良かったのだ。

気づいてからは 自分は誰にも求められる事のない人間なのだ と思つた。

求めてくれるなら、それが亡靈でも構わないとも思つた。

でも、そんなリュクシーに、イチシは救つてほしこと叫んだ。

だから リュクシーはイチシを選んだのだ。

ふと視線に気がつき、リュクシーは振り向く

「…」

その変化に気づき、リュクシーは眉間に皺を寄せた。

イチシがリュクシーから田を逸らしたのだ。
出逢った頃のように それはきっと、自分の心を覗かれまいと
するイチシの悪い癖だった。

(やはり イチシは覚悟をしている……私と一線を引こうとして)

ている…)

だがそれは、自分の事を想うが故の行動だと リュクシーには分かつていた。

それを強いているのは、メダリアだといつ事も分かつっていた。

「イチシ、私を見ろ」

イチシの両頬に手を当てるに、リュクシーは無理やり自分の方に向けた。

ぐきつと妙な音がしたが、今はそんな事はどうでもいい。

「…………」

「いいから聞け」

真面目な顔で言つと、イチシがよつやく視線を合わせた。

「隠し事を無理に聞き出そうとはしない。何故隠そうとするか、それは分かつてているつもりだ」

「オレは別に隠し事なんか

」

「いいから聞け！まだ続きがある

リュクシーが怒鳴ると、イチシは大人しく観念したようだ。

「お前にはお前の考えがあつて、行動するつもりなのは分かる。だから私にも私の考えがある事を分かれ」

どう言えど、イチシの心を溶かす事ができるのだろう。この頑固者はもう、一人で死ぬ決意をしてしまった。

でもきっと、道はある。

二人はまだ生きているのだから、イチシの決意を解き、二人で立ち向かう事ができるはずだ。

「どうして私を信用してくれない？」
「どうして今、私を必要としない？」

「信用するしないじゃない」
「信用は…している」

しているからこそ、リュクシーになら、ジンとヘリオンを託せる。

リュクシーなら…一人を連れて生き延びる事ができる。

「じゃあ、お前に私は必要か」

「つ あんたは」

「どうしてリュクシーは、いつも答え難い質問ばかりをするのだ？」
イチシがどれだけリュクシーを必要としているかなんて、言葉では表し切れるはずがない。

「隠し事は 今はいい。でも嘘は付くな。答えろ」

「どれほど 必要としているか。リュクシーには想像できません。」

今、この場できつと抱き締めて押し倒してしまいたいほど、自分の身に起きた事全てをぶちまけてしまいたいほど、ジンとヘリオンを見捨てリュクシーと一緒に逃げ出してしまいたいほど

だが、そんな事をしても誰も助からない。

全てが消える。イチシの愛しい者全てが、消えてなくなる。

「どうして信用しない……お前の気持ちが

分かっていないと

でも思うのか……」

観光客たちは、口論する男女の姿を遠巻きに観察していたが
二人が突然激しく口付けしあうのを見て、やれやれと肩を竦めて去
つていった。

「頼むから しばらく黙つてくれ」

「黙らない」

「いいから黙れ」

「答える、イチシ」

「いいから」

やはり何も言つてはくれなかつた イチシは観念したのだ。
自分の死は免れない事を、イチシは分かつてしまつたのだ。

だが自分が今も激しく望まれている事 イチシと唇を重ねる度、
それを実感できる。

言葉はなくとも イチシのショイドが伝わる。
リコクシーの中に吹き込まれる。

言葉では伝わらない、伝える事ができない苦しい感情も、ショイド
が全てを表していた。

「私は黙らない。絶対にお前を諦めないからな

リュクシーには言える言葉がある　　イチシがそれに応える事が
できないとしても、リュクシーは伝え続ける。

そうじないと　　イチシは遠くへ行ってしまう。

リュクシーの手の届かない遠くへ……

(絶対に諦めない)

イチシと生きる事が、自分が葬つてきたショイドたちへの誓いだつ
た。

そのために、カライトもハガルも、断ち切つてきた

今腕の中にあるイチシの体温　　リュクシーは守る。

(……)

自分を固く抱き締める力の強さ)、彼女を納得させる手段なんてあるのだろうかと、当惑せざるを得なかつた。

イチシがリュクシーを必要とするように、自分も必要とされている。それは嬉しくもあつたが、だからといって決意が揺らぐ事はなかつた。

(どうしたら あんたは分かつてくれるんだ)

生きるのを諦めた訳じゃない。
リュクシーを愛していない訳がない。

愛したい。そばにいたい。触れたい。生きたい。
全ての欲望がリュクシーに向いている。リュクシーがそこにあるから、溢れ出す。

だが リュクシーを生かし続けるためには、イチシの一番大事な者を守るために、彼女に覚悟を決めさせなくてはならない。

イチシだけの決意では、リュクシーを逃がせない。道連れにしてしまつ。

(どうすれば
いい?)

ゴーン

ゴーン……

時計塔の鐘がなり、イチシはリュクシーを腕に抱いたまま、空を仰いだ。

ゴーン

ゴーン……

「 とりあえず行くか」

二人抱き合つていても、何も事態は変わらない。
ランドクレスでの行動一つ一つが、生死を左右するものになるだろ
う。

「ああ、そうだ」

リュクシーは辺りを警戒してから、続きを話し始めた。

「私は『ルドベキア』について調べよつと思つ。マティラが
シェイドで伝えてきた言葉だ」

ルドベキア　　昔そんな国があつて、そして滅んだという事くら
いしかイチシは知らなかつた。
それもそのはず、ルドベキアが滅亡したのはイチシがまだ生まれて
間もない頃だろつ。

「ジンとヘリオンは、これ以上巻き込みたくない。分かるな？」

「ああ

」

「一人には言つた。私たちだけで調べよつ

「ジンがつるやねうだな」

「ヘリオンの為と言つても、納得しそうにないか？」

「あのな　ジンの優先順位の一番がヘリオンだとしても、オレと同じくらいにはあんたの事も気にかけているんだぜ」

「ジンが私を？　何の関係もないのに？」

「血縁でもない、恋人でもない　　赤の他人であるリュクシーを、ジンがそこまで気にかけてくれていると言うのか？」

「あいつはそういう奴だ。オレとあんたがこうなった事で、ジンはあんたを血縁として見てているだろ？」

「やうか　　」

リュクシーは小さく微笑んだ　　それが、ジンに対して心を許している証だとイチシは思った。

リュクシーは気づいていなかつただろうが　　彼女が選んだのが自分でなかつたとしたら、ジンはリュクシーを《女》として見ていたままだつたらう。

リュクシーも、ジンの父性とでもいうのか　　彼の大きな心に魅かれていたような節があつた。
だからこそ、イチシは一人を見ていると苛立ちが募つたのだから。

「ヘリオンの為、二人の為つて台詞は逆効果だ」「じゃあ、全員が助かる為と言つしかないな」

リュクシーは苦笑した。もちろん、そのつもりではあつたが。

イチシも安堵した。

ジンがいれば　　自分が消えた後のリュクシーの傷も癒してくれ
るだろう。

あの二人を救う事が、リュクシーを生かし続ける糧にもなる。

「じゃあ、行こう。カレドの話も聞いておきたいしな」

「カレドか　　」

「……そりいえば、お前の故郷の話を聞くのは初めてだな」「話したくなるような故郷でもないからな」

転送機の大事故で、全焼した町……炎に巻かれた町。それだけの情報で、標的のシェイド体が関係していたのではないかと容易に想像できる。

「イチシは何か思い当たる事はないのか？」

「あの日は　　オレとジンは、町を離れていたからな。ものすごい爆音がして、町の方角から煙が上がったのを見た」
「……」

「逃げる連中とは反対にカレドに入ると、町はめちゃくちゃになつてた。オレたちは家に帰ろうとしたが、炎でそれ以上進めなかつた。周りには人間が沢山倒れていた。潰れた家の下から助けを呼ぶ声も聞こえた。ジンが狂つたように家族を探し回つて、ようやくヘリオンだけ見つけた。母親のエレファは逃げ遅れたとヘリオンは言つた」

正直、言葉が見つからなかつた。

ジンがヘリオンを大切に思う気持ちは、守れなかつた家族に対する後悔があるから、余計に強いのだろう。

普段のジンの姿からは、そんな生き地獄を経験したとは想像もできなかつた。

「何か見たとすれば、ヘリオンだ。

それでも聞くか？」

巻き込まない為には 余計な記憶は呼び起さない方がいいのではないか?

「ベリオンは あの時の事を一切しゃべろうとしない。記憶が飛んでるのか、話したくないだけかは分からぬけどな」

やはり カレド出身者は抹殺対象なのか?

だとすれば、標的を目標した者は全て消すという事だ。

(最初から 私たちを利用するだけ利用して殺す気だったな、メダリアめ)

しかし目撃者全てをも抹殺することは どれだけの影響力の持ち主なのだ、そのショイド体は。

それに魅入られてしまつたイチシを、確かにメダリアが生かしておくればすがない。

「聞いた方がいい。関わつてしまつた事実は消えない。今は少しでも情報が欲しい」

ベリオンが記憶を呼び覚まそつと封印したままだらうと、メダリアは見逃してはくれない。

「しかし ターゲットが過去関わった全ての人間を抹殺しよう
といつになら…… 過去の事件を洗いざらい調べないとならないな」

ルドベキアの全ての根源となる 標的のシェイド体が『死』を
体感した事件。

そして、その事件と何かが類似する事件が存在しているはずだ。

何かとは やはり『炎』だろう。

「イーバエルジューには、イバ教の特設図書館があったな
で調べられるだろう」

「図書館？」

「なんだ、図書館を知らないのか？あらゆるジャンルの本と、過去
の報道映像や記事が納められている場所だ。イーバエルジューの通行
権がある者なら、確かに誰でも入れたはずだ」

「本、か」

何だか複雑な顔をしているイチシ あまり活字とは縁のない生
活を送っていたようだし、苦手な分野なのかもしれない。

「後は やはりこれは、ここへ来いという事なのだろうな」

ドレスの胸元から、レアデスから渡されたマッチを取り出した。

住所はイーバエルジューのものではなかつた。

一般民の住まう水上都市の真ん中に、その酒場はあるひつ。

「 なんだ？」

呆れたような顔をして、続けてため息をついて「リュクシーは怪訝そうな顔をした。

「頼むから、変な場所から色々と出さないでくれ」

「色々入つてない。これだけだ」

「 論点が違うな」

「仕方ないだらつ、こんな服しかなかつたんだから」

リュクシーが着ていたのは、上からストンとかぶるよつな「トザイン」のシンプルなドレスだった。

リュクシーの体型には少し横幅が余り過ぎてしまつて、胸の下の位置にリボンを通して背中で結つて調節していく。海風で裾がめくれてしまつて、ヒラヒラとしたドレスだ。

「 その格好で暴れるのは止めるよ」

「 じゃあ、後で服を買つてくれ。ランドクレスからもりつた服は、全部こひんなのばかりだ」

リュクシーだつて早く着替えたいが、ランドクレスで自由になる金はほとんどないのだ。

今のリュクシーは、ランドクレスの難民支援金で食事と寝床にあります
つける状態なのだから。

「オレたちは、日に光を当てるだけで支払いはしなくていいらしい
が、あんたは違うのか」

「お前たちはヴィーツリー國の資産家という設定で、世界市場の網
膜登録も偽造してある。偽造というか、本登録だが。私はエジヌス
の愛人、何も登録がない。パトロンが死んだから、私自身は無一文
だ」

「だから宿泊先も違うのか」

「そうだ。私がいるのは、病院内の宿泊施設だからな。お前たちは
観光ホテルだろ?」

「病院の服か。どうりで妊婦服みたいなわけだ?……」

「言った途中で　　イチシはその可能性に気づいた。

「おー まさか」

イチシが言わんとしている事に気づき、リュクシーは苦笑した。

「いや、検査中なだけだ。若い女は皆、病院の方へ収容されているしな。ヘリオンは体が小さいから、外されただけだろ?」「結果は まだ出ていないのか」

「何もでないと思つが」

イチシの動搖はどういう意味なのだろうと、リュクシーは少し不安を感じた……もし一人に新しい命が与えられたとしたなら、これら何が変わつて行つたのだろう。

だが、そんな事はあるまいとリュクシーは確信していた。

何故なら妊娠が可能であると示す兆しが、メダリアを逃れてからずっと現れていなかつたからだ。

リュクシーの体は、リュクシー自身を保つのに精一杯で、新しい命を授かる状態ではなかつた。

「どうか、まだ検査はしていない。今日中に順番が回つて来そもそもなかつたから、抜け出して來たんだ」「検査は必ず受けておけよ」

「 ああ

自分の表情がイチシにどう見えているのかが気にかかった
いとは思いつつも、もしかしたらどうこう考えは頭にござりついていた。

「まあいい。とつあえず、お前たちの宿泊しているホテルへ行こう」「ジンが今頃騒いでると思つぜ。落ち着かねえ、落ち着かねえつな」

それはさぞ豪華なホテルなのだろう
うで、リュクシーは小さく笑つた。 その光景が田に浮かぶよ

「じつちだ」
「イチシ、腕」

リュクシーに言われ、軍艦内で散々教えられた《フューリーストが多いヴィーツリー國の一般男性像》とやらを思い出すと、ちよつぢり
ユクシーが腕を組んできた所だった。

「エスパーしてみよ、イチシ」

リュクシーはふざけて命令口調を使つ。

強く自分を保たないと
少しども明るく見せないと、暗い淵に
引きずりこまれてしまつ。
それではダメだ。リュクシーは、イチシを救わないとならないのだから。

結果が判明するまでは
その《可能性》については考へない方
がいいだろう。
むしろ聞かなかつた事にしたいと、イチシは思つていた。

エントランスに踏み入れた瞬間、そこは幻想的な別世界が広がっていた。

高い吹き抜けの白い天井には、イバ教独特の紋様が青く描かれており、中心には巨大なシャンデリアが釣り下がっている。

シャンデリアの下には、白い噴水が豊かさの象徴である美しい水の流れを演出していた。噴水からは幾重にも水路が延び、青々とした緑と共にホテル内の道を作り上げている。

水路の所々に作られた小さな橋の手すりにも、イバ教の紋様が掘り込まれていた。

エントランスには壁が作られていない。天井と同じ紋様の描かれた太い柱があるだけだ。

敷地内に広がる緑と水の美しい芸術を、広く見せるためである。

ふと、甘い香りが鼻先をかすめる

イーバエルジューで祝福の花と呼ばれている白い花の香りだろうか。水辺には白い花たちがガラスの器に入れられて、沢山浮かべられていた。

夜になると、ガラスの器には蠟燭が並べられて、ゆらゆらと彷徨うのだろう。

甘い香りに包まれた瞬間、何だかこの光景を見た事があるような気がした。

遠い昔にこの幻想的な光景を見たような

既視感。

それは、かつてこの世に生きていた誰かの記憶。

空気のように漂う遠い記憶を、人々は時に己のシェイドに被らせて懐かしさを覚えるといつ。

これは一体誰の記憶か　　「」を訪れ、目を奪われた人間は一人や一人ではないだろうに。

「　　確かにすごいホテルだな…」

リュクシーはため息まじりにつぶやいた。
世界中の金持ちが、イーバエルジューといえば「」のホテル、と三つの
も分かる。

「目がとろけているぞ。花の香りにやられたか？」

その声にギクリとした。

だが同時にその動搖を抑え込まねばならないと、瞬時に理解した。

「お前でも、何かに田を奪われる事があるんだな」

声の主は、小さく笑つてゐるよつだった。

リュクシーのすぐ後ろで、『彼』の息遣いが聞こえた。

(　ダメだ！　)

自分の心臓の脈打つ音が抑え切れないと知り、リュクシーは振り向いた。

「　なんだ？」

そこにはイチジが立っていた。
冷や汗をかいているリュクシーに気づき、イチジが肩を揺さぶつて
来る。

「…どうした

だがリュクシーはその手を払いのけ、頭を抱えると目をつむつた。
その様子にイチシも気づいたようだ。何度かこういう事があつたものだ。

頭を抱えると目をつむつた。
依りましをしていた頃、

（まだまだ　　まだ覚醒してはならない。今ならまだ、何かが分から
る　　）

もう一度、リュクシーは水の庭園へと視線を向けた。

「……」

だが、そこは既にリュクシーの知る世界に戻っていた。

「あの　　声…」

ただの声ではなかつた
つていい。

とても良く似た声を、リュクシーは知

(私は 誰の記憶を見たんだ?..)

「何か言ったのか?」

イチシの間に、リュクシーは西野を連れて出ていった。

「　　田がとろけている。花の香りにやられたか?」

何度も思い返しても、あの声は

「お前でも何かに田を奪われる事があるんだな」

だが違う。リュクシーの知る声とは、質が違う。

あんな穏やかで優しい口調　　同じ人物の声とは思えない。

「　　知っている声か」

大して意味があるものとは思えない言葉とは裏腹に、リュクシーのあまりの動搖ぶりを見ると、それ以外には結びつかない。

「まだ…だ。私の中で何かが一致しない」

「知ってる事は何でも話せと言つたのはあんただ。思い当たる事は全部しゃべつてもいい」

普段リュクシーにやり込められる機会が多いせいが、一いつが弱みを見せるとイチシはすぐにそこを突いてくる。

「　　言わない」とダメか?」

「当然だ」

リュクシーはため息をつき、イチシの胸倉をグイと引き寄せると、耳元で小さく囁いた。

「 シュラウドの声に似ていた」

あの男の声と同じだと思ったからじゃ、体が凍りついた。

だが あの『声』には感情があった。
記憶の持ち主に対する この光景に田を奪われている『誰か』
に対する優しげな感情を感じた。

「 シュラウド。捕縛士のボスか
「 ボス とこのは違つぬとするが…まあ、そんなものだ」

「 本当にその声がシュラウドだとしたら ランドクレスと何か
関係がある、少なくともここに来た事があるという事が」

「… そういう事になるな」

このホテルに滞在した事がある それは、他国でかなりの地位と財産を持っている者という事だ。

シコラウドには幾つかの噂があつて、亡国の要人であつた説も流れていたのだが あの男の出身はルドベキアだったのか？

今回、シコラウドが全く姿を見せないのは、自身の過去を暴かれる危険があるからなのか？

「ドラセナ＝ロナスを調べるという事は 何か。何かとてつもない結果を見る事になるような気がする…」

「何故だ？ただの学者を、何故あんたはそんなに恐れるんだ？」

「私が、恐れている ？」
「見ろ」

リュクシーの手をつかみ、顔の前に持つてくる。

その小刻みに震えている手が、自分のものであると仄ぐれに少々の時間を要した。

「鳥肌も立つてゐる」

何故だらう あれだけ信奉者も多いシユラウド。

あの男に見つめられると、リュクシーは落ち着かない気分になる。

例えて言つなら、暗い部屋の中で、不気味な人形と向かい合つているような気分になるのだ

あの男には感情がない。何を考えているのかが分からない。だから恐ろしい。

リュクシーはイチシの胸に顔をうずめる すると、力強く抱き締めてくれた。

恐れていてはいけない。強くならなければならない。

相手がドラセナ＝ロナスであろうと、シユラウドであろうと。リュクシーは戦う。

「手がかりが増えたと思おう。あの声がシユラウドのものだと仮定して考える」
「大丈夫か？」

「 ああ、大丈夫だ」

シコラウドに対する恐怖 メダリアで植えつけられた漠然とした恐怖。

今はイチシが隣にいるから、リュクシーは強くなれる。

（氣を引き締めなおして、リュクシーは顔を上げた。）

すると、Hントランスロピーのソファに腰掛けてこちらを見ている中年女性と田が合つた。

女性はニヤニヤと笑みをこぼしている。

（……）

周りを見渡すと、自分たちがいい見世物になつてゐるのに気づき、リュクシーは慌ててイチシから離れた。

「早くジンたちの所に行くぞ」

「……照れてるのか？」
「いいから行くぞ！」

自分を理解してくれる者がそばにいる　今までにそんな事がな
かつたせいか、リュクシーは気づけばイチシと触れたがっている自
分に、戸惑いを隠せない。

だが、この浮いているような気分ではいけない。

これからリュクシーが阻止せねばならないのは、地獄の炎に灼かれ
たショイドの再現劇

イチシを灰にしてなるものか。絶対に。

花の香りにやられたか？

二人が去った後、同じ場所に立っている人物がいた
だが、彼女に気づく者はいない。

宿泊客は皆、彼女のそばを素通りしていく。

そう、彼女の記憶を覗かせる相手はただ一人
リュクシーだけ
だ。

あの時、振り向いたマディラの後ろにいたのは。

「

……

あの男はもういない。どこにも

「ボク

？」

「おう、来たか」

部屋に入ると、ジンが落ち着かない様子で室内をうろついていた。

ヘリオンはリビングのソファに膝を抱えて座り込んでテレビを見ていたが、二人に気づくと立ち上がった。

「お茶でも入れるよ」

「いや、いい。それより話を聞きたいんだ、ヘリオン」

リュクシーが声をかけると、驚きと猜疑の入り混じったような目でこちらを見返してくる。

「ああ」

「ジンは口を挟むなよ」

「あ？ どういう意味だ」

イチシが釘を刺すと、ジンも神妙な顔になる。

「カレドの話を聞きたいんだ。カレドの転送機事故の話だ」「おい！ ヘルは何も覚えてねえぞ！ ！」

話を中断せよとするジンを、イチシが制した。

「必要なんだ。ジンは黙つてくれ」「んな事言つたつて、覚えてねーもんは」

「ボク、思に出したよ」

「ヘル、お前……！」

できれば思い出さないまま過ぐしてほしこと願つていたのか、ジンは娘の言葉に声を失つた。

ヘリオンはゆっくりとソファへと座り直すと、顔をそむけた。

「聞かせてくれないか。何か

見ていいのか？」

リュクシーは静かに問いかける
のまま口を閉ざしてしまつ。
だがヘリオンは目を瞑り、そ

「少年を 見た……」

小さな小さな声で、搾り出すよつに……ヘリオンは語り出した。

「最初、監視塔の上から火が上がつて……焼け崩れて……周りの家
にも火が広がつて……」

（ 監視塔から火が？転送機管は地中に埋め込まれていたはず

……）

ヘリオンの証言には最初から違和感があった。

「ヘルファと一緒に逃げようと外に出たら　　監視塔の燃えている瓦礫の中に人影が見えたんだ」

ヘリオンは膝を抱えて体を縮める　　今、彼女のの中にかつての恐怖の体感が蘇つてきているのだろう。

「それが　　少年だつたのか？」

「笑つてたんだ！！炎の中で、狂つたみたいに　　そいつが炎の中から現れて…周りの人間が瓦礫と一緒に吹き飛んだ！！ボクも…エレファも吹き飛ばされて。壁に叩きつけられて　　目を開けたら、目の前にそいつが立つていて…！！」

「もう止める、ヘル！！」

悲鳴に近い声を搾り出すヘリオンに、ジンはたまりかねて叫ぶ。だが、まだだ。その少年の話を聞かなくては。

「続きを聞かせてくれ、ヘリオン」

「……」

すすり泣きをして、ヘリオンは黙り込んでしまった。確かに思
い出させるのはかわいそうだが、聞かなければならぬ。

「エレファが 逃げろつて。ヘル、あなただけでも逃げなさい
つて エレファがそう言つた瞬間、そいつが笑いながら言つた
んだ……」

『母親が子供の死を見る?
子供が母親の死を見る?選ばせて
あげるよ』

ヤメテ、コノコニテヲダサナイテ

！！！

『じゃあ、母親が死ぬといい』

悲鳴を上げて倒れるエレファ
ラス事ができない。

ヘリオンは、化け物から目を逸

母はしばらくもがき苦しんだ後、そのまま動かなくなつたがヘリオンは、化け物から目を逸らす事ができないのだ。

だ

『そして子供は親のショイドを手に取るがいい。それが捕縛士の輪廻だ』

アッハハハハハハハ
！――捕縛士なんか、いくらでも作つてや
るよ――！

簡単だ……簡単だ……お前の命なんて、アリだ……

「ボクは
ボクは怖くて動けなくなつて……」

エレファ おびきやつて命を奪われたんだろう

少年はエレファ

に触れはしなかった。

なのに、エレファは喉をかきむしり、もがき苦しんで

「後は よく覚えてない。『えづいたら……ジンと一緒にだつた

「ヘル 悪かつた。一緒にいてやれなくて。お前たちを助けてやれなくて」

「ひづん……ジンも一緒にたらたぶん 殺されてたと思つ」

ヘリオンが見たのは人間なんかじゃない。

あれは化け物だ。誰にも、どうする事もできない

「容姿は覚えていないか？」 その少年の

「もういいだらけ、そんな事聞いたつてとつへに成長しちまつてゐ

「ぜ

「 それでも、今の容姿の手がかりにははない

ジンの反論には、全否定したいリュクシーだったが シュイド
体は年を取らない。

今も当時と同じ《少年》の姿のまま、凶行を繰り返しているに違いない。

「顔とか、何も 思い出せないんだ。靄がかかったみたいに……」

「やうか。辛い事を話させたな。後はなるべく忘れる様にしてくれ」

ヘリオンから聞きだせるのはこれが精一杯だろう そして確信を得た。

今回の任務の抹殺対象に、ヘリオンも含まれている。

理由は、ヘリオンが目撃したのは《ドラセナ＝ロナス》だからだ。彼は少年の姿をしており、炎というシェイドの属性を用いて、いくつかの場所に己の死の残像をばらまいている。

《ドラセナ＝ロナス》を葬る場所にランドクレスを選んだのは、彼の死の瞬間に共鳴する何かがこの地にあるから。

それは人か、土地か、形を失った記憶であるのか それはまだ分からぬ。

その《何か》が共鳴する時 それが、再現劇の行われる運命の日。

その日までに、ドラセナ＝ロナスの目撃者たちは様々なルートでランドクレスに集められ、舞台は作られる。

期限は一体いつか それまでに、リュクシーはドラセナ＝ロナスの秘密を暴かなくてはならない。

「ジン、ヘリオン。聞いてくれ」

「なんだ」

ヘリオンを膝に抱きかかえたまま、ジンは問う。

「私たちが今回の任務で戦わなくてはならないのは、恐らくヘリオンが目撃した『少年』なんだと思う。ヘリオンにこれ以上記憶を思い出させるのは危険だ。少年を呼び寄せてしまう危険がある。だから一人にはホテルから出ないで欲しい。ジンはヘリオンのそばにいて、守つていってやつてくれ」

「お前ら一人だけで動き回るつもりか」

「お前たちが面倒に巻き込まれたら、オレたちが動けない。そういう事だ」

やはりジンを納得させるのは困難なようだ リュクシーとイチシだけで行動すると言つた瞬間、ジンは眉間に皺を寄せた。

「もちろん、やつてもらいたい事もある。ニュースを見て欲しい。恐らく、ランドクレス内の人口に動きがあるはずだ。他国と国民を交換したり、難民が増えたり。後はこれからランドクレス内でどんなイベントが開催されるか。イバ教の祭りや国民の行事。そういうものをチェックしてくれ」

「何か関係があるのか?」

「ああ。あるかもしない」

「……」

ジンは腕の中にいるヘリオンを見つめた。

それに気づいたヘリオンは、涙の跡をこすると顔を上げた。

「ボクは平氣だよ。ホテルで大人しくしてて。だからジンも行つていいよ」

「分かつた」

ジンが頷いたので、リュクシーたちはこれはマズイ展開だと目を合わせた。

「オレはヘリオンといこひいるぜ」

だが、ジンの口から出たのは真逆の言葉だった。

「ジン！？」

「『ゴトチヤでどんな用に会ったか忘れたのか？オレはもう、お前から離れねえぞ』

自分が置いて出て行つたばかりに、『ゴトチヤで誘拐されかけた娘そもそもカレドでも同じ間違いをしたのに、何故自分はヘリオンを置いて旅立つてしまつたのか。

「ただし！お前らがどこにいるのかはちゃんと言つてもういい。夜もここに帰つて来い！いいな！？」

「ああ　　ここを拠点にして調べるつもりだ
　で、ゼリに行くつもりなんだ」

ジンとヘリオンはこれで取りあえず妥協するしかあるまい。新たな危険から遠ざける事ができるだけ、マシというものだ。

「まず行こうと思つてゐる場所は2箇所。イーバエルジュの特設図書館と　　これだ」

胸元からマッチを取り出して、机の上に放つた。
その行為に、ジンも一瞬ぎょっとしたようだが、イチシをちらりと見ただけで何も言わなかつた。

「なんだ？酒場のマッチか？」
「みたいだな」

「どうちから行くんだ？」

「悪いが、オレは図書館なんかに行つても役に立たないぜ？」

イチシの間に、リュクシーは少し考え込んだ。

確かに図書館ではイチシは暇を持て余しそうな気がするが 行動というのを避けたい。

イチシは何か手がかりを見つけても、リュクシーを遠ざけようとして隠すかもしない。

図書館ではまずはルドベキアについて調べるか。
酒場に行き、レアデスに会いに行くか

「もうすぐ夕方だしな。イーバエルジューの公共施設つてのは、夕方には閉まつちまつのが多いぞ」

ジンの言葉にて、リュクシーは決めた。

「まず図書館に行こう。酒場はその後だ」

イーバエルジュー国立図書館は、歴史の古い建物である。

かつては王族の離宮として使用されていたそうだが、国土が海岸線に侵食され、国民の生活の場が内陸に迫ってきていた事もあり、現在の水上都市計画が持ち上がった際に、国民に明け渡したものらしい。

そつは言つても、国立図書館はイーバエルジュー内にあり、国民の誰もが利用できる空間ではなかつたのだが。

紙という資源が無造作に使用されていた時代の書物から、世界が二分されてからの電子書類まで、あらゆる文書が保管されている場所とはいえ、現代文明を捨て、信仰だけを抱えてスタニアス大陸へ移住した宗教者たちの書物は、こちらの大陸では有害図書として破棄されていたし、各国の政治体制を脅かす危険性を秘めたものなどは、当然保管されてはいない。

都合の悪いものは全て取り除かれてしまつていてはいえ、リュクシーが調べたいのは史実などではないから問題はない。

知りたいのは 電子新聞の『ルドベキアの大災』の記録だ。

昔は王族の別荘だったのも頷ける大きな門をくぐり、リュクシーたちは図書館へと足を踏み入れた。

入り口には網膜センサーが設置されており、入退室を監理しているようだ。

石造りの古い建造物なのに、セキュリティは最新のものになつているようだ。

スタニアス大陸で唯一独自の信仰色を残しているランドクレスだが、セントクオリスを初めとする先進国の技術を取り入れているこの国は、紛れも無く文明を捨てられず未だに浪費と破滅の未来へと突き進む『こちら側』の人間の集まりなのだ。

（何故、ランドクレスだけ特別扱いなんだろうな　　）

この国は、数少ない海産物資源を供給できる国だからだろうか？

だが、それだけでは理由にはなるまい。

海産物資源においては筆頭ではあるが、全体割合でいえばエジヌスやヴィーツリーを始めとする農業国家の方が供給率は大きい。だがエジヌス周辺では、宗教は遺物として語られるものとなつていたし、明らかにランドクレスだけ異質だ。

（観光業のせいか？　　だが、それだけの為に死罪を適用するような法律は作らない気がする）

ランドクレスは、ラジェンダ＝テーマパークのように作られたコミニティではない。

(そつ シティアラの民と同じ、信仰の残る地なんだ、じじは

リュクシーたちが網膜登録を終えると、扉の前に設置されている機械から、音声と映像が流れてきた。

館内の見取り図や、書物の検索の仕方等を説明され、一人はようやく中に入る事ができたのだった。

図書館の中は、人気があまりなく、静まり返っていた。

既に夕刻近く、日は傾いているせいか、昼間の熱気は影を潜めている。

「閉館まであまり時間がない、急いで」

リュクシーは真っ先に『検索くん』を探す。
書物も電子文書も簡単に調べられる、この図書館の名物コンピューターの事だ。

「あれか?」

側面に妙な生き物が描かれている青い機械がいくつか並んでいるローナーがある。

「何でキャラクターがタコなんだ?」

「さあな…」

ランドクレスで漁獲される生き物なのだろうが、何故タコを選んだのかはリュクシーに分かるはずがなかった。

館内の豪華絢爛な装飾とは明らかに馴染んでいない『検索くん』を見ていると、いくらでも疑問が沸き上がりつて来たが、今はどうでもいい。

ピッ。ピッ。

画面に触れると、リュクシーは検索ワードを入力した。

『ルドベキア 大火災 事件』

検索中の間、変なタガのキャラクターがくねくねと画面内で踊っている。

よく見ると、機械の片隅には、"ヴィーツリー政府より寄贈"と刻印がなされている。

「「」の悪趣味なタガは、イチシの国からの贈り物らしいぞ」「オレのせいにするな」

友好国からの寄贈物だから、こんなミスマッチな代物を由緒ある国立図書館に置いてあるのか。

建築美で知られるイーバエルジューに、『検索くん』を贈与したヴィーツリー政府の意向はよく分からぬが。

ピッ。

検索が終わると、薄型カードが出てきた。『ゴーテチヤの身分証明カードと同じような造りだ。

この携帯型カード機器に、検索結果が表示される。

「検索結果は ほとんどがこれだな……」

画面に映し出されたのは、同じ事故の電子新聞記事ばかりだ。

「14年前 ルドベキア・ドームが壊滅した大事故。軍の司令塔が爆発して、ドーム内部を全て焼き尽くした……」

ドームの運営を担う軍司令部が機能しなくなり、外からの侵入者を防ぐ完全防備型のドームが仇となつた。

爆発は鎮火されるどころかドーム内の酸素を食らい尽くし、ルドベキア中枢の保護地区、ルドベキア・ドームに住む生き物は死滅したのだった。

国としての基盤を失い、放射能で汚染されたルドベキアを捨て、多くの民が他国へと亡命した。

瓦礫のみとなつた土地に残つたのは、どの国へ行つても重労働を強いられる生殖能力のない人間だけだった。

14年が経つた今、ルドベキア・跡地には、未だ瓦礫の山が横たわつている。

そして、様々な理由で迫害され、行き場のない者たちが集い、身を寄せ合つて生きているといふ。

ルドベキアのドーム全てをコントロールしていたメインコンピューターが死に、防御システムが無効化になると、近隣国からも略奪者たちが集まり、資源を、食料を、人間を盗み、他国へと売りさばいた。

ルドベキアには他にも保護地区があつたから、格好の的となつたのだろう。

生殖機能を持つ人間は、闇市場で高値で取引される。

ルドベキアからさらわれた人間たちは、各国へと散り散りになつた。

「あつちだ」

カードから出た光が、探し物のある場所へと伸びる。リュクシーたちは、それをただ辿ればいいのだ。

メダリアであれば、コンピューターの中でデータの収集も閲覧も済んだ話だが、ランドクレスの図書館は部分的にアナログな造りになつてゐるようだ。

ここでは、人間が書物のある方へと出向かなければならない。

長い渡り廊下を抜けると、巨大なキャビネットがずらりと並んだ書庫へ出た。

光を辿ると、一つの引き出しへと辿り着く。

中を覗くと、ケースに入れられ番号別に並べられたICチップがぎつしりと詰まつていた。

「……これだ」

その中から一つを選ぶと、読み込み用のコンピューターの元へと持つて行く。

ICチップをセットすると、映像の音漏れを防ぐため一人はヘッドフォンを装着し、映像が再生されるのを待つた。

「記事は皆、似たようなものばかりだな」

ルドベキア・ドームの生存者が皆無だった為、爆発の原因は様々な憶測が飛び交ったが、確証のあるものはなかつた。

（マティラ＝キヤナリーとドラセナ＝ロナスがこの事件で死亡したのは確かだと思う　　だが、事後調査の記事では何もつかめそうにはないな）

「他の火災事故についても調べる。カレド以外にも、人の集まる場所で大規模な火災が起こらなかつたか……」

リュクシーは辺りを見回すと、真つ先に田についた《検索くん》の元へ駆けて行き、また入力を始めた。

「本当に検索機能しかないのか……この機械に映像再生機能をつければいいのに……お前の意味が分からない」

ブツブツとつぶやきながら、作業を続けているリュクシーをイチシは暇そうに眺めるだけだった。

「オレがする事はあるか？」

「事件の発端が14年前だとすると、既に電子書類しか発行されてはいないな。だとすると、ない」

「マディラたちの事件はそつ古いものではなさそつだ。
紙ならば、イチシにも搜索を頼めたかもしけないが、出番はなさそ
うだつた。

「適當にうつこいれるが。

心配するな、図書館からは出ない

「ああ」

検索くんと格闘しているリュクシーを残し、イチシはこの巨大な図
書館の中を歩き始めた。

図書館の中は静かなものだつた。

たまに書棚の影に人が立つてゐるのに遭遇するのみで、何もおもし
ろい事などない。

古い本が陳列されている一帯に來ると、独特の臭いが立ち込めてい
る。

それは古い紙の臭いだつたが、イチシには初めて嗅ぐ臭いだつた。
埃っぽいとしか表現しようがなかつた。

(.....)

ふと、通り過ぎた書棚の間に立っていた人物に何かが引っかかり、イチシは足を止めた。

3歩ばかり戻ると、そこにいた人物をもう一度確かめる

(クрест)

そこには、クレスト＝シェトラが立っていた。

古い本を一冊、手に取り眺めている。

その横顔は間違いなく、クレストのものだった。

久しぶりだな、クрест

あんた、まだランドクレスにいたの

か。

そつぬうと思つたが、声は出なかつた。

イチシは氣付いたのだ

これが、古い記憶である事だ。

クレストを取り巻くショイドが、イチシに伝わつてくれる。

早く

早く見つけなければ

時間がない

きっとあるはず

オレはまだ死にたくない

見つけて

絶対に死なない
やる

どうしてカタス病がオレに

時間がない！！

クレストの横顔は真剣そのもので、手にした書物を読み漁っていた。

（ああ、クレストも　　そう、だつたのか）

クレストもかつて、カタス病の恐怖に襲われ、足搔いた一人だつたのか。

この場所で

運命から逃れようと、必死だつた。

だから、イチシにはこの映像が見える。
クレストの感じた恐怖が手に取るように分かる

だが 何故、今シンクロする？

イチシは今はもうカタス病に恐怖は感じていない。
マディラ＝キャナリーによつて一時的な治療は施されたようだが、
イチシの寿命はさうに短いものになつたのだから。

死は逃れようのないものになつたのだから

イチシはゆっくりとクレストのいる場所へ歩き出す 近づくに
つれ、過去の記憶は空気に溶け出し、消えていった。

イチシは書棚を見上げる。

クレストが読んでいた本はどれだ。クレストの足元に積み上がつて
いた本は？

クレストが何故この地にいたのか、今初めて知った
は力タス病を治す何かを探しにこの地へ来たのだ。
そして果てた？ 何故？ 病で？ 別の何かで？

クレスト

イチシの知るクレストは 冷静で時に底意地が悪く、シェイド

を操る術を知つていて……それだけだ。

あの時は、シェイドという力の存在を知り、それだけで頭が一杯だ
った。

目の前にいる男がまさか死人かもしれないなんて、気付きもしなかつた。

クレストは生きていたのだろうか。それとも死んでいたのだろうか。
彼が何の目的で生きていたのか、それとも死んで尚そこに在ったの
か、イチシは何も知らない。

クレストは力タス病について調べる為にここにいた？

イチシは気付く。

だが上手くまとまらない。

クレストがもしカタス病で死んだのならば、この地では病を治す『何か』を見つけられなかつたという事。

だが、死して尚、クレストはこの地に留まつてゐる。

クレストがカタス病ではなく、他の要因で死んだのならば、それは何だ？

カタス病について調べている最中に、死んだ？……誰かに消された？そして未だこの地に留まつてゐるのか？

いや、この記憶は全く関係ないのかもしない。

クレストがかつて、この地でカタス病について調べていたという事実だけがあつたのかもしない。

イチシが遭遇したクレストは生きていて、この地で手がかりを見つけられなかつたクレストは、他の国に旅立つたかもしない。

しかし、すぐに矛盾に行き当たる。

あの頃のクレストは、死への恐怖に取り憑かれてはいなかつた。

カタス病が治つた後だつたのか、それとも 既に病に倒れた後だつたという事になる。

カタス病に対しては、今現在完璧な治療法は存在しない。

薬を投薬し、発病を遅らせるだけしかないと聞く。

クレストが生きてそこに在ったのなら、やはり死という化け物に背後を取られ、恐怖の中を進んでいたはずだ。

(ショイドを教えたあんた自身が……だつたのか)

邪悪な他人の意識に支配されるな、己の意識の力を操れと言ったクレストが『邪悪』そのものだつたなんて。

イチシは今でも思つていた。

死して尚、この世に留まるのは邪悪であると。

例えそれが誰かの為であつたとしても、結果は違うのだ。
守りたかつたはずの誰かを逆に苦しめ、その場から歩めなくするだけだ。

カライをかばうリュクシーを見た時、その想いは強くなつた。
自分は絶対にあはならないと誓つた。

だが今は自信がない。

(オレはできるだらうか)

「これだ……」

クレストが読んでいた本の背表紙を発見し、イチシはぎゅうぎゅうに詰め込まれた書棚からその1冊を引き抜いた。
それと同時に、埃が辺りに広がる。相当古い本だ。

「ランドクレス王国の 伝承？」

それは、ランドクレス王家の成り立ちや浸水林に伝わる「伝承文学」の本だった。

イチシの解釈で言えば、昔のおとぎ話だ。

田の前にある書棚は、ランドクレスに関しての本がほとんどの様だった。
イチシはクレストが調べていたと思われる本を次々と抜き出していく。

ランドクレスの生態学、ランドクレス王家の家系図、ランドクレス王国法律書。

クレストが見ていたのはたぶんこの本たちだ。

こんな物を調べて、カタス病の何が分かるというのか？
ランドクレスに何か秘密があるのか？

『閉館10分前になりました。』利用の皆様は退館の準備をお願い
致します』

混乱する中、図書館に音声案内が流れた。

もう時間がない イチシはそれらの本を持ったまま、リュクシ
ーの元へ戻る事にした。

図書館というものをリュクシーから説明してもらつたが、本につい
ては貸し出しありも行つているらしい。
持つて行つても問題ないのだろう。

リュクシーはさつきとは違つた場所で、なにやら機械と格闘してゐた。

「どうだ？』

「今、カードに書き込みをしている。腹が立つから、全部カードにダウンロードした」

入り口で発行された電子カードに、探してきたデータを書き込む。その作業を繰り返し、リュクシーはデータそのものにはまだ目を通していなかつた。

「イーバエルジューは、あまり機械的なものを持ち込んだがらないからな……それにしたつて、この使いにくいシステムはどうにかならないのか」

リュクシーは文句を言つていたが、イチシには何故そんなに苛立つているのか理解できなかつた。

分かつたのは、この図書館での情報探しは面倒らしいといつ事だけだ。

「その本を借りるのか？」

リュクシーがイチシが本を抱えているのに気付き、問う。

「ああ」

クレストの記憶を見た事は、後で話そうと思い、短く返事をした。今のリュクシーは別の事で忙しい。

「あっちのカウンターに管理人がいる。手続きはそこだ。私はこれを終わらせる。閉館5分前に入り口で会おう」

「分かつた」

振り向きもせず、カウンターの方向を指したリュクシーを置いて、手には伝承学の本を、残りは右脇の下に挟み、古い本をパラパラとめぐりながらゆっくりと歩き出す。

本にはいくつかの挿絵があった。

物語を描写しているのだろう

龍神が現世に降り立ち、人と交わる姿。

エルイントの精霊が竜神の住処を守るために、樹木となり侵入者たちを阻む姿。

エルイント樹を焼き払おうとした敵国人間が、竜神に殺される姿。

そこには確かに、おとぎ話しか書かれていなかつた。

カタス病なんて、この物語が生まれた遙か未来に起ころる不治の病の手がかりなんて、どこにも書かれているはずがない。

もつともイチシは口語ならば何大陸語かは理解できるが、文書となると簡単な単語しか分からなかつた。

だが、挿絵といくつかの単語を拾い上げるだけでも、物語の筋くらいいは分かる。

これは単なる昔話だ。

「……」

イチシはその挿絵を見た時、自然と足が止まった。

そこに描かれていたのは 戦争で傷付いた民衆に、自らの血を与え、人々を救つたエルイントの精霊の姿。

髪が地に着くほど長い、若い女の姿で描かれるエルイントの精霊 この女はエルイント樹木そのものを現している。 この女の血が、人間を救つた？

その時、イチシは思い出した 入国に際して手渡されたランド クレスの簡易法律書。

イーバエルジュ法第17条「王家所有の浸水林」第1項 「いかなる地位の者、いかなる事由をもつてしても、エルイント樹を傷つける事があつてはならない。エルイント樹に危害を加えた者、死刑に処す。」

エルイント樹は、法律によつて守られるべき存在 それは信仰

だけが理由ではない？

そこには、別の理由が存在するのか？

（オレは何を 今はカタス病について調べている場合じゃない

はずだ)

何故《今》なのか
かもしないのに。 もつと違う時であれば、世界を変えられた

「……」

イチシは食い入るように、エルイントの精霊の絵を見つめた。

世界を変える カタス病の薬を見つける。
それはどれだけの人間の希望となる事だらう。しかし、それを巡つてどれだけの争いが起きる事だらう。

世界は大きく変わつてしまつ。

次に戦争が起きれば、残された大地も海も汚染され、人間の寿命はさらに縮むかもしない。

「どうじこじる 結末は同じなのかもな」

だが、先に進まないわけにはいかないのだ。

それは生きている限りは誰についても言える事だった。

生きている限りは。

では、死して尚そこに在る者たちは何を想つのだろうか。
何の為に在り続けるのだろうか

(クレスト オレとあなたが出逢ったのは、この為だったのか
?)

だが、今のイチシには何もできない。

イチシには、他にやらなくてはならない事がある。

退館時刻ギリギリに図書館を出た一人は、酒場が開くまでにまだ時間があったので、イーバエルジューの高級料理店に入る事にした。

高級店ならば個室の店がほとんどだ。

尾行の捕縛士たちを少しでも遠ざけ、資料に目を通したかった。

「こちらはエジヌスの有機野菜のみで育てられたジーナ牛のステーキでござります」

料理を運ぶ給仕が、一々と料理の説明をしてくれる。

世界的な食糧難の時代に、家畜に最高級の食材を食わせるとはどういう事だと一人は思ったが、このいびつに偏った世界の頂点に経つ《資産家》たちは、実際にこういった生活をしているのだろう。

外の人間はその日に食べるものを確保するためだけに、毎日を働いている。

腹が膨れればいい。明日に繋がればいい。

そうして蓄積された有害物質が体を蝕み、また人間の寿命は縮む。

かつて人の寿命は100年あつたそうだが、今はその3分の1を生きればいい方だ。

「説明はいらない。一人きりにしてくれないか」

「失礼致しました。それでは『ごゆっくりおくつりござい』

給仕を追い払うと、二人は目の前の料理を見つめた。

「とりあえず…食つか」

「ああ」

食べ物を残すなんて言語道断の行為であつたから、食べないという選択肢はなかつたが、こんな特殊な食事は味も分からなくなりそくなほど、複雑な思いで一杯になった。

力チャ

上品にナイフとフォークで食べていたイチシだが、そのうちナイフは皿の上に置きっぱなしになり、料理にフォークを突き立てて、大きいままの塊を口に詰め込み始めた。

外で育つた人間は皆、早食いの傾向がある。

誰かに盗られないように、手に入れた食事は早く腹の中へ入れてしまいたいのだろう。

昔図鑑で見た頬に袋を隠した小動物のようだと、リュクシーはイチ

シの食べっぷりを見ながら思つた。

リュクシーは「うう」と、食事をしつつ、カードに詰め込んだルドベキア大火災についての電子新聞に目を通していた。

ルドベキアが滅んだ原因となつたのは、軍事機関の中核が收められたシックザール・ドームが大火災により機能停止した事。

『保証地図』という特許図面を作り、ドーム型都市を連結させると、いう現代において主流となつた都市構成を初めに取り入れたルドベキアは、政府機関によつて構成されたシックザール・ドームのマザーコンピューターが全てのドームの制御をコントロールしていた。

人口の流出を恐れ、コンピューターによって《保護》された住居地団。

シックザール・ドームの大爆発により発生した噴煙は他のドーム内にまで侵入し、閉じ込められた人々は煙を吸い込み、喉を焼かれて次々と倒れたのだった。

シックザールの中心には、指令塔である高層ビルが構え、その眼下に空軍基地が配備されていたらしい。

火種は司令塔にあつたと記録に残されている。

高層ビルの上層部で爆発があったのを、生き延びた人々が目撃していた。

花火のように碎けて散ったビルの欠片がドーム内に降り注ぎ、ミサイル倉庫へと引火した。

軍用機が離着陸する時のように、ドームの天井を大きく開けてしまえば、脱出できた人間もいたはずだつた。他ドームへの連結路を遮断してしまえば、被害はシックザールだけで済むはずだつた。

だが、それは不可能だつた。

マザーコンピューターは完全に機能を停止していた。

（そういえば　　ヘリオンが、最初の火災は火の手のない見張り塔から出たと言つていたな……）

塔　　『その瞬間』を作り出す要素の一つに、『高い場所』というのがあるのかもしれない。

（カレドの火災も、ドラセナ＝ロナスの仕業であるとしたら
ドラセナ＝ロナスは『そこ』にいたという事になる）

ドラセナ＝ロナスは12、3歳くらいの少年の姿をしていたという。軍事施設内部に『子供』がいた……それは何を意味するのか。

リュクシー自身がそうであつたから、答えは明白だつた。

ドラセナ＝ロナスはルドベキアの研究対象だつたのだ　　恐らく
は、メダリア・ドームと同じくシェイド研究の被験者だつた。

(　　こんな偶然あるわけがない)

ルドベキアでシェイド実験されていたドラセナ＝ロナスが、今はメ
ダリアから特級捕縛士とされている。
ルドベキアとメダリアには繋がりがある　　そしてその繋がりと
は。

(シユラウドしかいない　　一)

シユラウドには元々いくつかの噂があつた。
亡国の科学者であり、メダリア完成と同時にその責任者に収まつた
あれは根も葉もない噂ではなかつたのだ。

(だから、今回の作戦にシユラウドは参加しない
ドベキア壊滅の真相を知つてゐるからだ)　　何故ならル

真相を知っているのだ いつ如何なる時に、ドラセナ＝ロナスを呼び起こしてしまいかもしれない。

相手は、人々に己の死の体験を撒き散らすような魔人だ 迂闊に共鳴してしまえば命取りになる。

ショウラウドの過去に近づいている それは奇妙な感覚だった。

あの男にそんなものがあるなんて、リュクシーにはどうしても連想できなかつた。

だが連想できなくとも、それは事実なのだらう。

イーバエルジューのホテルで感じたあの『声』の主は、やつぱりショウラウドだったのかもしれない。

あれはまだ生きていた頃のショウラウドだったという事か。

肉体を失つて時が過ぎてしまえば、人間とはあんなに無感情になれるものなのか。

（ショウラウドは今は置いておこう。今は そう、ランドクレスで『再現』したら、どこがターゲットになるかという事……）

ランドクレスの水上都市には高層の建築物はない。
すると、陸地であるイーバエルジューか王家の領地に絞られる。

イーバエルジューで皿に付く高層の建築物といえば、やはりリュクシ一たちが待ち合わせに使つた時計塔だろつ。

真っ白な壁と、身に付ければ幸福が訪れるといつ青色に塗られた屋根は、イバ教でいう所の平和のシンボルである。

もう一つ、ランドクレスの中では高層といえる建物がある。

それは王家所有の浸水林の奥に佇むランドクレス王宮である。ランドクレス王宮には、滅多な事では近づけない 作戦を実行するにはリスクが大きいように感じられた。

(ドラセナ＝ロナスを追い込む場所 時計塔か……)

「さつき図書館でクレストを見た」

カシャンツ

「……なんだつて？」

突然のイチシの告白に、リュクシーは思わずナイフを皿の上に落とした。

「クレストもカタス病患者だつた。治療法を探して図書館にいたら
しい。これがその時読んでいた本だ」

イチシの口調は《過去形》である。

それは イチシが見たのは生身のクレストではなく、クレスト
の《記憶》であつた事を現していた。

「サドサドサツ……！」

イチシは床に積んであつた本を、テーブルの上に乗せた。
古い本からは何か粉煙のようなものが飛散していくが、そのすぐ隣
でイチシは平然と食事を続ける。

「クレストは クレストも、なのか？」

イチシが出会つたという特級捕縛士クレスト＝シェトラは生身の人
間であつたのか？

それとも マティラ＝キナリーやドラセナ＝ロナスと同じく、
肉体を失つたシェイド体だけの存在なのか。

リュクシーはクレスト＝シェトラが読んでいたという古い本を手に
取つた。

「オレが出逢つた時のクレストは、図書館で見た時と別人だつた。

自分の寿命に焦っている様子は一切なかつた

リュクシーはランドクレスの伝承文学の本を手に取つた。元は白かつたのだろうが、黄ばんでしまつた背表紙には、王家を現す紋章が描かれている。

パラパラとめくると、内容は王家に伝わる伝承のようだつた。

そして やはりイチシの時と同じよつこ、一枚の挿絵に目が留まる。

エルイント樹。

壊れかけた命に再び力を与えた精靈の血。

「何故宗教が排除されたこの大陸で、ランドクレスだけが信仰色を残しているのか ずっと不思議だつた」

スタニアス大陸連合会が了承していないはずがないのだ。

この大陸に残つた国のトップが集う連合会 その了承なしに、ランドクレスが今の状況を保てるはずがない。

「連合会を納得させるだけの《理由》があつたはずなんだ」

それが《エルイント樹》だつたら？

連合会は既に、カタス病の特効薬を発見しているのだとしたら？それを分けてもらつて見返りに、ランドクレスは独特的の風習を残す事を許されたとしたら？

王家の血族しか踏み入る事を許されない浸水林 禁を犯した者には極刑を課す。

それは信仰だけが理由ではなかつたのか。

ランドクレス王家は、世界と渡り合つとつておきの切り札を、ずつと隠し持つていたのか。

(だが今は ……)

今この可能性に気付いた所で、自分たちには何もできなかつた。

クレストを探し出し、真実を確かめる時間なんてない。

優先順位は別にある。

「クレストは 今もここにいるはずだ。あいつはきっと、ランドクレスの秘密を追つてたんだ」

脇道にそれる時間がない事は分かつていた。

だが、偶然なのか？何故今なのだ？それに意味はないのか？

イチシにはずっと何かが引っかかっていた。

「オレは納得できない。何故今なんだ？今のオレたちに必要なない情報ならば、何故オレはあいつを見たんだ？」

「繫がつている と？」

「分からねえ」

そう、何もかもが分からないのだ。

繫がつているのか繫がつていないので。そんな討論は無駄だ。

「分からぬなら確かめに行こう。考えていても何も変わらないしな……」

リュクシーも残った料理を無理やり口に詰め込んだ。

悠長に食事をしている時間はない。

「私も情報から気付いた事がある。ドラセナ＝ロナスは高層の建物の中でも死んだんだと思う。ヘリオンの目撃証言にもあった。最初の火の手は監視塔から上がったと。カレド火災の原因とされる転送機管は地中深くに埋め込まれていた。ヘリオンが見たものと明らかに違う」

「高い場所 それが重要なのか？」

「理由は分からぬが。恐らくは」

「ランドクレスで高いといえば」

「そう、時計台だ」

人々が待ち合わせに使うあの場所が、火の海になる
ドラセナ＝ロナスの死の再現場所になる。
あそこが

（ だからランドクレスなのか？）

一瞬、リュクシーは考えてしまった。

ドーム型都市で作戦を遂行すれば、ルドベキアと同じくかなりの人間が死ぬだろう。

ランドクレスは特殊な国だ。

イーバエルジュを取り囲むのは原生林と水上都市。

時計塔で大火災が起きても、水上都市だけは機能を損なわず生き延びる。

だが人々は生き残ったとしても、数少ない自然が　　汚染から免れた僅かな希望を、またしても人の手によって破壊してしまおうといふのか。

「まさか……」

「どうした？」

セントクオリスなら有り得る可能性に、リュクシーは気付いてしまつた。

「時計台で大火災が起きれば、軍は水上都市を陸地から切り離してやり過ごす。そして陸地は孤立する。浸水林を守るのは、残った軍隊だけになる」

「王宮を……制圧する気が」

「こまでも自己中心的で浅ましい上層部の連中ならば、やりかねない。」

「繫がつたじゃないか」

浸水林の秘密を追っていた人物
イチシもすぐに気付いたようだ。
それは誰だ？

「よし、イチシがクレストと出逢った場所へ行こう。案内してくれ
「じゃあ、水上都市の酒場だ。ランドクレスでは一番治安が悪い。
『氣をつけるよ』

「治安が悪いと言つても　　酔つ払いがいるくらいだらう？」
「あなたは今、『非力な女』なんだぜ。忘れてるみたいだけどな
「そういう意味か。確かに忘れていた」

氣をつけるとは、暴れるなどいつ意味かと、リュクシーは納得した。

イチシは別に役柄にこだわって暴れるなど言つたのではなかつたが、
リュクシーはそこまでは気付かなかつた。

元々無茶をさせたくないとは思つていたが、今は特に　　病院で
検査を受けさせるまでは、絶対に力を使わせたくはなかつた。

二人は汚れた口の周りを拭うと、若い資産家とその恋人に戻る。食い散らかしたテーブルは少し直しておいた。

イチシと腕を組むと、退店の準備は整った。

「 でも少し安心した」

「何がだ？」

「手がかりが見つかったからだ」

何一つ手がかりがなかつた時に比べれば、今は進む場所がある。
きっと 見つけてみせる。

全員で逃げ延びる方法を イチシを助ける方法を。

「そこ」の姉ちゃん、ランドクレス名物のカロゴ焼きはどうだいっ！？これを食べなきゃランドクレスに来た意味がないよっ！」

ランドクレスの最大の水上マーケット、エリュトル市場で立ち止まるのは危険である。

道の両脇には所狭しと小売店や食堂が立ち並び、立ち止まつた途端、両脇の店から呼び込みがかかってしまう。

ランドクレスでは景観を守るために、水上都市建築には規制があり、通路横に建築物を建ててはいけない通りもあるのだが、エリュトル市場ではそんなものは関係ない。

建築物がないのを良い事に、商品を山のように積み上げたカヌーが、通路横に停泊していて、雑多ではあるが、それはそれでランドクレスらしい光景を作り出していた。

色鮮やかな衣類や、鍋等の生活雑貨、近海で採れた新鮮な魚、お惣菜を売っているカヌーでは、よくそんな狭いスペースで器用に料理するものだと関心してしまう。

「お姉ちゃん、一人で観光かい？連れはいないの？」

屋台の呼び込みをしていた男は、目の前で立ち止まつた外国人と思

われる少女に話しかけた。

しかし、少女は屋台を物色するでもなく、かといって向かいの店に用があるわけでもないらしい。

進行方向へ真っ直ぐと視線をやり、他は目に映つていないようだ。

一瞬、何を見ているのだろうと、彼女の視線の先に目をやつたが、夕方になつてぼちぼちと観光客が現れ始めたいつものエリュトル市場の姿しかなかつた。

「！」の店は向の店

その時、少女がぼそりと言葉を発した。

視線は相変わらず一方向を睨みつけていたが、どうやら呼び込みの声は届いていたらしい。

「あ～、カロゴ焼きだよ、カロゴ焼き～ランデクレス産のカロを、ゴラソースで味付けしてゐよ～つま～よ、つま～よ～どうだい、一つ～！」

鉄板の上でゴラソースの焦げた香ばしい匂いが立ち込めている。エリュトル市場で一番数の多い、カロゴ焼きの屋台である。

「いくりよ

「200ルギ……」

その時初めて、少女は店に視線を向けた。力口「焼きと、値段、そして店番の男の顔を確認すると、また同じ方向へと視線を戻してしまったが。

「じゃあ、200」

少女は、ズボンのポケットから小銭を取り出すと、男に差し出した。

「……」

しかし、男は代金を受け取るうつともせず、焼いている途中の力口をひっくり返そうともせず、穴が開くほど少女の顔を見つめていた。

「?……ちゅつヒー」

男が金を受け取らないので、少女が声を張り上げた。

「あ、ああ……」

我に返り、代金を受け取ると、手元の鉄板から白い煙が上がり、事に気がつく。

「うお、焦げるー」

「……」

少女は一瞬、呆れた顔をしたが、またすぐに視線を明後田の方向へと戻してしまつ。

「はいよ、カロゴ焼きーつー……なあ、お姉ちゃんね……」

カロゴ焼きを手渡すその時、男は意を決して少女に話しかけた。

「あん？ なによ」

馴れ馴れしく話しかけてきた男に、少女はあからさまに嫌な顔をする。

(性格は悪そうだが……)

その表情からは、彼女が愛想のない人間である事が伺えたが、それでも尋ねてみないわけにはいかなかつたのだ。

「お姉ちゃんの名前、もしかして……ローラー……？」

「違うわよ」

男が言い終わると同時に少女は眉間にしわを寄せながら即座に否定した。

「あー、あー、じゃあ、ティレンティナー！？あー、じゃあ、ファナ
ピー！？あー、じゃあじゃあ、アイレーー！？違うかつ」

「一体何の……」

少女が胡散臭げに眉間に皺を寄せ、今にも立ち去りてしまいそうなので、男は声を張り上げた。

「分かつたー！ホーリーだー！？」

(何なのよ、こいつ！？)

ただの変態かと思いきや、最後の最後に自分の名を呼ばれ、ホーリーは耳を疑つた。

「ほ、ほんとに？　ホーリー様なんだなー？」
「違うわよー！バツカジやないのー！」

驚いたのを勘付かれたのが腹が立つて、男をホーリーは怒鳴りつけた。

「嘘だーーあんたは、ホーリー様だーーそりだろーー。
「違うつって言つてんでしょーー！」

散々違ひ名前を挙げておいて、嘘も何もないものだ。

声を荒げて、ハツと氣付く
しまつたらしい。

つこつきまで、5軒ほど先の店先で衣類眺めていたリュクシーたちの姿が見えない。

「ああ、もう……」

「ま、待ってくれ……」

グイッ……

駆け出そうとしたホーリーだが、服の裾を捕まれ、危うく転びそうになる。

「何すんのよ……離しなさいよ……」

「……これを……」

しかし、意地でも離れようとしない男は、ズボンのポケットから薄汚れたマッチを取り出すと、ホーリーの手の中に押し付けてきた。

「……来ててくれよ、ホーリー様……待ってるから……既探してたんだよ、あんたの事……」

(一・?)

男の偽りとも思えない真剣な眼差しに ホーリーは一瞬戸惑つた。

「離せりて言つてよーー。」

男を振りほどくと、ホーリーは駆け出した。リュクシーを見失うわけには行かない。

「待つてるからーーホーリー様ーー！」

背中にあの男の叫び声が何度も届く

マッチに一瞬だけ目をやつた。

ホーリーは手の中にある

《Bar ウッチャーベイク

?……いたーー。》

リュクシーの後姿を発見して、ホーリーは少し安堵して、また距離を取つて尾行態勢に入った。

まあ、あのリュクシーであつても、今の状況で逃げるとは思えない。そう遠くへは行つていないとは思つていたが、すぐに見つかって安心した。

そして改めて、マッチに書かれた文字を眺める しかし、すぐに飽きて水路の方角へ投げ捨てた。

（あたしには関係ないわ）

自分が外部から連れて来られた人間だというのは知つていた
メダリアでは、オリジナルとシアター出身者がパートナーになるのが常だ。

ジラルドはシアター出身者。つまり、外部からやつてきた人間は自分の方だ。

正直、外での事はほとんど覚えていない。

子供ながらにとてつもなく恐ろしい事があつたのだけは何となく覚

えている。

それを思い出さまいと、頑なに記憶を閉ざしている自分がいる事も知っている。

でも一番重要なのは、その状況から自分を救い出してくれたのが、Dr・ショーラウドであるという事だけだ。
だからホーリーは捕縛士として、Dr・ショーラウドの為に戦う。彼の為に働く。

ホーリーの生まれを、あのカロゴ焼きの屋台の男が知っているのだとしても、ホーリーには関係ない。興味もない。

「ちょっとあんた！今、ポイ捨てしたね！道にゴミ捨てると罰金だよ！…」

背の高い大女に引きずられていくホーリーの姿を、リュクシーは呆れたように見ていた。

（何をやっているんだかな、あいつは　　）

ジラルドの姿はないようだったが。

あれで、ジラルドがいると多少はバランスが取れているのかもしれない。

「その色、似合つぜ」

「やうか？」

「じゃあ、この服にする」

何事もなかつたかのようになに買い物を続け、リュクシーはようやく病院から借りた服から着替える事ができそつだ。

「その先に観光客用の有料休憩室があるので、そこで着替えるといよ」

衣類屋の店主に教えてもらつた場所でリュクシーはランドクレスの民族衣装に着替える。

リュクシーはやはりズボンの方が落ち着く　　スカートは覚束なくて好きではない。

民族衣装といつても、祭礼時に着るよつなものではなく、ランドクレスの民が日常的に着用しているものである。

シンプルなシャツとズボンの上に、色鮮やかな布を巻くといつのが基本的なスタイルだ。

日差しの厳しいランドクレスでは、日焼けを防ぐ意味合いもあるらしい。

外界任務に就いた時、《女》と特定されないよつにと、服装は男女共用、言語は標準語をとメダリアに教育されてきた中で、考えてみれば自分でこうして服を選ぶ等、数えるほどしかない経験だった。

相変わらず選ぶ基準は保護地区の《女》たちとはかけ離れていたが

それでも最近は、多少は外見を気にする気持ちも芽生えてきていた。

女子休憩室を出ると、入り口の所でイチシと鉢合せた。

イチシもスース姿では悪目立ちするので、ランドクレスの民族衣装

に着替えた。

身につければ幸福になれるという青い貝殻のネックレスはリュクシートおそらくいた。

「ようやく楽になった」

どうしても襟のきつちりした服装を受け付けないよう、イチシは首の辺りをさすつている。

「スースも意外と似合つてたぞ」

「ダメだな。あんたと同じで、オレも落ち着かない」

自分と同じ理由か、ならば仕方ないとリュクシーは小さく笑つた。

「市場を抜けたとシアメア地区だ。外国の船乗りたちが滞在する地区で、倉庫街や酒場が多い」

「ランドクレスの水上都市は内陸から順に分けられており、シアメア地区は6番目　　外周寄りの商業地区である。

一番外周のエマルジナ地区は外国からの船を規制する水軍が管理している。

入港を許可された外国の船乗りたちが、一時の休息を求めて訪れるのがシアメアだ。

外国人用の安宿や酒場が密集し、輸入品を扱つ市場や、輸出品を保管する倉庫街もある。

治安が良いとされるランドクレスで唯一、揉め事に巻き込まれる危

険があるとすれば、シアメアだろう。

外国人同士の殴り合いのケンカ程度ならば頻繁に見かける光景だった。

「船乗り連中は、各國の政府の許可を持った正規の船しか入れないとはいっても、長旅で死んでも惜しくない種なしの人間ばかりだ。『女』と接触する機会なんてない。中には『女』に対して妙な認識を持つてるヤツもいるから気を付ける」「イチシの乗つてた船は、どこの国のが管轄だったんだ?」

ふと氣になつて尋ねる。

「『ライフ』の船は世界連合所属の帆船だ」「なるほど。どうりでボロかつたわけだ」

世界連合では、表向きは汚染物質の廃棄禁止や資源の節約を唱えているが、実際は膨大な資源を費やして軍用機をいくつも所有している国がほとんどだ。

世界連合だけが時代を遡り、人力を動力とする公約通りの船を使用しているというわけだ。

(シェイド研究も　　表向きは『人力』の先にある力のはずだが
……)

奇麗事を言つていられないほど世界が病んでいるのは分かつている。だが、共食いする以外に道はないのか?

アクミナータ大陸のように文明を捨て、過去に戻り慎ましい生活を

送る事よりも、人の命をも資源として利便性を追求する。

食料難という問題もある。

保護地区の人間たちは、人口は減った方が好都合と考えているに違いない。

種なしの人間たちは、同列の存在ではなく資源として活用できればまだマシというわけか。

「離れるなよ

シアメア地区に入り、通行人の種類が変わる。

日に焼けた屈強そうな船乗り、酒場の呼び込みをしている女達、ツアーガイドを連れた観光客もいるようだ。

確かにイーバエルジュに滞在するような金持ちたちだけでは、この地区は歩けないだろう。

「あの店だ」

イチシが指した先には 5階建ての大きな建物が見える。

窓辺に白色と青色の提灯を吊るしている年季の入った古い木造の酒場だ。

正面に周ると、屋根の上に据えられた大きな木の看板に店の名前が書いてある。

「ディゴアスール……」ヒは

木の板に、大きく殴り書かれたその店の名を、リュクシーは知っていた。
リアデスに渡された酒場のマッチ そこには《ディゴアスール》と書かれている。

また胸元からマッチを取り出したのを見て、イチシも気がつく。

「ヒの店の事だつたのか」「名前を知らなかつたのか？」「一々店の名前なんて見ないぜ」

イチシがクレストと出逢つたといつ店。

「リアデスがこの場所に来いと言つていたといつ事は

クレストの存在は既にシュラウドの手の内にあるといつ事なのか。

「気に入らねえな」

イチシがつぶやいた。

それはリュクシーも同じ気持ちだった。

せつかく見つけたと思った手がかりが、既に古くて干からびた餌だ

つたとは。

「確かに気に食わないが
「行くしかないな」

クレスト＝ショトラとは一体どんな男なのか。
彼もシユラウドの手先なのか、それとも

リュクシーはイチシの腕にしがみつき身を寄せ、二人連れである事を強調した。
なるべく面倒は避けたい。

ディゴアスールの1階入り口の両開きの扉は大きく開け放たれ、そこからは陽気な音楽が漏れていた。
酒場に足を踏み入れる瞬間、独特の甘い香りが鼻をかすめる。

「何の匂いだ」

「ああ　　ランドクレスの地酒、ララックだらつ。ララックの花から作るから、臭いがキツイ」

「そりいえばあの花の香りだな」

ホテルのエントランスで嗅いだむせ返るような甘い香り　　あの花はララックというらしい。

鼻をヒクヒクさせながら、リュクシーは店内を見回した。
いや 見上げたと言つた方が正しい。

ディゴアスールは店舗の中心が広い吹き抜けになつていて、5階の天井にはステンドグラスが埋め込まれているのが見えた。

4階まで客で埋まつてゐるようだ。そこそこに流行つてゐる店うじい。

1階にはステージが設けられ、楽団が音楽を奏でている。

曲は皆、イバ教の民俗音楽らしく、ランドクレス人たちがステージの周りで思い思いのダンスを踊つていた。

「客の中にも派閥があつて、上の階は常連しか入れないらしい」

イチシの言葉に1階にいる客の顔を見渡すと、確かに観光客は2階より上には昇れないようだつた。

「やあ、来てくれたんだな」

その時、背後からリュクシーの肩を叩いた男がいた。レアデスだ。横にいるイチシの姿が見えないはずはなかつて、白々しく話しかけて來たようだ。

「中々いい店だろ？ま、一階はちよつとひねりこなだな」

勘に触つたのか、イチシはリュクシーを背中側へ押しやり、無言のままレアデスを睨みつける。

レアデスはかなりの長身で、見下ろされる形になるのがまた気に入らない。

「ああ、お前もいたのか」

レアデスはあくまでも爽やかだ。

仏頂面のイチシと違つて、朗らかな笑みを浮かべている。

「あら、レアデス！後であたしのトコにも寄つてね」

救助船で見かけた時の兵隊服とは違つて、極彩色の民族衣装をまとつたレアデスは、どこからどう見ても魅力的な男だった。酒場の従業員の女達が、レアデスとすれ違う度に声をかけていく。

「お前らの事だから、まっすぐここに来るのは思わなかつたけどな」

イチシの敵意には反応すらせず、レアデスは言つた。

リュクシーはこの男の顔を凝視する しかし、この笑顔からは何を考えているのか読み取る事はできなかつた。

レアデスは何のためにリュクシーたちをここへ呼んだのか。開口一番に出る言葉は一体 ？

「まあ、そんなに睨むなよ。とりあえず一杯飲もうぜ」

どんな指令があるのかと身構えていたリュクシーは、レアデスの言葉に萎えた。

「用があったんじゃないのか」

「まあまあ。酒場に来て酒を飲まないなんてナシだろ?」

レアデスはバー カウンターへと行ってしまった。

「……レアデスは後回しにしよう。クレストを見たといつのははどうだ?」

「2階席だ」

二人はレアデスから離れ、階段を昇る 2階はテーブル席が並んでおり、ゆっくり落ち着いて飲みたい者は1階のカウンターで買った酒を片手に、こちらへ来るようだ。

「 いるか?」

クレストの姿を探すイチシに、リュクシーは問いかける。しかしついチシは首を横に振つただけだった。

「クレスト＝シェトラなら、ここ数年目撃されていないぜ」

酒瓶にストローを挿したものを持つて、レアデスが背後に立っていた。

やはり その名が出たか。

レアデスがその名を知っているという事は
ストの存在を把握しているという事だ。

「ほらよ」

リュクシーとイチシに酒瓶を押し付け、レアデスは空いてる席に座
つた。

「……」

二人はレアデスの次の言葉を待つ。

酒を飲む気にはなれなかつた。

「ああ、オレは」

レアデスだけが酒に口をつけ、言葉を続ける。

「元々は違う目的でランドクレスにいたからな。他にランドクレス
に潜入している捕縛士がないから、お前らの任務にも協力する事
になつた」

「違う目的 それがクレスト＝ショトラか」

クレストは姿を消したのか ？

そして捕縛士たちがそれを追っている。何の為に？

「お前、クレスト＝シエトラにシエイドを教え込まれたらしいな」

イチシに問いかけたレアデスは、笑みを浮かべてはいなかつた。何故だか敵意のようなものを感じる。

レアデスにとって、クレスト＝シエトラは何か因縁がある相手なのかもしけない。

お前の彼氏は、ビンの飼い犬なのかもしれないとは思わないか？

空の上で言われた言葉を思い出した。

その言葉の意味によつやく思い当たつた。

リアデスの狙いはクレスト＝シェトラなのだ。

「 そうだな、勝負しないか? 」

「勝負？何の」

突然言い出したレアデスの真意が読めない。
何かメダリアからの指令を預かつっていたのではないのか？

「おい
暴れるな。田立つのせめあこ」

応じかねないイチシの服の袖を、リュクシーは引っ張つて止めた。
ドラセナ抹消作戦に関係ないならば、レアデスに関わる時間がもつ
たいない。

「殴り合ひ」の勝負はまた今度にして、これで勝負しようぜ」

レアデスは酒瓶を持ち上げ、につこりと微笑む。

「オレはクレスト」シェトラの情報が欲しい。負けた方が知つていい事を話す。それでどうだ?」

「それだけの価値のある情報を持つていいのか？」

リュクシーが猜疑の眼差しを向けると、レアデスはまた魅力的な笑みを浮かべる。

「情報提供ともう一つ
オレが勝つたら、リュクシーは借りる
ぜ？」

「誰が負けるか」

「おい、イチシ あんな挑発に乗るな……」

レアデスがどれほどの情報を持っているのか怪しいものだ。それに何か他の目的があるように思えてならない。

イチシを酔わせ、リュクシーから引き離すのが目的なのか？

「よし、じゃあ始めようぜ。お~い、モイス！アレの準備頼むよ。キツい奴くれ」

レアデスは店員を呼びつけると、酒の飲み比べの用意を頼む。

「マジで？相手はそのお兄ちゃんかい？あまりイジメるなよ、レアデス」

「ハハハ」

ランドクレスの観光本には、シアメアの酒場で飲み比べをしようとも誘われても、絶対に受けではないと注意書きが必ずついている。

酒豪が多いランドクレスの民と酒の勝負をしても勝ち目はなく、賭け事なんてしようものならば、身ぐるみ剥がされる危険もある。また、急性アルコール中毒で命を落とす者も年に数人はいるという。

「おい、イチシ！」

リュクシーは声を張り上げたが、イチシは全く聞き入れようとしない。

何をそんなに意地にならねばならないのだ 酷酊してしまつよ

うな事になれば、何にもならないといふの。」

「心配するな、負けやしねえ」

「お前、酒が飲みたいだけじゃないだろつな
「バカ言え」

リュクシーが渋つていると、店員が続々と2階に上がつて来て、レアデスの座つているテーブルの上に次々と酒瓶を並べ始める。

「お~い、」の一人がロータスやるぞ!」

モイスが吹き抜けに顔を出し、叫んでいるのが聞こえる。

飲み比べはシアメアの娯楽なのだ。

参加者の一人を取り囲み、野次馬たちが離し立てる中で勝負は繰り広げられる。

「負けないぜ?」

レアデスは座れよと椅子を勧め、イチシは無言のままそこに腰を下ろした。

(ああ、イチシのバカめ 何で意地になるんだ)

半分は自分のせいであると気付いてはいたが そうか、自分の
為か。

それに気付くと、リュクシーはため息をつくしかなかつた。

こうなつたら仕方ない。

レアデスを酔い潰して、知つてゐる事は洗いざらりしゃべらせるし
があるまい。

「イチシ、負けたら承知しないぞ」

「誰が負けるかよ」

イチシはイチシで、相当自信があるよつだつた。

「おいおい、大丈夫かあ、兄ちゃん。まだガキじゃねーのか。酒の
味分かんのか？」

「バ～カ、酒なんて飲んじまえば皆一緒よ！…げへへ」

ちょうど野次馬たちも集合した所である。

審判役の店員が、小さいグラスに地酒のララックを注ぐと一人に手
渡し、見物客の方へ向き直る。

「んじや、始め！…」

合図と共に、二人は1杯目を飲み干した。
かなりの飲みっぷりだ。 長い勝負になりそうだつた。

「オレの勝ちだな」

30分後、涼しい顔で言つたのはレアデスの方だった。

イチシは耳まで満遍なく真つ赤になり、まるで図書館にあつた『検索くん』のタコのように真つ赤になつて机に突つ伏しているというのに、レアデスは頬にほんのり赤みが差しているだけである。

「まあ、レアデスが負けるわけねーよな」

「相手が悪かつたな、兄ちゃん」

野次馬たちは勝負を見届けると、イチシに対して同情の言葉を口にした。

「レアデスだと賭けにもなんねえ」

こんな事なら自分が勝負すれば良かつたかもしれないと思ったが、今更一人して酔い潰れるわけにはいかない。

だが確かにイチシは頑張つたと思う。レアデスがアルコールに強すぎたというだけの話だ。

「さて邪魔者がいなくなつた事だし。あつちで少し話をしないか。あいつはしばらくなつて起きねーから、そこで寝かせとけばいい」

勝負には負けたが、レアデスが知つてゐる事を聞きださなければならない。

リュクシーはイチシから少し離れた場所のテーブルで、レアデスと向かい合って座った。

非常時に備え、視界の隅にはイチシの姿が入るようになした。

「随分成長したな、リュクシー。メダリアで最後に会った時は、男勝りのガキだったが、女になつた」

子供の頃は周りは男ばかりだった。

一番仲が良かつたのはクラウだが、クラウの仲間たちともよく張り合つた。

レアデスは3期上だつたせいか、彼らの兄貴分だった。

「お前だつて変わつたさ」

レアデスを前にして警戒心を解けない。こんな関係になつてしまつとは、あの頃は思いもしなかつた。

「お前、オレが認証式を受ける頃、独房に隔離されてたしな」

お前らしこぜ、とレアデスは小さくつぶやく。

それはあの頃だ。

ゼザと二人、ビレイラ・ドームへ抜け出して魔獸に襲われた直後。

ゼザは集中治療室、リュクシーは独房に入れられている内に、レアデスの代の認証式は終わり、早速外界任務へと派遣されたのがメダリアから姿を消していたのだった。

そしてゴーテチャの上空で二人は再会した。

レアデスはすっかり少年から大人の男になっていた。

「お前の認証式はどうだったんだ？」

リュクシーは昔話に興味はなかった。

だが、とりあえずはきっかけを作る事だ。レアデスの会話に乗つて、少しでも情報を引き出さなければ。

「私は認証式は受けていない。 その前にメダリアを裏切り、脱出した」

そう、リュクシーは『捕縛士』ではないのだ。

外界任務に就いていたレアデスは一連の脱出劇の事は知らないのだろうか。

「ああ、らしいな。聞いたよ」

しかし、予想に反してレアデスの返答は軽いものだった。

「知ってるなら聞くな」

思わず指摘すると、レアデスは円らな瞳をさらに大きくしてみせる。

「でもお前、《シェイド》を手にしてメダリアを脱出したんだろう？」

「……それは……」

リュクシーの脳裏に、一人の男の姿がかすめた。

彼がいなければ、確かに自分はメダリアを脱出する事はできなかつただろう。

「認証式 卒業証書をもらつんぢやないんだぜ？」

自分に最も共鳴するシェイド玉を選び取る儀式。
これをクリアしなければ、《捕縛士》にはなれない。

（カライ ……）

「あいつは 道具じやない。シェイドは道具じやない

確かにリュクシーは あの時、一人のシェイド体と激しく共鳴していた。

だが、二人の間に優劣があつたわけではない。
リュクシーはカライと語り、笑い、怒り、全ての感情を互いにぶつけあつた。

そして 知つた。

彼らが己を保つ事の難しさを。

リュクシーはカライト繋いだ手を離してしまった

そしてカラ

イは魔人となり、果てた。

「色々あつたみたいだな」

色々思い出していたリュクシーに、レアテスは静かに言つた。

「まあ、オレから見たらうひやましい話だな。オレはまだ認証式が終わってないからな」

「……なんだつて？ どういう意味だ」

リュクシーの動揺ぶりを見て、レアテスは笑う。

「どうして？ そのままの意味だ」

認証式に失敗し捕縛士になれなかつたものは、メダリアの研究員になつたり、軍人になつたり、メダリアに留まる事はできないはずだつた。

少なくとも、リュクシーはそう思つていた。

「オレは自分の手にするべきショイドとまだ巡り会えていないのさ」

「私が『S』扱いになつてゐるといふ話もそつだが メダリアの『ルール』は、シユラウドの言葉一つで全く意味がなくなるようだな」

「そりやそつだ。メダリアはシユラウド様の箱庭なんだからな」

「お前は…シユラウドに心酔してゐるわけではないようだな」

様付けで呼んではいるが、そこに忠誠心はあまり感じられない。

「オレはお前より3つは年上なんだぜ」

「知つてるが?」

何を今更とリュクシーは眉間に皺を寄せる。

「メダリアに来た時、オレは既にそこそこガキだったって事だ」

セントクオリスがメダリア・ドームを作り、捕縛士の卵たちをそこ押し始めたのは12年前 レアデスは6歳くらいにはなつていたはずだ。

リュクシーたちは皆、新年に一齊に年を重ねる為、正式な年齢は分からぬいがそのくらいだろう。

「当然、外での記憶もそれなりにある」

外での記憶 レアデスの出生。

リュクシー自身もそつだつた。

外からさらわれてきた子供たちは皆、何か特別な境遇の子供たちなのだ。

「まあ、オレの昔話はいい。」

「そろそろこいだろ?」

壁にかけられた時計に手をやると、レアデスは立ち上がり、熟睡中のイチシの方を向いた。

「フラックの酒にはちょっと副作用があつてなんだ。オレたちのようにショイドに近い人間には特に強く出る」「なんだって!?」

「ちよつと待つた

駆け寄るなりしたリュクシーの腕をつかむと、背後からガツチリと押さえ込まれてしまつた。

「離せ!」

リュクシーは思い切りレアデスの右の足を踏みつけた。

が、腹の立つ事にショイドでガードしたのか、全く堪えていないうようだ。

「いいから見てろつて。 クレスト＝ショトラの情報を握つてるのはオレじゃなくてアイツの方だ」「最初からそのつもりだったな」

「人間の記憶なんて、意識を取つ払わないと見えて来ないもんさ」

イチシはすっかり眠りの世界へ取り込まれてしまつてこるよつだ
ゆつくりと寝息を立てながら背中を上トさせている。

「いいか、リュクシー。本音を知りたけりや、寝込みを襲え。恋愛
において絶対の法則だぜ？」

「卑怯なのは好みじやない」

「正攻法だけじゃ先に進めない時だつてあるさ。クレストの情報が
欲しいのはお前だつて同じだろ？」「だからつて私は人の記憶を盗み見たりしない！…」

「だから そんな事言つ余裕があるのか？問題はそこを
「 つ 」「

イチシの記憶を薬の力で呼び起こす それではメダリアのやつ
ている事と変わりがないではないか。
だがレアデスの言つ通り、余裕がないのは事実だつた。

それでも リュクシーは怖い。

イチシの記憶を覗いて、そこに絶望があつたとしたら？
イチシが必死に隠している記憶を、リュクシー やジンたちを守りた
いが為に押し殺している感情を、リュクシーが勝手に覗き見るなん
て。

それはイチシとの間の信頼関係を跡形もなく砕いてしまつ行為だ。イチシの意思を軽んじる行為だ。

「私は見ない イチシの口から聞き出すまでは、誰にも覗かせない！」

ショイドで一気にレアデスの腕を跳ね除けると、リュクシーはイチシの元へ駆け寄った。

イチシは相変わらず赤い顔で寝ていた。副作用で苦しんでいる様子はなかつた。

イチシを連れてホテルに戻り、軽く触れたその時

「……」

イチシのショイドがリュクシーの肌を伝い、一瞬の内に脳裏に映像を刻みつけた。

その衝撃に、リュクシーは思わず手を引いた。

(今)

冷や汗が額を伝う
垣間見たイチシの記憶
その中に

ああ、そうだ。

船上でイチシのショイドを浴びたあの時に
かかつた違和感はこれだ。

(何故 イチシの記憶の中に)

心のビックに引っ

その時、気配を感じた。
リュクシーは顔を上げる
視線の先のテーブルで、酒瓶を傾け
る男の姿があった。

呼吸をする事さえ忘れ、男の顔に見入る リュクシーはこの男を知っている。

だが、この男は誰だ。誰だ !?

『少年。お前の名は何だ?』

顔に刻まれた皺は姿を消し、目の前にある残像は艶めく肌と、皮肉めいた笑いを宿していた。

これが クレスト＝シェトラ。イチシにシェイドの扱いを教えた男。

「これがクレスト＝シェトラか……」

気が付くとレアデスが横に立ち、同じ残像を前にして感嘆の声を漏らした。

「レアデス　　お前にはどう見える」

「シュラウド様と同じ顔だ」

レアデスはあっさりと認めた。

確かに認めざるを得ない　　だが違和感もあるのは事実だ。

「随分若いな。20代半ばって所か　　つまり、今から15年くらい前のシュラウド様はこんな感じだろうな」

「それが何故　　どういう事だ！」

イチシがクレストを見たのは2、3年前だ　　シュラウドのはずがない。

15年前にショイド体となつたクレストが、シュラウドであるならば、メダリアにいるあの男は誰だ。

年を重ね、衰えた肉体を持つているあの人物は誰だ？

「ようやく近づいたぜ　　つと……」

クレストの残像は、一瞬再生されただけで、再び消え入らうとしていた。

「リュクシー、ずっとそいつに触れている。お前を介さないと、オ

レには見えない

一瞬、レアデスの指示に従いつになつたが リュクシーは思
い留まつた。

「言つたはすだ。イチシの記憶を盗み見るつもりはない。聞けば済
む事だ」

「何をそんなにこだわつてんだ? 話に聞いて、クロストの姿勢が分
かつたか? お前が言つてるのはただの奇麗事だ」

レアデスはリュクシーの手を取ると、無理やりイチシの背中に重ね
よつとする

「くつ 離せ!!」

「こいつを助けたいんだろ?」

レアデスの言葉は悪魔の囁きだ 耳を貸してはならない。

「こいつの全てを知らないで、こいつを助けられるのか? こいつの
命をお前は背負つつもりなんだろ? 全てを知らずに、こいつの何を
救えるって言つんだ?」

レアデスの言い分には最もな部分もある それは分かる。

リュクシーならば、イチシの記憶から新たな何かを探し出せるかも
しれない。

「こいつを好きなら見ればいい でなけりや死ぬぞ。お前にこ
いつは救えない」

リアデスの手を払いのけようとしても、指のまゝに動かない
後少しでイチシの背に触れてしまつ。

(イチシを好きなら　　?)

リュクシーの心を見透かしたよつたその言葉に、リュクシーは激しい怒りを感じた。

バシッ　　!!

「　　……」

リュクシーに頬を打たれ、リアデスは言葉を失つた。

「イチシは人間なんだ お前達の道具じゃない……」

人の心を暴く事が愛情の一歩だというレアデスを許すわけにはいかなかつた。

「レアデス お前は人を信じた事があるか?人として、対等に向き合つた事があるか?」

「なくても無理はない レアデスもリュクシーと同じ、歪んだ箱庭の中で生きてきたのだから。

「相手の全てを知る事が、愛情だと?それは支配したいだけだ。シェイドを武器とする捕縛士のようにならぬ シェイドより優位に立ちたいだけじゃないか」

リュクシーはレアデスの目を真っ直ぐ見据えた。

「お前に誰のシェイドも支配できるものか

レアデスはまだ知らない 自分が手にしようとしているモノの正体を。

知らずにいられれば、その方が幸せなのだろうがないだろう。 そもそも行か

彼も、シユラウドが選んだ実験体なのだから。

「これ以上イチシの中を覗く事は許さない。」

去れ」

リュクシーが激しく睨み付けると、しばらく真顔で見つめ返してい
たレアデスだったが　　ふと口元が緩んだ。

「前言撤回だ。　　お前は変わってないよ。今も昔も、不器用で
優しくて……シュラウド様のお気に入りだ」
「……お気に入りなものか。虫睡が走る」

本当はリュクシーにも分かつて來ていた。

シュラウドにとつては、過程は問題ではない。
彼にとつては、自分から逃げ出そつと、刃向かねつと、問題ではな
いのだ。

彼の育てた捕縛士たちが、最期にどのような結末を迎えるか
それが全てなのだ。

「悪いがオレにも譲れない理由があるんだ」

「それがどうした。私も譲らない」

意地の張り合いならば、負けない。

どんなに笑顔で懐柔しようと、リュクシーの心は動かない。

「分かった。お前には言つておかないとならぬ」

「何を言つても私は意見を変える気はない」

いい加減しつこい男だと、リュクシーは一蹴した。

「クレスト＝ショトラはオレの父親なんだ」

予想もしない言葉だつた　　その一瞬の隙を突き、レアデスはリュクシーの右の手のひらをイチシの背中に押し付けた。

ピシッ

イチシの背に触れるか触れないかの瞬間、空間に亀裂が入り、見えない力で一人は弾き返された。

「…………やめな。あんたたちもドーラセナの呪いを受けたいのかい」

いつの間にそこに立っていたのか、気が付けばマティラ＝キャナリ一がそこにいた。

「マティラ様…………どんな呪いを背負つ事にならうと、オレはクレスト＝ショトラをこの手に収めたいんですよ」

レアデスは特級捕縛士を相手にしても臆する事なく、かといって虚勢を張るわけでもなく、落ち着いた声で問う。

「アンタ クレストの息子だつて？あいつに『家族』はいなかつたはずだよ。受精バンクでクレストの精子が使用され、子供が産まれた。何十人、何百人と。アンタはその内の一人に過ぎない」「何故マディラ様が知っているんです？あなたはクレスト＝ショットはどういう関係があるんですか？」

そう、全てを知りたいのならば、イチシではなくマディラ＝キャナリーに聞くべきなのだ。

生きていたはずのクレスト＝ショトラを知っているのだから。

「あたしとクレストはかつて同じ地で生きた。それだけの話さ」「それだけ？それだけのはずがない。あなたは何かを隠している」

レアデスはマディラの次の言葉を待つ レアデスが必死なのは伝わった。

何故己の出生を追うのかは分からぬが、彼にとつては全ての言動の中心にある目的なのだ。

「 ハツ！！」

マディラは突然笑い出した。

「何がおかしいんです？」
「確かに しつこい所は、あいつ譲りかもしないね」

（目が笑つてない ）

マディラの表情はこわばつたままだった。

再会してからのマディラは、感情を無理やり殺してしまったかのように、冷たく、誰もかもを突き放すような空気をまとう。ドラセナ＝ロナス抹殺に懸けるマディラの強い想いの表れだ。

リュクシーが初めて見たマディラはまだ人間だった。
強い意志を秘めた捕縛士なんだと思った。

シェイド体は皆、いつかはこうして『人』から外れてしまつ末路しかないのでだろうか？

カライのように、人に執着し、狂気に捕らわれ、魔人となるか。マディラのように、感情も思い出も捨て、生ある時に成し遂げられなかつた事を果たすか。

それともシェイド体の数だけの悲しい結末があるのでだろうか

「クレストの息子。あんたがその肩書きで何かをしようつと申つたのなら
この店の5階に行つてみな」

「5階へは紹介がないと入れないですよ。マティラ様がオレに招待
状をくれるんですか?」

マティラはレアデスに握り拳を差し出した。

指を開くと、そこには一枚の紙切れを折り畳んだものがある。

「招待状じゃ ないが あんたにはこれをやる。《その時》
が来るまで、肌身離さず大切に持つている」

レアデスはゆっくりと マティラの顔色を伺いながら右手を伸
ばし、紙切れを受け取った。

「上に行くには、クレストの息子だと名乗ればいい。そしたら分か
るだろう。あいつがどんな人間だったのか」

「……」

レアデスは一瞬しか考えなかつた。

店の中心にある大階段へ駆けて行き 話しているようだ。

従業員に向かつて何かを

レアデスの元に何人かの従業員が集まり、少し揉めていたようだったが、程なくしてレアデスは階段を昇り始めたのだった。

「クレスト＝シェトラがD・・シユラウドなのか」

リュクシーも、当然の疑問をマティラにぶつけてみた。

まるで同じ造形の顔立ち 異なるのは皮膚に刻まれた皺だけ。
それは齢の差だ。

血縁者なのか ?

一人は肉体を失いシェイドとなり、一人は今も生き永らえているのか?

それとも 生きながらにして、自身のシェイド体を自在に操れる?

シェイド体の年齢さえも意思一つで変化をせる事ができるのか?

「あたしの知るクレストは死んじまつたはずさ」
「じゃあ、D・・シユラウドは何者だ!! あの男は生きてい
るのか……!?」

感情を持たず、冷たい

冷え切った表情のDr・ショーラウド。

確かに 終わりの瞬間に捕らわれて現世を彷徨うショイド体が、
感情から逃れられるとは思えない。

生きているから？

だからこそ、感情を捨ててもそこに在る事ができるのか。

(感情を捨てて ？)

感情を捨てるという事は、生きる意志を失うという事だ。
生きているという実感を持たないという事だ。

そんな者が、メダリアのトップに收まり、捕縛士を育成しようなど
と思うだろうか？

目的を持ち、その実現に向けて行動する事ができるだらうか？

リュクシーにはどうやらも不可能だと思えた。

だからこそ分からなくなる Dr・ショーラウドとは何者なのだ。

「あたしにも分からぬ。 それこそもつ、どうでもいい事だ」

「それこそもつ、どうでもいい事だ」

「マディラの成すべきは、もはやドーラセナと共に消滅する事だけだった。

マディラとドーラセナが『死んだ』という事実の前に、裏に誰かの謀略があったかどうかなど、今となつては関係がない。

「これだけは断言する。今回の作戦にクレストは関係ない。クレストの事は忘れな」

「さつき同じ時を生きていたと言つたのに、『関係ない』のか？そんな都合の良い話があるものか」

姿を現してまで、クレストの記憶を呼び起す事を阻止したマディラだ。

そこには知られて困る何かがあるに違いない。

「まずは生き延びなければ、その先にも辿り着けないという事さ」

「……それがイチシとした取引か？」

マディラが情報を制限する理由 イチシが既に知つてゐるはずの情報を、リュクシーから遠ざけようとする理由。

想像がついてしまうのだ 望まない答えであつても。

マディラは応えなかつた。

それが真実を物語つていた。

「お前達は皆、イチシが死ぬ事を前提に動いてゐるが 私は違

う。絶対に死なせない」

イチシでさえも
ろうとしている。

そんな事にはさせない。絶対に
リュクシーこそが、命を懸け
てイチシを守る。

自分の命と引き換えに、リュクシーたちを守

無理なんだよ

だがマティラの瞳は、覆しよつのない結末が既に見えているかのよ
うだった。

リュクシーの放つ生を渴望する激しいショイドも、マティラの深い

悲しみに満ちた重苦しいシロイドとぶつかった瞬間に取り込まれてしまいそうになる。

不安に飲み込まれそうになってしまった

(ダメだ……絶対に諦めは………)

リュクシーは両方の拳を握り締め、歯を強く食いしばった。自分の中にある悪い気を発するものを、追い出したかった。

「う……ん……」

その時、死んだように眠っていたイチシが、声を漏らしながら動いた。

横でリュクシーが大声を張り上げたせいか、そろそろ覚醒するところだ。

「イチシ、起きる。帰るだ」

どちらにしろ、今日のイチシはもつ使い物になるまい。

明日また出直そう そう思い、イチシを起しやうと手を伸ばし、恐る恐る背中を突く。

ララック酒の誘引効果はもう影を潜めたようだつた。

甘い香りも酒の臭気に姿を変え、そこにはただの酔っ払いがいるだけだ。

「おい、イチシ。起きあひ 今、水をもひつてくるから」

上半身を引き起こし、おやおやと揉めらるる、イチシは眉間に皺を寄せて唸るだけだった。

リュクシーが手を離すと、そのままゴシソと鈍い音を立てて固い木の机に額を打ち付ける。

「リュクシー」

「何だ。まだ何かあるのか

足は止めたが、マティラに振り向く事はしなかった。リュクシーの足首をつかみ、狂気に溺れかけるイチシから引き離そうとする者たちと真実が語りえるとは思わない。

「あと数日で役者がそろう。その後、イチシには時計塔へ向かってもらひ。アンタは　アンタがその時に感じたままに行動しろ。それでいいはずだ」

マティラもかつて、煙に巻かれながら必死に階段を駆け上った
その先にあるのは絶望しかないと知りながら。

在つたのはただ一つ。

ドリセナの元へ、自分を見つめるあの瞳を守るために

自分の中にあんなに熱い感情があつたのなら、もっと早くに気付きたかった。

もっと　ドリセナと向き合えば良かつた。

だが、それでもマティラは幸せだったのだろう。
最後の最後に気付く事ができた。

ドラセナはまだ知らない 今も暗闇の中でたつた一人、泣きながら脅えているのだ。

「ドーラセナは あたしの娘だ。だから、あたし自身の手で終わらせる」

リュクシーは振り向いた 今マディラが口にした言葉は、真実であると思ったから。

「アンタなら 分かるだろ? あたしがやらなくてはならない理由が」

その瞳に秘めた決意 それはかつてリュクシーが抱いたものと同じ光だった。

「それでも……イチシは渡さない」

二人の視線は平行線だった どちらも譲れない理由があった。成し遂げる意志も強さも。

だが願いが叶うのはどちらか一方なのだろう。敗れた者は、大切なものを失うのだろう。

「後悔したくないからな」

マディラのよう

母と娘の間に何があつたのかは分からぬ
どく後悔しているのは感じ取れた。

だがマディラがひ

悲しい結末を見たシェイド体 結末を過ぎても、未だ終わる事
のできない魂。

自分たちはそんな場所へは行かない。

なんとしても生き続けるのだ イチシヒ一人で。

「やれるだけやってみな」

視線を外したのはマディラが先だつた。

この娘はきっと、強く生きる 生き延びて、マディラには辿り
着けなかつた場所へと達するだろう。

捨て台詞のように吐き捨てたが、マディラの顔は笑っていた。
ゴデチヤの港で出逢つた時のような 人間らしい笑みだった。

「言われなくとも

マディーラが去る背中に向かって、リュクシーはつぶやいた。

ライトの光の届かない酒場の片隅まで行くと、マディーラの姿は背景に溶け込んで見えなくなってしまった。

『人間らしく』在る事に、もはや重きを置いていいのだろう。

マディーラは一瞬でどこでも行けるし、姿を現すも消すも自由自在といつわけだ。

（人間らしく 意識しなければ、そんな当たり前の事でさえ、当たり前にできなくなる）

マディーラを支えているものは カライとは違う。

彼女が死の瞬間に抱きかかえていたものは、絶望ではなく、我が子への愛情だったはずだ。

彼女ならば、再び訪れる死の瞬間の中でも 『人間らしさ』を失わないでいられる気がした。

だが、それを再現するには 新たな生贊が必要なのだ。

二度とドラセナ＝ロナスを蘇らせないよう に 彼、いやマディーラは娘だと言った 彼女に関わった人間全てを葬り去る。

(本当にそれで終わるのか?)

新たに奪われた命から、新たなドラセナ・ロナスが誕生しない保障などない。

人間が存在し続ける限り、それは断ち切る事のできない宿命なのではないか。

断ち切ろうとする事に意味があるのでどうか

リュクシーが葬ったシェイドたち　　彼らも再び、現世に蘇る事があるのだろうか？
新たな宿主を手に入れて。

「目が覚めたか？」

イチシがようやくはつきりと目を覚ますと、リュクシーがテーブルの向こう側から呆れた顔をしてこちらを見ていた。
どうやら酒の飲み比べは負けたらしい。イチシに勝つなんて、ジン以外には在り得ないと思っていたのに。

「あいつは死んだ」

酒で声が潰れたか、イチシの声は低く濁っていて、聞き取り辛い。リュクシーは吹き抜けの方に目をやり、階段を指差した。

「5階に用があるらしい」

頭痛があるらしく、イチシは頭を抱えたままだ。

リュクシーは水差しの水をコップに注いでイチシの前に置いた。

「これくらいで口をなに酔ははずがないんだが」「

負けた言い訳をするのはみつともないと思いながらも、イチシは思わずつぶやいた。

「……リアデスが薬を入れていたのかもな。誘引効果が増す類を」

「なに?」

「最初から

そのつもりだったんだ、レアテスは

「あの野郎」

吐き出すと同時に、イチシは水を一気に飲み干した。

「だから挑発に乗るなと言ったのに。こんな事なら私が勝負すれば良かつたな」

「何言つてゐ! あんたは酒はダメだ」

リュクシーの言葉に驚いたようにイチシが言つ。その剣幕に逆にリュクシーが驚いた。

「明日 ちゃんと検査を受けるよ、いいな

イチシが怒った理由が分かった。

自分の中にある可能性の事を心配しているのだ、イチシは。

ジンの娘、クレストの息子、マティラの娘

リュクシーにもそ

ういつた繋がりが出来るかもしけないという事は分かつていて、実感が沸かなかつた。

リュクシーは複雑な気持ちだつた。

今 イチシの生を背負う事で精一杯な現状に、新たな命が負担となつて圧し掛かるのではないか。

そう、負担となるのではないか イチシの為に使おうとしている力を、他に割かなくてはならなくなるのではないか。

極端な話、自分を取り巻く世界が変わつてしまつよつた気さえしていた。

いや、違う。

変わつてしまつのは自分自身だ。自分の自分に対する見方が変わつてしまつのだ。

未知の自分を抱えて、この世界に挑まねばならないのだ。
想像も付かない それがリュクシーの本音だつた。

「酔いは覚めたか？今日はもうホテルに戻ろう。これ以上変なシェイドに取り憑かれたら厄介だからな」

答えをばぐらかしたリュクシーに、イチシは何も言わなかつた。
イチシはイチシで複雑な想いなのだろう。

そう、リュクシーだけの問題ではない。

もし子供が出来ていたら イチシはますます頑なに、自分を犠牲にして皆を助けようとするかも知れない。

店を出ようと席を立つと、上階から怒号が聞こえる。

「レアデスが暴れているらしいな

「きやああつ」

悲鳴が聞こえたかと思うと、吹き抜けの5階部分から大きなテーブルが落下して行くのが見えた。

ドガアーン ツツ！！

派手な音を立てて、木のテーブルは大破した。

1階の舞台で演奏していた者たちはちょうど休憩時間だったらしく飛び散った破片で負傷した者はいなかつたようだが 置いたままにされていた楽器が何点か被害にあったようだ。

「加勢しに行こうなんて思うなよ」

「そこまでお人好しじゃない」

それに、レアデス一人でも問題はないだろ？
生身の人間相手なら、よほどの事がない限り捕縛士が窮地に陥る事
はない。

「レアデスは クレスト＝シートラの息子」

そういうば、イチシは寝ていたから知らないのだった。
マディラ＝キヤナリーが現れた事も。

「 あいつが？」

「そして ドラセナ＝ロナスは、マディラ＝キヤナリーの娘ら
しい」

「……死んだオレの親父も出て来そうな勢いだな」

イチシが皮肉めいた事を言いたくなる気分も分かる。
全てが偶然のはずがない 全てが誰かに仕組まれている。

「少し頭の中を整理しよう。

ホテルに戻るぞ」

マディラは一人、イーバエルジューの地を歩いていた。

カツン、カツン

自分のヒールの音だけが、響く。

すれ違う人間たちは色褪せ、マディラは一人、別世界の中にいた。

かつて訪れた縁の土地 まだ思い出せる。

マディラの中にはまだ人であつた頃の記憶が残つてゐる。
いや、逆かもしれない。マディラは思い出だけでこの姿を留
めている危うい存在なのだ。

(あの時は クレストのせいで、散々な目に合わされたつけて
……)

クレストの息子が、自分が誰の子であるかを知っている事には驚いた。

マディラの時は止まってしまっても、周りの時間は流れ続けている
という事か。

クレストが遣り残した事は、息子が継ぐだろ。マディラが遣り残
した事は、マディラがこの手で貫くだろ。

マディラにはどうしても信じられなかつた
ところの男は、クレストとは別人だ。

(別人のはずだ)

だが、『入れ物』はクレストのものだと認めざるを得なかつた。
ホクロや痣、傷跡に至るまで、あれはクレストの肉体だつた。

人が自身のシェイドの特性を変える事は99%無理だとクレストは
言つていた。

先天的に持つてゐる傾向、育つた環境によりその傾向は顕著になる。

自我が確立してしまえば、その時点でのシェイドがその者の特色として定着する。

クレストのシェイドを知っていたマディラには、あの二人が同一人物とは思えない。

（ 人格が2つに分裂した？だが、あいつは多重人格ではなかつたはずだ）

クレストとシュラウドが完全一致しない以上、シェイドが2つあるという結論しかない。

（あいつは　自分が死んだ事を分かつていた。死んだと思っていた）

それは確かだ。

マディラはシェイド体となつたクレストを、この目で確かに見ているのだから。

（ あたし自身の瞳が、既に使い物にならないガラス玉つて事か…）

マディラにだつて、境界線は分からぬ。

自分はいつ死んだのか？

あの瞬間は、生きていたのか？死んでいたのか？

あの時の自分は生きていたのか？既にショイド体となっていたのか？

「何考えてるの？マディ」

背後から、鈴を転がすような声が聞こえ、マディラは立ち止まった。

「また当てるみせようか？」

ゆっくりと振り向くと そこににはドラセナが立っていた。

「あたしが考えるのは あなたの事だけだよ、ドラセナ」

マディラは自分自身に確かめるように、ゆっくりと言葉を発した。少年とも少女とも言えない無垢な子供の姿をした魔人は、大きな瞳をますます大きくさせて、マディラの方を見ている。

「そうだね マディの頭の中は僕の事で一杯だね

虫も殺しそうにない無邪氣で透明な笑顔 この顔が歪む瞬間を、
マディラは知っている。

「僕が作った駒たちをランドクレスに集めているみたいだけど
本当に殺す気なの？僕を？」

ドラセナを前にして、最早偽りを述べる理由もない。

二人は今、魂だけの丸裸の存在なのだから。
全てはシェイドを感じれば、分かつてしまつ事だらう。

「あたしと一緒に逝こい」
「本当に殺せるの？マディに？」
僕の駒たちは、まだ生きているんだよ」

ドラセナも知っている。

向かい合つ勇気がなく、目を閉じてしまった どうしようもな
く弱かつたマディラの心を。

ドラセナ一人の生を背負つ覚悟のなかつたマディラに、多くの命を
犠牲にする事などできはしないと。

「それしか方法がないのなら あたしは選ぶよ。真っ先にあん
たを」

マディラの本心を見定めるかのように、母の残骸を見据えていたドラセナだったが、またいつものように無邪気に微笑んだだけだった。

「そう。 これでマディも僕と同じだね」

「同じ?」

「そう、同じ。 人間たちは僕を見て恐怖を感じる。 マディもそういう

る

ドラセナが各地で惨劇を繰り返す理由 それは人間にドラセナを焼き付けるためだ。

共鳴する人間の目にしか触れないシェイド体が、人の意識の中を渡り、彼らのシェイドを呼び起す。

人間たちのシェイドが共鳴し、より強く魔人を具現化する

存在し続ける為に、ドラセナは人間たちに刻み続ける 自身が浴びた恐怖や苦痛を。

「ドラセナ もういい。 これ以上、苦痛を味わい続ける事はないんだ」

「苦痛? おかしな事言つね。 苦痛を感じるのは肉だよ。 肉があるから、痛いんだ。 僕らはもう、人間じゃない」

何度も繰り返した会話だろう それでも、今回は違った。
これが一人の交わす最後の会話になる。

次に出逢う時は 終わりの時だ。

二人が直視できなかつた生と死の境目を、今度こそ見届ける。

「試してみるといいよ 僕はもう、何も恐れない。何にも殺されない。マテイが何をしようと無駄な事だよ」

ドラセナの笑みは崩れなかつた 生きている時には、笑う子供ではなかつたのに。

籠に捕らわれ、誰にも愛されず、傷つけられる事に脅えていた。

「 もう少しだけ……あの場所で待つていひ、ドラセナ。 あた
しは……」

目を閉じて、ドラセナと初めて出逢つた時の事を思い出す

求められている事に恐怖を覚え、顔をそむけた。

ドラセナの瞳を見た瞬間、この子供と自分は避けられる絆があると
知つた。

必ずあんたを迎えに行くから

もう言葉はいらない 同じ血を持つ我が子、マティラの娘……
全てを焼き尽くす業火の中で、今度こそ必ずドラセナを見つけ出してみせる。

「マティは来ないよ。 いくら待っても来ない」

ドラセナの顔が凍つたように無表情になる ああ、この顔こそ
が本来のドラセナの顔だ。

「必ず行くぞ。約束する」

あはつ

ドリセナの顔は歪み、腹の底から絶叫した それほどまでに、マティラの言葉はおかしくて仕方なかったのだろう。

--- --- --- --- --- --- --- ---

故曰：「吾以是為子之子也。」

永遠に絶叫し続けるドラセナを前にして、マティラは自分の犯した罪から目を逸らさなかつた。

「……」

「必ず行くよ 最初で最後の約束だ」

笑い続けるドラセナを残したまま、マティラは踵を返し歩き出した。一刻も早く ドラセナを救い出したかった。

この腕の中に、もう一度つかまえたかった。

（ あと少しだ、ドラセナ。それまでに、あんたとの記憶を何度でも思い出す……幾千回も後悔する）

肉体を失えば痛みを感じないといつのは嘘だ。
マティラの胸は裂けて朽ち落ちてしまいそうなほど、激しく痛んだ。

それが感傷を誘つ

まるで生きていたあの頃のよつだつたから。

「おひ、 やつと戻ったか！ お前らがいない間に大変な事に」

ホテルの部屋に戻ると、ジンが取り乱した様子で駆け寄ってきたが、イチシの様子がいつもと違うのに気付いたのか、顔を顰める。

「イチシ、 酒臭えぞ」

「色々あつてな そつちは何があつたんだ」

酒なんて飲んでる場合かと言わんばかりにイチシを睨み付けたが、今はそれどころではないらしく、アルコールの入っていないリュクシーの方に向き直る。

「お前らが出てつた後、 ホテルのヤツが来てこんなもん置いてつてよ ランドクレス王宮への招待状だ！」

ジンが突き出して来たのは、ランドクレス王宮の紋章が刻まれた高級紙でできた招待状だった。

「王宮へ？ 一体、 何でそんな事に？」

「オレが知るわけねえ！ とにかく見てくれ……」

2つ折の招待状には、こう書かれていた。

『親愛なる方へ。我が城で夕食を共にいたしませんか。明晚、遣いの者をお迎えに上がらせます。～ランドクレール97世～』

王の館前にはランドクレス王家の紋章が青インクで押印されていた。

「これは 本物に見えるが……」

「ホテルのヤツが、王宮騎士が届けに来たって言つてたぞ……」

王宮騎士とは、ランドクレス王族や貴族出身の若者から成る、浸水林と王宮を守る騎士団のことだ。

とはいへ、それは特權階級の名ばかりの名誉職に過ぎず、実際にイーバエルジューを守っているのは軍隊なのだ。

「ランドクレス国民が王宮騎士を見間違えるとも思えない やはり本物という事か。しかし、何故……」

メダリアが用意した肩書きが『ヴィーツリー國の資産家』であつたとしても、王宮に招かれるのは異例な事だ。

王宮は限られた者のみが踏み入れる事を許される場所、外国人が王族に謁見する時は、イーバエルジューにある離宮を使用するのが常である。

「で、どうする、行くのか？」

できる事なら「行きたくない」というのがジンの本音のよつだ。顔にそ
う書いてある。

「招かれたのはお前たちだけ しかも王宮はまずい」

ランドクレス王宮は、元々低層の建物が多いこの国の中で時計塔に
次ぐ高層な建築物である。

ドラセナ＝ロナスの再現劇に必要な要素のある場所に、イチシ一人
を向かわせるわけには行かなかつた。

リュクシーが同伴できない以上、この招待状に従うのは危険過ぎた。

「でもよ 王さんの誘いを断るなんて出来るのか？」

「また王宮騎士が迎えに来るんだろうから 無理かもしねい
な。そうなつたら、私もこつそり付いて行くしかないだらう」

メダリアでは、尾行術も叩き込まれた。

シェイドで暗示をかけ、自分のいる空間を周りの人間に違うものと
して錯覚させるのだ。

集中力と、周りの人間の人数に応じたシェイドを要する高度な術だ
つた。

(ゼザは得意だつたな 私は持久力に欠けた)

水上都市での尾行は人通りが多い為、完全に姿を消すのは無理だろ
うが、王宮への道のりは限られた者しか許されない分、使うシェイ
ドの量も少なくて済みそうだ。

「その事だけど」

突然、聞き慣れない声が会話を止める。

そこには青髪の捕縛士が一人、佇んでいた。
レアデスのパートナー、ピケだ。

「マデイラ様に確認した所、行くのはジンとヘリオンの2名。イチシは行くなどの事よ。尾行は私がやる事になったわ」

ピケがジンとヘリオンの監視役なのか 今まで気配を感じさせずに同じ部屋にいたとなると、尾行の技術は優れているようである。

「な、何でオレらだけなんだ!? イチシが行かなくていいなら、オレたちだって行く必要ねえだろが!!」

「マデイラ様のご命令よ。あなたたちに選択権はない」

ピケはレアデスとは違つて、堅物な印象を与える女だつた。
自分勝手に動くあの男のパートナーとは、さぞや大変な事だらう。

「くそう、やつぱ行くしかねえのか でもよ! 何話したらいいんだ!? バレちまうんじやねえか!? オレらがヴィーツリー人じやねえつて!」

ジンといつ男は、高級なものに心底アレルギーがあるようだ。確かにイバ教においてランドクレス国王は竜神の子孫であり、神の子孫であるという位置づけではあるが、実際はただの人間であるうに。

「ジンが言わなければ別にバレないだろ。」資産国の中でもヴィーツリーを選んだのは、あの国は元々農耕民族の集まりで つまり、なんだ」「なんだってなんだ」

面と向かって、この大陸の国家の中では《成金の田舎者》と呼ばれているとは言いくらい。

「オレたちが《資産家》になるのに、一番”近い”国つて事を」

国立図書館にあつたあの美的感覚に狂つた《検索くん》を思い出し、自分たちが《ヴィーツリー国》の《資産家》といつ肩書きを用意された意味が分かった。
あんなふざけたものを他国に『贈る』するくらいだ、とかかし悪趣味な国なのだろう。

「よく分からねえが バレないんだなー?」
「そんなに動搖したら怪しまれるぞ」
「バレるのかー!」
「だから動搖するなど 」

ジンが珍しく面倒臭い事になつてるので、リュクシーは顔を顰めた。

「放つところが」

イチシが言つので、ジンの事は放置しておく事にした。

そう、今はまだ、今日起きた事の全てを整理しなくてはならないのだ

「ヘル、ジンを頼むぜ」

「あ、うん」

離れた所でこちらの様子を伺つていたヘリオンに、イチシは声をかける。

リュクシーと視線が交わると、彼女はやはり気まずそうに別の方を向いてしまった。

(ヘリオンには好かれていないらしい)

それは分かつていたが　　リュクシーにはどうしようもなかつた。

そういうば、昔からリュクシーには女友達がない。

女同士とはいえ、ヘリオンと何を話せばいいのか分からなかつた。嫌われているなら、尚更な事だ。

「向こうで話そつ」

イチシたちが泊まるのは、主寝室が3つある豪華なスイートルーム

である。

落ち着かないジンは居間に置き去りにして、一人は寝室に移動した。

酒の抜け切らないイチシは、ドサリとベッドに倒れると、天井を仰いだ。

リュクシーはベッドに浅く腰掛けると、今日起きた事を色々思い返してみた。

「クレスト＝ショトラの事だが

何度も思い返しても やはり同じ顔だ。

「私はあの男を知っているようだ ただし、15年後の

「どういう意味だ？」

イチシは上半身を起したが、またすぐ仰向けに寝転がってしまった。

「ドーナ・シユラウドの顔と同じだった。シユラウドの方が老いてい

るが

「どういつ事なんだ？」

そんな事はリュクシーが聞きたい。

「酒場でマティラが色々言つていたが クレスト＝シートラが故人であるというのは確かにようだつた」

「オレもそう思うぜ」

シェイドの力を知り、自分が特別な存在になつたんだと浮かれていたあの頃 気付きもしなかつた事実が、今のイチシには実感としてあつた。

クレスト＝シートラは、シェイド体であつたに違ひない。

図書館で見たクレスト＝シートラも、遠い昔のただの残像 あ
れは生きていない。ただの記憶だ。

「だとしたら シュラウドは何者なんだ？イチシ、お前はどう思つ？自分のシェイドが2つに分かれて、別々の存在として生きていけると思つた？クレスト＝シートラは多重人格者だつたのか？」

それとも クレスト＝シートラは確かに死に、肉体だけを誰かが……そう、誰かが利用しているのだろうか？例えば人工脳を植えつけて？

だとしたら、クレストの肉体を支配し、利用している存在とは誰なのだ。

「シユラウドの肉体は、生きている。これだけは確かだろうな…シユラウドは現在進行形で老いている。あの体は生きている」「バカげてるな」

イチシが吐き出すよつよつぶやいた。

「オレの体の中に在るのは、オレ自身のはずだ。誰かの体の中に在る者が誰かなんて 考える事になるとは思わなかつた」「バカげていい、か 」

一致するのが当たり前だと、リュクシーも思つてきた。

多重人格により、操るシェイドが変わる事例は見た事があるが、多重人格のどれもが、本人から形成された人格である以上、どの人格もその人物であると言えた。

まるつきり知らない存在が、介入してくる事なんてあるのだろうか。だがしかし シェイドを研究する段階で、そのような実験がかつたのかもしれない。

ラジエンダ＝テーマパークの実験体たちは、体に色々な機能を加え、新たなシェイド体を作るのが目的だつた。
実際、翼を植えつけられたカライは、空を飛ぶ事ができた 人間の機能を超える事ができたのだ。

シェイドでも同じ実験をしたとして、在り得ない話ではない。

複数の人格を1つの肉体に押し込め、超越した人間を作り出す。メダリアなら、やりそうな事だ

リュクシーは自分の手を見つめた。

生まれてからずっと、共に生きてきたこの体 これはリュクシ

ーのものだと思ってきた。

それが当たり前だと思っていた。

だが違うのか？

リュクシーの心も、いつか此処を離れ、彷徨う事になるのだろうか。

ギュッ

！

イチシがリュクシーの手を力強く握り締めた。

考えている事が分かったのだろう リュクシーはここにいる。

そう実感させてくれる痛みだった。

「つー、痛い、離せ」

リュクシーはイチシの手を振りほどいた。

すると、イチシはベッドを這いながらリュクシーに寄ると、そのまま抱きついてきた。

まるで母を慕う幼子のようだ。リュクシーの腹におでこをぶつけ、今度は横顔を当てる。

リュクシーの腹　　それに触れると、イチシはまた考へてしまつ。ここにある可能性の事を。

「どうぞこしら　　マティラは言つていた。クレスト＝シエトラは今回の作戦には関係ないと。生き延びた先で考へると言つていた」

それが　　マティラが約束した、『リュクシーだけが生き延びる道』なのだろう。

イチシには分かつてしまつた。

「シユラウードとクレストの関係はとうあえず忘れよつ。他に重要な事がある」

「分かつた」

イチシはリュクシーの膝枕につつ伏せたまま、動じつとしない。

ふと、イチシの髪を撫でてみる　　外にいた頃と変わって、洗髪されたきれいな黒髪だった。

「ドーラセナ＝ロナスは、マティラの娘だと言った。一人は同じ火災で死んだと思う」

リュクシーは塵に等しい情報から、必死にマティラの生きた時代を思い描こうと試みた。

子供たちを集め、繰り返される人体実験。その中にいた血縁者。

母と娘　　だがそれは、ジンとヘリオンのような、固い絆で結ばれたものではなかったはずだ。
ジンだったら、ヘリオンを人体実験の道具に差し出すなんてあるはずがない。

愛されなかつた子供。愛せなかつた母親。

やがて一人は同じ時、同じ要因で肉体を失い、魂だけが現世に残る

そして14年の月日が経つた今、子供は魔人へと墮ち、自らの手で決着をつけようと母親も《人》である事を捨てる。

(気のせいか 何だかしつくり来ない)

指先でイチシの髪を弄びながら、リュクシーは考える。

リュクシーはドラセナ＝ロナスを見た事がないが、想像する人物像とイチシがどうしても重ならない。

ドラセナがイチシを選び、取り憑いたというのなら、一人には共鳴する部分があるはずなのだ。

(そうか あの時はまだ)

イチシがドラセナ＝ロナスの接触を受けた時 リュクシーはまだ、イチシを選んではいなかった。

リュクシーはカライト向き合い、悩み……そして決断したのだった。

死への恐怖と孤独から、イチシが狙われたのだとしても 今のイチシが同じ精神状態だろうか？

人の心は絶えず動き続けるもの。

自分以外のシェイドと共鳴するなど、限られた瞬間だけに許された奇跡なのだ。

(そもそも　　ゴーデチャヤでも火災は起きた。中心にイチシがいた。
だが、大火災には至らなかつた)

ゴーデチャヤの耐火体制が優れていたのか、ドラセナ＝ロナスとイチシの共鳴率が低かつたのか　　どちらにせよ、あれは『失敗』だろう。

ドラセナ＝ロナスは恐怖を再現しきれなかつたのだ。

(時計塔で再現しても　　果たして今のイチシにシンクロするだ
ろうか)

マティラでさえも、その可能性に気づいていない　　イチシと同
化できなければ、そもそもこの作戦は成立しないのだ。

イチシの中の空洞が全て別のもので満たされて、ドラセナ＝ロナス
など入り込まないようにしてしまいたい。

リュクシーはそんな事を思つたが　　メダリアは別の依りましを見つけるだけだろう。

(それでも　　イチシは助かる)

何だか自分がすぐ汚い感情を抱いた気がして、リュクシーは悲し

くなつた。

他の誰かを犠牲にすれば、イチシは助かるかもしない
はどうしてこんなに自己中心的な性格になってしまったのか。

「くすぐったい」

断続的に襟足を撫で続けるリュクシーの手をどけると、イチシは起き上がりリュクシーを見つめた。

自己中心的でも それが真実だった。

自分を見つめるイチシの瞳がそこに在り続けるのならば、リュクシーはきっと、どんな犠牲だつて厭わない。

（生きていて欲しいんだ イチシに）

一人はそつと口付けし合つと、お互いの体温を確かめるように固く抱き合つた。

このまま同化してしまいたい イチシの中をリュクシーで満たしてしまいたい。

そうすれば、ドラセナ＝ロナスも誰も、手出しへできなくなる。

一人のショイドは一つになる。

イチシは 逆の事を考えていた。

田に田に、一人の繋がりが強くなる リュクシーが愛しくてたまらなくなる。

だが、それではいけない

二人のシェイドが溶け合えば溶け合つほど、イチシがいなくなつた時、リュクシーは立ち上がれなくなる。

イチシもリュクシーを置いていけなくなる。

自分は、リュクシーを縛り付ける亡靈にはなりたくない。

(どうすれば あんたは分かつてくれる?)

自分を抱き締める腕の力に、リュクシーの気持ちが痛いほど伝わってくる だが、イチシだってリュクシーには生きていて欲しいのだ。

たとえ自分がそばにいられなくなつたとしても リュクシーには生き続けて欲しい。

「今日はもう遅い。病院に戻れ。明日は検査を受けてから来い」

イチシはリュクシーの両肩に手を乗せ、自分から引き離した。

「病院まで送る」

「……いい。一人で戻れる」

イチシの心に壁を感じた イチシが決意をした時から、ずっと
感じていた事だった。

イチシは諦めている 共に生きていく事を。

「イーバエルジュだからって、女が夜に出歩くな。送る」

「いらない。狙われているのはイチシだぞ。病院からホテルまでの
帰り道、一人になってしまつだろ?」

イチシがどういうつもりだろ?と関係ない。
リュクシーは決して諦めない。絶対に イチシにも分からせて
みせる。

「こりないからな

反論しようと口を開きかけたイチシより早く、リュクシーは言ご切つた。

眉間に皺を寄せているのを見て、イチシはつぶやく。

「何で怒ってるんだ？」

「別に怒っていない」

明らかに怒っていたが、この話題は終わらせた方がよむつだつた。

「じゃあ、その代わり 明日の検査、必ず受けよう。正午にまた時計塔の前にいる」

「……別に何も出やしないの」

「受けろ。いいな」

言つ事を聞くよりしないリュクシーの額を指で弾く。

「 分かった」

渋々と承諾したリュクシーを見て、イチシの中にはまた複雑な感情が広がる。

明日の正午にははつきりする 不安だが、中途半端な気持ちでいるよりはマシに違いない。

「ホテルの下まで送る」

「いらない。この部屋から出るな」

イチシが一人きりの瞬間は、1秒でも作りたくなかつた。

夜のイーバエルジュは人通りも少ないから危険だ。

人には襲われなくても、魔人に取り憑かれてしまうかも知れない。

「なんだリュー、どうか行くのか」

「今夜は病院に戻る」

寝室を出ると、ジンが声をかけてきた。

「そうか、イチシしつかり送つてやれよ」

「送りはいらない。どうせ捕縛士の尾行が付く」

ジンも何か言おうとしたが、リュクシーは既に部屋の扉を開けていた。

「明日、頑張るんだな。ジン」

「くー、行くしかねえのか……」

憂鬱な事を思い出したのか、ジンが呻いた。

「じゃあな。おやすみ」

「ああ。仮を付けるよ

おやすみ」

一人帰つて行くリュクシーの後姿を見て、イチシは思つ。

もし、リュクシーに新しい命が、自分の分身が宿つていたらどうなるのだろう。

イチシには殺せない　　自分の運命の道連れにする事はできない。

リュクシーはきっとイチシの答えを分かつてゐる。

分かつた上で、イチシから離れようとしないだろう。

でもイチシは　　どうしても、リュクシーには生きていてほしい。愛しているからこそ、暗い死の世界ではなく、この世界で生きていてほしい。

もちろん、自分自身もリュクシーのそばにいたい。叶う事ならば、生きていきたい。
生きる事を諦めたいわけじゃない。

だが、近い内に必ず訪れるであろう死を前に、《その時》のことを考えないわけにはいかない。

「じゃあ、リュクシーは理解してくれるや。どうしたや……」

「なあ、イチシ。時計塔のそばに教会があるんだろ？」

扉の前で佇むイチシに、突然ジンが話しかける。

「そこで結婚式ってヤツがあるやしね。お前、明日朝ヒマなんだろ。見に行つとけ」

「結婚式なら見たぜ。教会の前に人だかりが出来てた」

何故唐突にこんな話をするのか、イチシには理解できなかつた。イチシたちにも結婚式を挙げさせつもりか？

結婚式とは、お互にを唯一の伴侶として誓い合ひの儀式だといつ。そんな儀式をすれば、リュクシーはますますイチシから離れられなくなる。

イチシだって、リュクシーを離したくなくなる。

「教会の外に出るのは、式が終わつた後だ。式を見るんだ、式を。

それじゃなきゃ意味がねえ」「式に何かあるのか」

イチシの問いかけに、ジンは頭を搔きながら答える。

「オレは正式な結婚式つてヤツは見た事ないけどよ。誓いの言葉くらこは知ってるぜ」

何だかんだ言つても、ジンもかつては妻帯者、恋愛の儀式の知識も多少は持つて居るのか。

「知つてゐるなら、今言えよ」

「オレのは又聞きだから正式じゃねえ。せつかく結婚式の本場にいるんだ、本物を見とけ。いいな、見に行けよ。じゃあ、ヘルソロソろ寝ねがれ」

一方的に告げると、ジンはヘリオンに向き直った。

「うそ、おやすみ」

「…………。あんまり夜更かしするなよ」

本当は一緒に寝たくて声をかけたのだと思つたが、ヘリオンに軽くかわされ、ジンは頭を搔きながら一人寂しく寝室へと去つて行つた。

「ヘリオン、寝ないのか」

何か言いたそうな顔をして、でも視線を合わせさせまいはず、ヘリオンはそこにいた。

ふと、リュクシーと出会った頃の自分も、こんな顔をしていたのだろうかと思う。

気になつて仕方ないのに、うまく伝えられない。

「ねえ、イチシ　　あの人は本当に信用できるの？捕縛士たちの仲間じゃないの？」

リュクシーの存在に納得し切れてないヘリオンは、決して自ら心を開こうとはしなかった。

いつもジンの後ろに隠れ、リュクシーを観察しているのを知つていた。

「あの化け物は、本当に捕縛士と関係がないの？本当に？」
「《本当》なんて誰にも分からぬいぜ、ヘル」

イチシだつて分からぬい　　何も、分かつていぬ。

「問題は、何を信じるか、だ。オレはリュクシーを信じている。だから、ヘルはヘルが信じたいものを信じればいい」

イチシの瞳に迷いはなかった だからヘリオンは啞つた。

「そう 本当に信じているんだね、あの人の事。だったらボクも 信じるよ。イチシの大切な人を信じる」

「そうか。 ありがとう、ヘリオン」

イチシは優しく微笑んだ。

その笑顔を見て、ヘリオンは胸が痛むのを感じた。

() イチシの事、諦めなくちゃいけないんだね

自分には何もできない。ジンに守られていふ事しかできない。イチシには釣り合わない ヘリオンはようやく認める事ができただつた。

「ボクももう寝るね。おやすみ、イチシ」

「ああ おやすみ」

目から溢れそうになつたものを見られたくなくて、ヘリオンは逃げるようにジンの元へと去つて行つた。

(そう ヘル。お前も信じてやってくれ)

ジンと二人でリュクシーを支えて欲しい
なくなったとしても、
たとえ自分が消えて

翌日、約束の時間よりかなり早めに時計塔の前に来たものの、リュクシーの姿はなかつた。

約束通り、病院で検査を受けているのだろう ただ立つて待つていると色々考えてしまいそうなので、イチシは公園内を少し歩く事にした。

ふと、ジンの言葉を思い出し、教会の方に向へと歩き出す。

今日は結婚式は行つていなうやうだつた。

教会の扉は開いていて、中には教会の内装を見学している観光客がちらほらいるようだつた。

信者でもない自分が入つていいのだろうかと一瞬思ったが、信者でもない旅行者が結婚式を日当てに観光に来るくらいだ、特に問題はないだらうと足を踏み入れた。

(特に何もないな)

古い靈的な場所を訪れると、既に生前の形を失ったシェイドエネルギーを感じる事があるが、ここには何も感じない。

やはりここは、ただのイベント会場に過ぎないのだ。宗教的な儀式の場ではない。

イチシは奥へ進むと、祭壇近くのベンチに腰を下ろした。

祭壇には、大きな龍の彫り物が祭られている。ランドクレスの水神だ。

蛇のような長い体をしならせて、皮膚には水をまとうその姿は、彫刻として素晴らしい作品ではあると思うが、それ以上の意味はイチシには感じられなかつた。

「すみません、式を挙げていただきたいんですけど…」

その時、男女の一人連れが、祭壇横の控え室にいる教師に声をかけた。

どうやら昨日見たような大々的なものではなく、簡素な式も挙げられるらしい。

参列者を招いて派手に祝うのは一部の特別に裕福な者だけで（ランドクレスに観光に来る時点である程度は裕福なのが）、そんな財力のない恋人たちは、一人だけで式を挙げるのが定番なのだろう。

「分かりました。では、簡単ですが準備をいたしましょう」

教師は娘の頭に真っ白なヴェールを乗せ、白い花を飾りつける。青年の頭には、水神の彫り物を施した額宛てのようなものをはめた。準備はこれだけだった。

「イサ、鐘を」

教師が合図すると、鐘付きの男が表へ出て行く。式を始めるといつ証に、屋上にある鐘を鳴らすのだ。

「では、祭壇の前へ」

二人を後ろに従えて祭壇の前にやつてきた教師は、教会内にいる観光客たちに向けて言った。

「ここで巡り合つたのも水神様の縁、この二人の愛の誓いを皆様も祝福してやつてください」

観光客たちは皆、参列者が座るベンチへと腰を下ろし、式が始まるのを見つめる。

「では、Hくンー。」

教師は咳払いをすると、誓いの言葉を唱え始めた。

「命を司りしイバの娘マリカラリアよ、御名の下に愛を誓いし一人が訪れました

」

教会で時間を潰していたら、結構時間が経ってしまったようだ。
とはいっても、まだ午前中ではある。

待ち合わせ場所に向かうと昨日とは変わって時計塔の足元に、短い

影が落ちていた。

日影には爽やかな風が吹いている。

公園に設置されたベンチには、観光客の姿が見えた。

日影の中心に、リュクシーは一人立っていた。

イチシが待つ予定だったのに、逆に向こうを待たせてしまったようだ

だが待たせた言い訳ではないが、この時間は無駄ではなかつた。

イチシの胸には、一つの決意ができた。
リュクシーがこれから何を言おうと それが自分の出せる唯一の答えだと思った。

「リュクシー……」

ありつたけの大声で呼ぶと、リュクシーが振り向いた。

その瞬間に 視線が合つただけで、イチシには分かつてしまつた。
愛しくて抱き締めたい やはり自分の運命の相手はリュクシー

だつたのだ。

一人の間に子を成したのがその証だ。

イチシは自分の感情に逆らう事をしなかつた。
駆け寄ってきた力一杯リュクシーを抱き締めた。

「 走るな、妊婦が」

その言葉に、自分の顔を見ただけでイチシは何もかもが分かつてしまつたのだろうと、リュクシーは思つた。
不安が現実になつた 現実になつてしまつたのだ。

「 来い、リュクシー」

「 イチシ?ビニへ行くんだ?」

イチシはリュクシーの手を引くと、真つ直ぐにある方向へと歩き出した。

「　　イチシ?」

イチシは何も答えない
があつた。

だが、彼の目指す先にはイバ教の教会

(イチシ?)

イチシが何をしようとしているのか、それは何となく想像が付いた
が、何故急にイチシが心変わりしたのか　　それはやはり二人の
間に新たに命が宿つたせいなのか　　新しい命とはそれほどま
でに人に変化をもたらす事ができるのかと、色々な感情が沸き上が
つてきた。

だがその感情たちは、不快なものではなかつた。
イチシが生きる意志を繋いでくれるかもしれない
リュクシーにとって、一番うれしい事だつた。

それは今

教会の中には数人の観光客と、イバ教信者らしき者が床の拭き掃除をしているだけで静かなものだった。

イチシは1時間前に見た恋人たちと同じように、祭壇横の教師の控え室のドアを叩き、返事を待たずに関けた。

中には口元をもぐもぐと動かした教師が、ぎょっとしたような顔をして慌てて立ち上がる。

どうやら早めの昼食の時間だつたらしい。

みつともない姿を見られたと思ったのか、一瞬反対側を向いて、慌てて口の中のものを飲み込むと、澄ました顔で客人に向き直る。

「何か御用ですかな？」

「式を挙げたい」

イチシが告げると、教師はまたあの尊大そうな咳払いをした。

「分かりました。では、簡単ですが準備をいたしましょう」

そばにあつた布巾でさりげなく手を拭くと、部屋の隅に置かれた胸像にかけられた額宛てと、ヴェールを手に取る。

リュクシーは言葉もなく、自分にヴェールがかぶせられるのをただ

見ていた。

イチシも無言だった

額には、ランドクレスの水神の紋章が飾

られた。

「では祭壇へどうぞ」

リュクシーはイチシの顔を見た

イチシは深く頷いた。

「行こう」

これは イチシが生きる事に奮起してくれたと考へてもいいの
だろうか？

お互いを唯一と誓い合う儀式 それをリュクシーとしようとい
うのだ。

そうとしか考えられない リュクシーの中には安堵が広がった。

二人は祭壇の前に辿り着くと、教師と向き合つ。

「ここで巡り合つたのも水神様のご縁、この二人の愛の誓いを皆様も祝福してやつてください」

教師は背後にいる観光客たちに声をかけると、再び咳払いをした。振り返り、祭壇に祭られた水神像に一礼する。

「命を司りしイバの娘マリカラリアよ、御名の下に愛を誓いし一人が訪れました。彼らの搖るぎなき心の証を母なるイバより受け賜りたまえ」

神聖なる言葉を唱えると、教師はイチシたちに向き直る。

「汝の名は？」

「イチシ＝タカツキだ」

「そして汝は？」

「リュクシー＝シンガプーラ」

「よひしー」

教師は祭壇に供えられた聖なる水を一人の頭に振りかけ、耳元には供物の白いララックの花を一輪ずつ挿した。

「イチシよ。そなたはリュクシーを唯一の伴侶とし、富める時も病

める時も、生と死が一人を別つまで共に生きる事を誓つか?」

教師の言葉を聞いた時、リュクシーの体は凍りついた。

イチシは　　リュクシーに誓わせようとしているのだ。
こんなにも残酷な運命を。

『生と死が二人を別つまで

』

これは愛の誓いなんかじゃない。

リュクシーにとつては絶望の誓い以外の何物でもなかつた。

「イチシ？^誓つか？」

教師の再びの問いかけに
イチシの顔を見つめていた。

リュクシーはすがるような想いで、

イチシは本当に誓つ氣なのか?
本当に?

だからこそリュクシーをこの場に連れて來たのだと、嫌と言つほど
分かつてはいたが、絶対に信じたくはなかつた。
生と、死　二人はそんなもので引き離されなくてはならぬないの
か。

「ああ……誓つ」
搾り出すよつて言つたイチシは、もうココクシーから田を逸らさなかつた。

生きる、と　自分がいなくなつたとしても、リュクシーは生きると。
イチシのシェイドを断ち切り、生きていくと　頬に伝つ涙が、
リュクシーを見つめる強い意志が、全てを物語つていた。

「よろしい。ではリュクシー」

教師の言葉は何も分からなかつた。

リュクシーの頬にもイチシと同じものが伝っていた。

二人はただ見つめ合う　　言葉などいらない。

お互いのシェイドを感じれば、何もかもが理解できた。

「リュクシー？」

何度も問い合わせても何も言葉を発しないリュクシーに、教師が戸惑つた表情を浮かべていた。

誓いの言葉の後に感極まって泣く恋人たちはたまに見るが、誓いの言葉の途中で進行できぬほどに泣き合はるのは初めてだった。

リュクシーのこの時の想いを 誰も推し量る事はできまい。

自分でさえも溢れ出す感情は抑えきれなかつた。
全ては滴となつて、瞳から零れ落ちた。

「リュクシー？ そなたは誓うか？」

何度も問い合わせに、リュクシーは現実に戻ってきた。

リュクシーは答えなければならぬ。
イチシのこの想いに。

リュクシーはゆっくりと口を開いた。

「私は

」

2回目の分岐です。

…が、執筆中の為、まだ先に進めません。

どちらを先にヒヤシょうか模索中なので、こっちを先に見たい！…
なんて感想をいただけると喜びます。

分岐型にしておきながら、まだまだ途中段階で申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3232d/>

SHADE-I

2010年12月30日02時29分発行